クスリ

## 前フリ

今回は1章ずつ追加していこうと思っています。夏休みが一番楽しかったのは中学じゃなかったかな。携帯もゲームもパソコンも無かった時代、でもワクワクする事はそこら中に転がっていましたね。
有料化も考えていますので、お含みおきください。
次ページより本文です。お楽しみください。

「健ちゃん釣れたかあ」
向こう岸の方へ回り込んでいた正雄が戻って来た。
「釣れたぞ、待ってろ」
「早く見せろよ」
「だめだめ、もう少し弱らせてからじゃないと、糸が切れちゃうよ」
健太が竿をしならせながら、右へ左へと動かしている。
「大物だなあ、なんだろう、鯉かなあ」
「良くまだ分かんないけど、タモ出して、早く早く」
正雄が慌ててタモを取って水辺で待ち構えた。
「やっぱり鯉だ、黒い背中が見えた」
健太が笑いをこらえながら、正雄めがけて力いっぱい竿を引くと、大きな靴の鯉が飛んで行った。水と泥で汚れた顔をポカンとさせている正雄を見て、健太の笑い声が弾け飛ぶ。乗っている木の枝が揺れ、ずり落ちそうなほど体をよじっている。
「正ちゃんご免ご免、アハハハハ」
始めムッとしていた正雄も笑いながら木を揺すり出した。
「ご免、悪かった、アハ、落ちるよーっ」
半分落ちかけた健太が雄叫びを上げながら池に自分から飛び込み、パチャパチャと泳ぎ出した。
「正ちゃん来いよ、気持ちいいぞ」
「早く上がれよ、大人が向うから来たよ」
　健太が音を立てないように平泳ぎで戻り、這い上がる。首を上げてみると、誰も大人なんか来ていなかった。二人が又笑い合った。健太が脱いだ服を木の枝に掛け、パンツも脱いだ。それは乾さずに絞ったままで又履いている。岸辺で足をバシャつかせている正雄の所へ戻ると、水辺の泥に足を潜らせ、スッポン、スポンと抜きながら歩き回り始めた。
　雲は遠くにポッカリと浮かび、申し分のない夏休みだった。泥歩きに飽きた健太も岸に上がり、並んで腰を降ろした。健太が歩き回って濁った水が徐々に澄み始め、黄色の泥の中に足跡が黒く現れてきた。時折吹く風がそれを見え隠れさせている。
「正ちゃん、この街にさ、溜め池がたくさん在るだろう。こう、なんか並んでると思わんか」
健太の目の先には泥がすっかり沈んだ底に、点々と続く足跡が在った。
「ほら、この足跡のようにさ、でっかい足跡みたいだと思わんか」
「溜め池がか、足跡って？」
健太がニヤリと一笑いをくれる。
「ずばり恐竜の足跡」
　一本杉に風が当たったらしく遠くで揺れた。掛けた服もパタパタと揺れ、榛の木の葉もそよいだ。
「恐竜？」

正雄が呟く。
「またそんなほらこいて」
所々でさされている水面から離れるように、正雄も健太も土手に仰向けになった。高い雲は薄く、次ぎ次ぎに形を変えて流れていた。二人とも始まったばかりの夏休みの浮かれた気分に浸っていた。
　この街は人口10万位の地方都市で、この辺りは農村だったが街の発展とともに合併され、開発も進んみ、半農のベッドタウンになってきていた。機械化された稲作には人手は普段ほとんど掛からず、水田に人気は無く、しかもその中に更に取り残されたように溜め池が点在していた。
「健ちゃん、明日図書館へ行ってみよう」
恐竜などと言い出した健太も口数が少なくなっている。
「じゃあ9時ね」
生乾きの服を着ながら健太が答えた。

　「何なのこの子は、変な子ね、ボーとして。ご飯だからテーブルの上、片付けるのよ」
健太は帰ってから漫画を開いては閉じ、ゲームを始めても指が動かず、テレビを見ていた。
「やだ、この子ったら本当に変だわ、ニュースなんか見て…無いか」
焦点の合っていない健太の目の前で手を振りながら、姉の桂子が覗き込んできた。
「熱は無いようね、あなた、ひょっとして、オチンチンに毛が生えてきたんじゃないの」
いつもならここで大騒ぎになるところなのに、姉をチラッと見ただけでテーブルを片付けだした。これは毛じゃ無い、きっと好きな子でもできたに違い無い、と思いながら母親を見ると、母親はまるでそ知らぬふりで食事の支度をしている。
「お母さん、俺、明日、正ちゃんと図書館へ行くから」
「どうしたのあんた」
桂子は後の言葉が続かず、健太を見たり、母親を見たり、視線が定まらない。
「何時」
「9時」
二人の事務的なやり取りを桂子は不思議な物でも見るようにして見ていた。
　その夜の食事は帰ってきた父親だけが妙にはしゃぎ、残りの三人は空返事をしながらそれぞれの思いの中に沈んでいた。
　健太の頭もズーッと空回りばかりしていた。考えも、イメージもまとまらず、迷路の中で空を見て出口を探している感じがした。モヤモヤした物がスーッとまとまりかけてくると、次ぎの瞬間、又バラバラになってしまっている。恐竜の絵でも描こうかとスケッチブックを開いてみたものの、少しも筆が進まない。
「タメイケドンてどんな恐竜なんだろう」
ニュースナインの時間です。居間のテレビの音がドアの隙間から漏れてきている。
「タメイケドン…、あ、この恐竜、タメイケドンていうんだ」

健太がスケッチブックにタメイケドンを描き始めた。さっきまでのもやもやが嘘のようにどんどん描けた。
　太い後ろ足二本で立ち、背中には山型にしっかりした鰭が付き、つるりと丸まった頭にはトサカのような鰭のような物も付いていた。体中に赤や黄や緑で渦巻きのような、縄文土器のような模様が付いている。
「健太、歯、磨いた？夏休みだからって、いつまでも起きてちゃだめよ。明日、正ちゃんと図書館へ行くんでしょ、早く寝なさいよ」
「はあい」
母親に邪魔されないように特別いい返事をして、さっさと歯を磨いて、ベッドに潜り込んだ。寝返りを一つ打つと、期待に反してタメイケドンの夢も見ないで朝までぐっすり眠ってしまった。

「なんだ健ちゃんもう来たんか」
「健ちゃん図書館だって、お赤飯でも炊かないとね」
正雄の母親に笑い掛けながら、ぐずぐずしていると、もっとからかわれてしまうと思い、健太は正雄を急かした。
「早く行こう、ブラブラ行けば丁度いいさ」
健太は何よりも早く、正雄にタメイケドンの話しをしたくて、うずうずしていた。
「わるいわね健ちゃん、孝も連れて行ってやってね」
「いいよ、おばさん、孝ぐらい連れてくさ」
孝の事なんか眼中に無く、早く出掛けたくて正雄を促し、孝を顎でしゃくって家を出た。
　健太が歩きながらスケッチブックを開き、正雄に見せた。今までの分を取り戻すかのように、次ぎから次ぎへとタメイケドンに付いて話し出す。

　ホルンのような低い伸びのある声を出し、タメイケドンの鳴き声も真似てみせている。健太は話しに夢中でどんどん先に行くし、孝は道草を食おうとするし、正雄はあっちこっちで四苦八苦していた。
　三人は日陰よりも日向を選んで歩いている。9時前といっても夏の日差しは強く、容赦なく三人に照り付けている。健太と正雄は麦藁帽子の顎紐を帽子の上で結び、ツバを力ウボーイハットのように上にしならせていた。孝だけは普通に顎に紐を掛けていたが、ツバを少しは上にしならせている。兄達のようにしたいのは山々だが、ブカブカの帽子が風ですぐに飛んでしまうので、いつも紐を顎に掛けておけと、母親に固く言われていた。
　時折通るダンプの風が二人の帽子にも襲いかかり、慌てて押さえたりしている。
「正ちゃん、バス賃貰ったか」
バス停が見えた所で健太が言った。
「うん五百円」
「じゃあ歩いて行こうぜ。孝、これから見る事聞く事、全部秘密だからな」
健太は孝の手をスケッチブックの上に置いた。
「私は神と法の前で、すべての事を秘密にする事を誓います」
神妙な顔付きの孝にも繰りかえさせた。
「正ちゃん恐竜の話し、誰かにしたか」
「誰にも、健ちゃん良くそんなに思い付いたな。俺全然イメージが湧かなかったよ、ほら忘れた事を思いだしそうで喉まで出かかってるってやつ。昨日は帰ってからずっと調子悪かった」
「俺もそうだったけど、タメイケドンって名前が浮かんだら後はつるつるって出てきちゃった」
そう言って健太は孝の方を見て、もう一度念を押した。
「いいか孝、絶対秘密だからな」
孝はさっきスケッチブックの誓いを立ててから道草を食おうなんて気はどこかへ行ってしまい、ただひたすら健太の言動に注目している。恐竜と聞いた途端、ピッタリと二人の後に張り付いていた。その目をまん丸にして必要以上に頷いた。
「タメイケドンて何食ってるんだろう、肉食かな、草食かな」
「そこんとこ俺もはっきりし無いんだけどさ、なんでも食うんじゃない。肉も野菜も、果物もさ、なんでも食わなきゃ大きくなれ無いんじゃない」
「そんな恐竜あまり聞いた事無いな、それに恐竜の時代には果物なんて無いんだよ」
「え！」
「でもタメイケドンが最後の方の恐竜だったら食べたかもしれないよ。そのころ被子植物が出来たんだから」
「へーそうなんか、全然知らなかった。じゃあ草食だと何食ってるんだ、葉っぱだけかあ」
「そんな事無いさ、果物の他にもいっぱい在るじゃない。木の皮や根っ子、それに種もあるしさ。松の実なんか今だって食べてるだろう」
「あっそうか、松って裸子植物か。ところで図書館に何しに行く、恐竜の本でも見るんか」

「それも見るけどさ、地図見よう、溜め池の在る所が分かるだろう」
正雄がハッと気づいて後ろを見ると、大汗をかいて必死に付いて来ている孝がいた。健太に、もう少しゆっくり行くようにと催促する。
　もう街の商店街に入っていた。七夕飾りのようなキラキラがあちこちにぶら下がり、店員が店の前を掃除していたり、トラックに荷物を積んだり、卸したり、結構忙しそうにしている。朝9時のせいか、まだシャッターの下りている店も所々にある。郊外に大型のスーパーが出来、ここの商店街も大変だと、大人達が話しているのを健太は思い出していた。たまにしか来ない玩具屋のシャッターが開いているのが見え、ホッとしてショーウインドーを見ると、いつものラジコンのエンジンボートが飾ってある。欲しくても買って貰えず、いつも見るだけだった。
　このアーケードの商店街を抜けると、もう直ぐ図書館になる。かれこれ1時間近くも歩いただろう。孝はもうぐずり出す寸前だった。大きな銀杏の木のある図書館に着く頃には正雄が孝の手を引いていた。
　閲覧室は冷房がきいていた。ハンカチを使う間もなく汗が引いていく。先ず孝を席に着かせた。夏休みが始まったばかりのせいか図書館は空いていた。孝が亀の子のように首をすくめて様子をうかがっている。正雄が取り合えず漫画を持ってきて孝に与えた。
「地図っていったって無いよ、なんだか大きいのばかりで、この街のは無いんじゃないか」
「じゃあ俺聞いてくるから、健ちゃん恐竜の本探してなよ」
正雄は何度も来た事があるらしく、受付の人に聞き、奥の郷土コーナーへ歩いて行った。直ぐに地図を持って戻って来ると正雄が地図をめくりだした。
　この街も大方と同じように農地が少なくなってきていた。しかしまだまだ緑も多く、幹線道路の周辺開発や、脈絡もなく田んぼの中にポツンポツンと住宅が点在しているだけだった。溜め池はと言えばそんなに多くも無く、大した意味も無いように正雄には思えた。
「正ちゃん。恐竜って色んな奴がいるんだなあ、皆でかいのばかりかと思ってたけど、小さい奴もいるし、めちゃ面白いぞ」
健太が自分の描いた絵と同じ二本足で立っている恐竜のページを開いて、得意そうにやって来た。
「溜め池はそんなに無いよ、それに足跡なんて感じはしないけどなあ」
健太も地図を覗き込むと眉にしわを寄せ、せわしなく目玉を動かして見入っている。
「でもこの池なんか足跡に似てるけどなあ」
机に置いた恐竜の本を孝が見ているのを取り返し、足跡のページを探し出す。
「ほらここに出てるだろう。トラックウエイって言うんだってさ」
見ると水鳥の足のような、三本指がつながったような曖昧な形をしている。
「似たような形の溜め池もあるけどさ、本のはほら、歩いて来たって感じがするけど、地図の溜め池はなあ、歩いたって感じじゃ無いよ。健ちゃんの付けた足跡だって、こう、つながっていて、いかにも足跡だったもんな」
冷房で冷やされた汗と一緒に何もかも冷やされてしまったような、白々とした沈黙があった。孝だけが目を輝かせて恐竜の本をめくっている。

「だけどさ」
「君達、お話しするんだったら談話コーナーでしなさい」
受付のお姉さんだった。見ると席が半分ほど埋まり、こっちを見ているおじさんもいる。健太は頭を掻き掻き、談話コーナーの方へ移動を始めた。
「孝、その本持って健ちゃんの後付いて行け」
孝が慌てて立ち上がり、その拍子に立てた椅子の音で、又おじさんが睨んだ。正雄が漫画を返し、談話コーナーへ来てみると健太がさっきの気落ちから一転、元気を取り戻している。正雄は健太が何かを思い付いたのを感じ、こうなると結構執念深い健太に、この夏休み中付き合う事になるのかな、などと漠然と思った。
「フフフフフ、ワトソン君。さ、その地図を見せたまえ」
始まったな、と正雄が地図を開いて渡した。
「いいかね、この地図を良く見たまえ。東に三カ所、西にニカ所、溜め池が在るだろう」
健太が正雄の顔をチラッと見て続ける。
「その間にも本当は幾つか溜め池が在ったんだよ。それが家ができたりして潰れてしまったんだよ、ワトソン君」
今度は正雄が健太の顔をまじまじと見た。そして再び地図に目を落とし、顔を上げた時は健太と同じ顔になっていた。二人はハイタッチをしようと手を上げかけたがクスリと笑いロビーに出た。少し遠慮がちだが歓声を上げ、お互いに手を上に下に打ち合い、足を踏み鳴らている。しかし、後から出て来た孝が本を持って来てしまったのに気づき、急いで中へ連れ戻し、受付のお姉さんの赤くなった顔にペコリとお辞儀をして、談話コーナーに戻った。
「それでだよ健ちゃん、どうしようか」
「なんか証拠が欲しいよな、化石が出るとかさ」
「そうだよな、ま、この地図コピーして貰ってくるよ。２枚した方がいいよな」
その時健太が肘で正雄を突っついた。
「爽子」
「え」
　顔を上げた正雄は爽子とバッチリ目が合ってしまった。まずい、と思い顔を伏せたが、大股で歩いで来た爽子がもうそこに立っている。
「あら珍しいわね、図書館にいるなんて。特に健太君」
薄いグレーのスカートにスタンドカラーの白のブラウスが妙に大人っぽかった。
「何見てるの。あら、この街の地図じゃない。へーこの街って地図で見ても田んぼばかりね。で、地図がどうしたの」
二人はどうしたらいいのか決めかねて黙っている。
「あなた達、何か悪い事考えてるんでしょう。何か都合が悪いと、大抵黙っちゃうんですって、男って」
何か言わなくちゃと、健太が口をモゴモゴさせている。

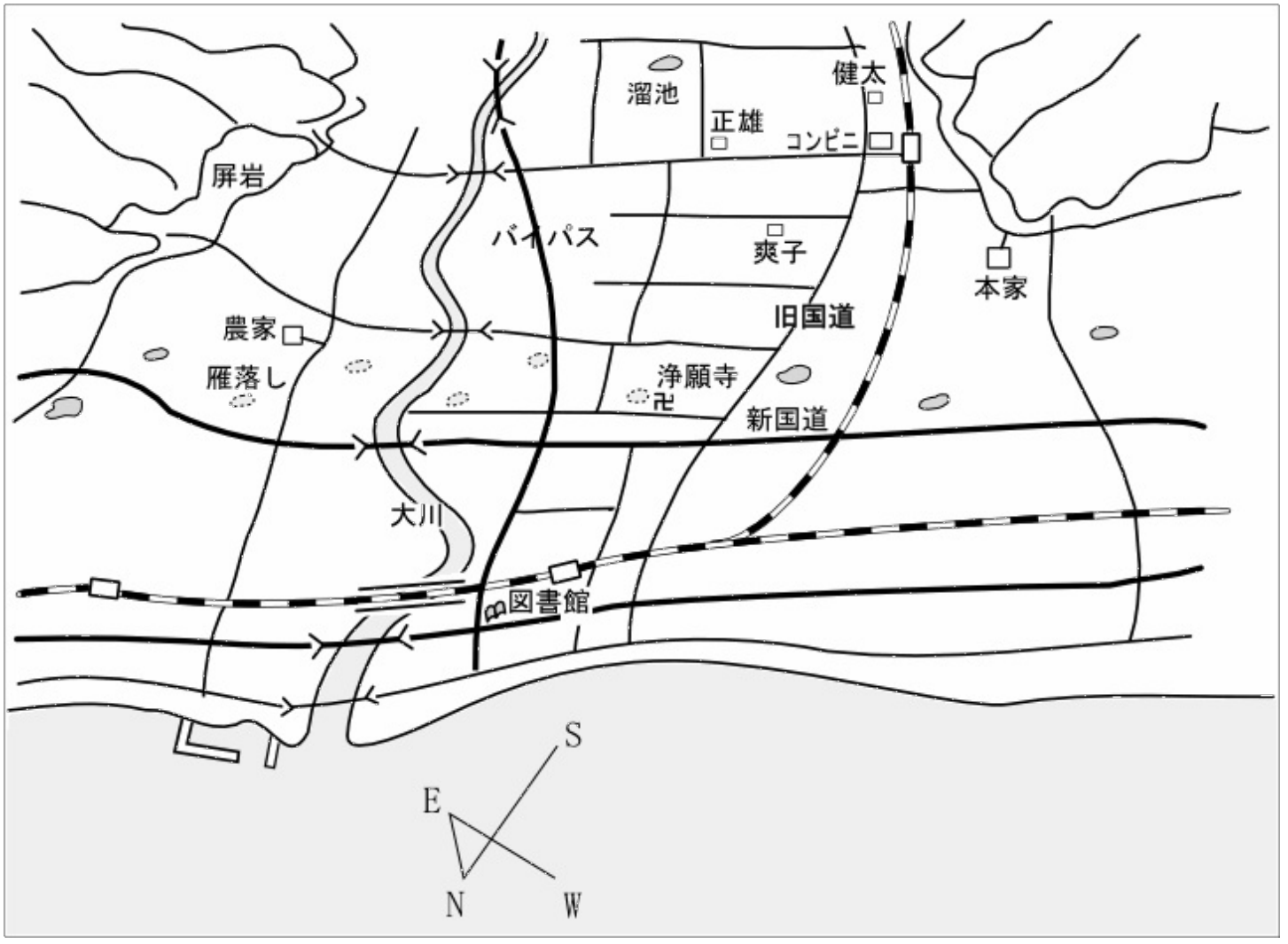
「宿題か委員長。それとも涼みに来たんか」
爽子が小馬鹿にしたような薄ら笑いを浮べ、それには取り合わず孝に向いた。
「あら、かわいいわね、正雄君の弟？」
健太の誤魔化し作戦はすっかり見破られているようだ。
「これ恐竜の本じゃない。恐竜好きなの、名前は？」
「孝」
「何年？」
「二年」
「恐竜か。凄いね」
「この街に恐竜いるんだぞ。お姉ちゃん知らんだろう。お兄ちゃん達が見つけたんだ。その地図に出てんだぞ」
孝が誓いの言葉をすっかり忘れている。ずっとおとなしくしていて、誰かに何か話したくて、爽子相手にタメイケドンの説明をしだした。健太と正雄は頭を抱え込んだが、こうなったらもう成り行きにまかせるしかない。
「なんなの、タメイケドンだって、子供ねー。健太君だけならまだしも、正雄君も仲間だなんて、呆れちゃったわ」
健太の顔が赤くなってきた。まずい、正雄が健太の袖を引っ張った。
「地図良く見てみろよ。いいか、西側にポンポン、東側にも同じようにポンポンとあるだろう。西から東に歩いて行ったんだ。まず間違い無い」
健太が一呼吸入れて続ける。
「その間にも足跡が続いていたんだけど、街ができたりして埋め立てられちゃったんだ」
爽子が呆れ返って健太を見ている。笑っていいのか、怒っていいのか、どうにも仕様が無い顔になっている。
「あなたこそ良く見なさいよ。これが足跡だとしたら大きいのなんて200メートルはあるわよ。歩幅なんて600メートルはあるわ。
背の高さが足の大きさのの6～7倍だとしても1200～1400メートル、歩幅は歩いたり、走ったり色々だけれど、背がその3、4倍だとしても1800～2400メートルよ。あなた達ゴジラと間違えてるんじゃないの。ゴジラだってせいぜいビル位よ。100メートル位よ。何考えてるのよ」
二人はポカンとして、それから健太が真っ赤になった。
「いいですよ、いいですよ、1500メートルいいですね、1500メートルの恐竜かあ、な、正ちゃん、立派だよな、タメイケドンは1500メートルの高さがあるんだぜ」
健太は反撃の糸口がつかめず正雄を前線へ押し出そうとしている。適当に数字の真ん中を取っている健太にあきれながら、正雄の自信は多少ぐらついて来ていた。しかし爽子に言い負かされてこのまま引っ込んでいる訳にはいかない。
「今までに発見された恐竜の最大のものは50メートル位だったと思うけど、それに比べりゃ途方もない大きさだと思うよ。でもさ、別に発見されて無いからっていったって、いないと言う事じゃ無いんじゃないか。いないと言う証拠が無いもんな」

爽子が完全に冷ややかな顔で正雄を見た。まるで静物を写生する時のように、2、3歩下がった所から全体の構図を考えているような視線を正雄に浴びせている。後少し爽子が口をきかなかったら、正雄は自分が小動物にでもなっているんじゃないかと勘違いするところだった。
「正雄君」
爽子の声が冷ややかだけれど普通に聞こえてきて、正雄はホッとした。
「正雄君、ネッシーのいない証拠出せる？雪男は？宇宙人は？それって神様のいない証拠出せないのと同じよ」
正雄は自分の理屈の無意味さにガックリきていたが、健太は爽子の言う事を肯定的に納得して、ならいいんじゃないかと頷いている。
　孝がお兄ちゃん達の旗色が悪いのを見て取り、沈黙の小さな隙間に割り込んできた。
「お姉ちゃん、はいこれ、タメイケドン」
孝が健太のスケッチブックを開いて爽子に見せた。
「アッ、こら、駄目」
健太が素早くスケッチブックを取り返す。
「何よそれ、いいじゃない、少し位見せてくれたって」
あっと言う間にスケッチブックは爽子の手に渡っていた。
「あらら、かわいいじゃない。とても1500メートルもある恐竜には見えないわね。何、この変な模様は、縫いぐるみだったらかわいいのにね」
健太はもう覚悟を決めていた。誰に何を言われようとタメイケドンはいるんだ。少なくとも俺の中にはちゃんといるんだ、と今は揺るぎない自信がみなぎっていた。
「ああそれ、それは縄文土器の模様だよ、かっこいいだろう」
「なんで縄文土器の模様が恐竜に付いているのよ」
「いいかねワト…じゃなかった。いいか、タメイケドンの大きさ、力強さ、素晴らしさ、その偉大さに神と崇めた縄文人が土器にしるしたんだ」
正雄がアッチャーと爽子の顔を見た。爽子は子供だからしょうが無いかと言うような顔をして健太を見ている。
「あなたね、恐竜の時代って1憶とか2憶年前の話しよ、縄文人って一体いつだと思ってるの、せいぜい1万年くらい前よ。何で縄文人が恐竜なんか見るのよ。縄文人が見たのはマンモスよ、マ・ン・モ・ス。分かる、鼻が長くて、牙のある、象さんに似てる哺乳類よ」
しかし健太の自信が揺らぐ気配はどこにも見えない。正雄には健太のその自信がどこから来るのかさっぱり分からなかった。しかし何か掴んでいる事は確かなのだ。
「1億年も違えばタメイケドンと縄文人が同時に存在したという事はまず無いだろう。けどね、恐竜の時代には人間の先祖もいたんだ。ネズミみたいな動物らしいけど、それが進化して色んな動物に分かれて人間にも進化してきたんだ。この間テレビで見たんだけど、遺伝子はずっと最初からつながっていて、遺伝子の方が主人で生き物はただの乗物なんだって事だったけど、良く分からないけどつまり、最初からずっとなんでも残ってるって事さ。だからそのネズミが見たタメイケドンの記憶も遺伝子に刻み込まれているんだ。それを縄文人が思い出して模様にしたんだ」

全員が言葉を失った。言った健太も口に出して始めてそういう事だったのかと理解できたかのように沈黙している。健ちゃん凄いよ、さすがだよ、正雄は心の中で喝采していた。
　爽子がフーと一つ溜め息をつく。
「あなたの頭って一体どうなってんの」
「あなた達、いい加城にしなさい。談話コーナーだって大声で話していたら駄目でしょう。爽子さんまでどうしちゃったの」
受付のお姉さんがうんざり顔で立っている。正雄が大急ぎで片付け出した。
「じゃあコピー2枚取ってくるから」
「正雄君、コピー3枚にして。河合さんどうもすいません。夏休みではしゃいじゃって」
「気を付けてね」
爽子がペコリと頭を下げ、健太もそれに習った。
　お姉さんの後ろ姿を目で追いながら、つながりの切れた話しを戻すこともできず、二人とも黙ったまま椅子に腰をおろした。
　そこへ正雄が本を返して、直ぐに戻って来た。
「正ちゃんもうお昼だぜ、どうする」
「さ、帰るわよ。ロビーでちょっと話そう」
思いがけ無い展開に健太と正雄がぐずぐずしているうちに、コピーを受け取った爽子がさっさと席を立った。おたおた二人も続き、孝も後に付いて行く。
「お兄ちゃん腹へった」
「そうだな、パンでも買って食おうか」
ロビーで爽子が待っていた。
「それであなた達これからどうするの」
「パン買って、食って、家へ帰る」
この成り行きがどういう事なのか健太には全く掴め無い。
「そうじゃ無くて、タメイケドンの事よ。どうするの」
「どうするったって、なあ正ちゃん」
もちろん正雄にも何がどうなってこんな展開になってしまったのか、さっぱり分からなかった。二人は嫌な予感と同時に、妙な期待もあり、全く困った立場になってしまっていた。
「溜め池の事、もっと調べてもいいと思うけど。郷土資料に何かあるかも知れないし」
一応、正雄が歯切れ悪く応える。
「そうね、もつと調べたいわよね。良く考えればもっと色んな事ができるかも知れないから」
「色んな事って何するんだ」
二人の期待がふくらんできた。
「今日は急だったから、明日、大原のコンビニで会いましょう」
「……」
「10時ね、じゃあ明日」

　言うだけ言うと、爽子はくるりと背を向け、やはり大股で歩いて行った。背丈に比べて大きい歩みで、ひらつくスカートが大きく振り出した足でスッとまとまり、リズミカルに動いていく。外に出た爽子に真夏の太陽が真上から降り注いだ。白いブラウスが輝き爽子も明るく光っている。
　ボーとして見送っていた二人が外に出て歩き始めると、途端に腹の虫も生き返った。
「正ちゃん帰りどうする。孝歩けるか」
「飯食ってから考えよう、腹ペコだよ、直ぐそこにスーパーがあつたから、そこで何か買おう」
小さなローカルスーパーだったが、お昼用に色々置いてあった。コロッケパン3個とクリームパンとあんパンとメロンパンを買い、500ミリリットルの牛乳を3本買った。
　家を出てからずっと何も飲んでいなかったので、たっぷり何か飲みたかった。スーパーから出ると牛乳を出して先ず一飲みした。何も言わずに近くの公園の方へと歩く。ほど良い日陰にベンチが数台在り、一休みしているおじさんや、弁当を食べているお兄さんもいる。三人も腰を掛け、ポリ袋からコロッケパンを出して食べ出した。
「健ちゃんちのお母さん、お昼に菓子パン食べちゃ駄目って言ってなかったか」
「お昼っていうか、ご飯や、ご飯前に食べちゃ駄目ってうるさい、うるさい。それに何か飲むんだったら牛乳飲めっていつも言ってる」
「菓子パン買ったじゃないか」
「内緒、内緒、コロッケパンもあるから大目に見ましょう。それより爽子の奴、タメイケドンがでか過ぎるって馬鹿にしていたのに何だってんだよ、まったく」
冷房のきいた図書館から出て、水分も十分補給して三人とも汗が吹き出している。
「でもタメイケドンの模様の話しは凄かったなあ。どうしてあんな事思い付いたんだよ。爽子だって呆気に取られてたもんな。子供だとか、なんだとか言ってたのに、しまいには自分でもタメイケドンなんて言ってんだもん」
言いながら正雄が菓子パンを三つに千切り始めた。公園の木陰は時折風が吹き抜け、流れ出た汗をいい具合に引かせている。
「何、そのパン、あんパンをケーキカットする奴なんていないぞ」
正雄があんパンをホールケーキをカットするように、中心で120度ずつに分けていた。
「何かあんパン、三つに分けにくくてさ。孝、牛乳全部飲めんかったら飲まんでもいいぞ」
「正ちゃん、郷土資料っての調べるんか。俺、正ちゃんみたいにそういうの一つ一つ調べたりするの得意じゃないからなあ」
「いいよ、それは俺がやるから。それより爽子の奴、何をしようってのかな」
「あいつあれだぜ、ほらあれ、亭主を尻に敷くタイプってやつ、絶対そうだな」
いつもなら二人で笑い転げている筈なのに正雄はちっとも乗ってこないし、言っている本人の健太も少しも笑いなど期待していなかった。
「孝、帰り歩けるか」
「平気だよ」
「牛乳もういらんな。あそこに便所があるから行ってこい」

正雄は孝の飲み残した牛乳を飲みながら、指をさして教えている。
「どうせバス道だから孝が歩け無くなったらバスに乗ればいいよ」
木の間からこぼれた陽が時折地面を瞬かせていた。二人ともなんだかいつもの調子が出ず、こぼれた光りを目で追ったりしている。その中へ孝が駆け込んできた。
「いっぱいしたか」
「うんした」
「よし、出発」
　孝は図書館で休み、腹もふくれてすっかり元気になっていた。蝉が鳴くと、一つ一つ街路樹を見上げながら歩いている。健太が珍しく通り過ぎてしまった玩具屋のエンジンボートを今度は孝がしげしげと眺めている。
「孝！」
正雄に呼ばれて手に何も無い船を浮べ、唸りながら走って来る。商店街を抜けると、車は朝よりずっと増えていた。
「ここから自動車道だからな、あちこちしないで、ちゃんと歩け」
正雄に言われて孝が素直に二人の後に付いて歩いて来る。
　家並みが途切れ、田んぼが広がり、強い日差しにも負けないくらいのいい風が渡っていく。さわさわと稲穂も揺れ、既に色付き出した田んぼもあった。
「このへんにもどこかに、溜め池が在ったかも知れないなあ。…俺ちょっと小便してくる」
健太があぜ道に入り、道から離れて行く。正雄も続き孝も続いた。健太と正雄が並んで小便を始めた。孝もおちんちんを出したが、お昼に出し切ってしまい真っ赤になってポトポトとたらした。健太も正雄も何か違う中学2年の夏休みを感じていた。


溜池
健太
正雄
コンビニ
屏岩
バイパス
爽子
本家
旧国道
農家
雁落し
浄願寺
新国道
大川
図書館
S
E
N
W

　昨日の別れ際、二人はタメイケドンの化石を探してみようかと話していた。街の東側で少し山に入った所にある屏岩の近くの断層で、二人は貝の化石を拾った事があった。タメイケドンの化石がどんな物なのか、二人ともまるでイメージを掴んではいなかった。1500メートルのタメイケドンも少し大きめの恐竜といった程度で、その全体像を遠景で捕らえているだけに過ぎない。図鑑に出ているような恐竜の骨が土の中に埋まっているという程度だった。1500メートルのタメイケドンの足元から、上にある顔を見上げたり、その頭に乗って下を見た時の様子など、ほとんど想像の域を越えていた。
　健太が先に来て待っていた。コンビニの駐車場はまだ日陰になっていて、そこに置いてあったビールケースに腰掛けて待っている。
「なんだ正ちゃん、孝も連れて来たんか」
「ご免、今朝はそれで大騒ぎだったんだよ」
　その朝も、もちろん正雄は一人で行くつもりだった。母親も夏休みにいつも孝のお守りをさせていてはかわいそうだと、今日は孝を連れて行けとは言わなかった。
「お兄ちゃん、俺も行くからね」
「ダメダメ、今日は駄目だ」
「いいじゃんか、昨日だってちゃんと歩いたんだから」
「今日は駄目。今日は健ちゃんと勉強するんだから」
「だってお姉ちゃんも来るんだろう」
「お姉ちゃんてなんなの」
母親が聞き付けて台所で怒鳴っている。
「なんでもない、なんでもない、健ちゃんの姉ちゃんの事」
慌てて正雄が孝の耳を引っ張って部屋に連れて行く。
「いて、痛いよ、お兄ちゃん」
「おまえなあ、昨日の秘密の誓い、忘れたのか」
「忘れた」
「忘れたんならもう連れて行かないぞ」
「思い出した」
なんとか誤魔化して置いて行かないと、今日は爽子も来るし、どんな展開になるか予想が付かない。何しろダレてしまうか充実するか、どちらにも転ぶのが中２の夏休みなのだ。しかもなんと無くいつもと違う夏休みになりそうな予感がしている。孝などというチビは邪魔に決っていた。
「だから今日は駄目なの」
「だからってなんだよ」
「この次ぎ、この次ぎ連れて行くから」
正雄は拝み倒さんばかりだ。

「お母ちゃん、今日ね、タメイケ…」
慌てて正雄が孝の口を押さえた。
「誓いの言葉」
「忘れた、お・か・あ…」
「分かった。…分かった、連れて行くよ。その代り秘密は守るんだぞ」
「うん」
正雄もビールケースに腰掛けて説明した。
「そんな訳で今日もこぶ付き、悪い」
「別にいいさ、孝、タメイケドン好きだもんな」
「うん、タメイケドンって、でっかいんだよね」
こんなに、と反っくり返り、手を更に上から後ろに反らし、正雄の膝の中に引っくり返ってきた。孝だけが1500メートルのタメイケドンをイメージできたのかも知れない。
「爽子、今日もスカートかな」
正雄も同じ事を考えていて、お互い肘で突っつきあった。
　10時きっかりに爽子が自転車でやって来た。
「お早よう」
自転車に乗ったまま爽子が先に挨拶をした。今日はショートパンツだ。
「お早よう」
二人の声が揃って、妙にハモッている。プッと爽子が吹き出し、三人揃って笑い出した。そう言えばこの間溜め池で大笑いしてからこんな風に笑っていなかった。なんだか三人ともすっきりしたものを感じた。爽子も仲間になったんだと思った。
「何あなた達、今ハモッてたわよ、正ちゃん健ちゃんでーす、みたい」
また三人で笑った。完全に仲間だった。
「それでタメイケドンだけど、このままじゃなんか、今一って感じでしょ、溜め池が足跡だって証拠、ま、それは無理かもしれないけど、健太君の言うように街の下になっちゃったのなら、溜め池が前にあった場所を見付け出すのよ。どお」
爽子が自転車を脇に置き、立ったまま話している。
「よし、やろう。な、正ちゃん、やるよな」
「もち、図書館の郷土資料に何かあるかもしれないな」
漠然としていたやりたい事がはっきりとした形になり、二人とも爽子の申し出を断わる理由がまったく無い。
「郷土資料には無いかもしれないわ。ほら、私三年の時転校して来たでしょう。初めのうち、なんだかこの街に馴染めなくて、それでこの街の事良く知ればいいって、お母さんにも言われて、ここの民話みたいなのとか読んだりしていたの。郷土資料は去年の夏休みに見たんだけど、溜め池の事は無かったと思うなー。でもその時はこんな目的なんか無かったから、いい加減だったんだけどね」

　爽子がずっと、いつでも別の世界に住んでいるような気がしていた二人は、その訳が今何と無く分かった。取り付き難くて余り話した事も無かったのだが、爽子の世界に少しだけ入れたような気がして、又少し親近感が大きくなった。
「よ、珍しい組み合わせ」
クラスメートが冷やかしながら自転車で通り過ぎた。やはり夏休みだ。さっきから声は掛けて行かなくても、クラスメート数人と、正雄の近所の小母さんが通り過ぎた。皆ニヤニヤしているようで、二人とも気になっていた。
「それで図書館が望み薄だとなると、どうするんだ」
どうも話しが難しそうなので、健太はもっぱら聞き役に回っている。
「図書館も一度ちゃんと見る方がいいけど、ちょうど夏休みでしょ、溜め池の在りそうなへんで、昔の事を良く知っていそうなお年寄りに聞いてみるのよ、どお」
「いいよそれ、な、健ちゃん」
「うん、それやろう、よし手始めにこのへんからやろう」
ププー、駐車場に車が入って来た。二人ともビールケースから立ち上がり、尻を払った。配達の車だった。運転手がガラガラと台車を引いて来て、三人には目もくれず仕事を始めた。
「ここ場所が悪かったわね」
「うん、結構知ってるのが通ったね」
「午後、うちに来ない、地図見てしっかり作戦立ててやりましょっ」
爽子の声と、荷卸ししているトラックのラジオの声が混ざりあっている。爽子が言った事なのか、ラジオのディスクジョッキーが言った事なのか、耳の奥が混乱していた。
「はい、行きます」
又声が揃っていた。爽子がクスッと笑い、じゃあ午前中は宿題やるのよと、笑いながら自転車にまたがった。
「あ、私の家分かるわよね」
「うん、大体、じゃあ1時ごろ行くから」
と健太が手を上げた。じゃあねと、遠ざかる爽子を二人でずっと見送っている。昨日から爽子の後ろ姿ばかり見ていたような気がしていた。

　「お兄ちゃん、タメイケドン探しに行かんのか」
少しも進まない成り行きに、孝が焦れてきていた。
「帰って宿題しなきゃな」
健太が言いながら照れて頭を掻いた。
「正ちゃん、爽子のうち知ってるか」
「うん、この前のマラソンの時、前通ったよ、爽子のお母さんらしい人が手を振っていたから、たぶんそこだと思う」
「じゃあ俺が午後迎えに寄って行くから」

　健太が爽子の家を知らなかったので、午後には無くなってしまう優位を正雄は何となく味わい味わい、帰りを歩いた。
「ちぇ、タメイケドン探しに行かんのか」
「残念でした、タメイケドンじゃなくて、探すのはただの溜め池という事になってしまいました」
「じゃあさ、いつ探す」
「分からん、溜め池しだいだな」
「その時はさ、行くからね」
なんだかんだ言っているうちに、そろそろこの辺りは孝の縄張になり、あっちへフラフラ、こっちへフラフラしだした。棒を持ってドブを掻き回したりもしている。正雄の歩みも遅くなっていたので、孝も適当に道草を食っている。
「ただいま」
家に帰ると、おや早かったね、と母親がニヤニヤ笑っている。午前中は宿題をやるからと部屋に入ったが、もちろん宿題など手に付く筈もなく、ベッドに横になると、そのままウトウトと眠り込んでしまった。
　逆光の爽子のビジョンが揺れ、短い髪がキラキラと光りに透けている。シルエットの爽子の声が母親の声に重なって目が覚めた。孝、お兄ちゃん起こしておいで、とまだ遠くで声がしている。起き出すと孝が部屋を覗き込んでいた。パタパタと居間の方に戻りながら、起きてた、じゃあ呼んどいで、とドタバタやっている。
　食卓に付くと母親がテーブルを拭いたり、醤油刺しを拭いたりとソワソワしている。孝が上目使いで正雄を見ていた。
「正雄さっきコンビニの所で、女の子と一緒だったって」
正雄の素麺が喉の途中で止まってしまい、お碗に戻るか、胃袋に行くか迷っている。でも直ぐに冷たい感触が胃袋の方へ下りて行った。
「孝、おまえ」
「孝じゃないよ。あんな人通りの多い所じゃあ・・誰の目にも付くよ」
正雄は直ぐに近所のおばさんの顔を思い浮かべた。
「溜め池だとか、恐竜だとかって何なの」
「孝やっぱり喋ったじゃないか」
孝がそ知らぬ顔で素麺をすすっている。
「危ない事しちゃ駄目だよ」
「危ない事なんか何も無いさ、埋めたてられた溜め池がどれだけあるか三人で調べるんだよ。お母さん知らんか」
「お母さんここの者じゃ無いから、本家のおばあちゃんにでも聞いてみたら」
正雄は深みにはまら無いうちに出かけてしまおうと、大急ぎで素麺を食べ終えた。
「ごちそうさま、健ちゃんと爽子の家へ行ってくるから」

　正雄は素麺に感謝しながら直ぐに家を飛び出した。孝は喋った事の後めたさで、一瞬出遅れ、置いてけぼりを食ってしまった。自転車を引っ張り出し、地図を忘れた事に気づいたが、そのまま健太の家へ向かう。
　健太は外に出ていた。
「健ちゃん、地図持ったか、俺忘れちゃったから」
健太がスケッチブックを叩いてみせる。
「ちょっと早いんじゃないか」
「爽子とコンビニにいたのがばれてて、慌てて出て来たんだよ。ま、それは近所のおばさんなんだけど、孝の奴、恐竜や溜め池の事も喋っちゃってた」
「本当か、でもま、それならそれでいいや、行こう」

　自転車だと、爽子の家までいくらもかからない。どこかで時間を潰すには中途半端で、二人は遠回りして走った。爽子の家の方へ自転車が向くとでたらめに角を曲がる。しかし遠くへ行き過ぎるのもまずいと思い、結局そのへんをぐるぐる回る事になった。
　爽子の家は都会風なモダンな家が5、6軒並ぶ新興住宅地に在った。区画整理された、広びろとした空き地にシオカラトンボが飛びかっている。表札を確認して、中に入り玄関のチャイムを押す。少し間があった。変に緊張しているのが何も言わなくともお互いに分った。
　インターフォンのくぐもった声に正雄が応えた。
「岡野と加藤です」
直ぐに戸が開き、爽子が顔を出した。
「どうぞ、そのスリッパ履いて」
二人は爽子の後に付いて応接間に入った。
「適当に腰掛けて」
まだ緊張の解けない二人がギクシャクと掛ける。
「あらいらっしゃい」
爽子の母親だった。
「お母さん、健太君と正雄君」
二人が慌てて立ち上がる。
「加藤健太です」
「岡野正雄です」
一応の挨拶が済み、二人が腰を下ろした。
「二階へ行きましょう」
何か言いたげな母親の先手を取って爽子が二人を促した。
「爽子さんの部屋、暑いんじゃないの」
「本広げたりするから」
出て行く爽子の後を、二人ともアタフタと付いて二階に上がった。
「あ、ドア開けておいて。風の通りがいいから」

　西日が当たりそうだけれど、区画整理された新興地の向うに田んぼが広がり、気持ちのいい風が入ってきている。
　この部屋は変わっていた。キョロキョロしないようにしていた二人だったが、思わずグルッと見回してしまっていた。窓の横の壁際に二段ベッドが置いてある。しかし子供部屋らしい物はそれだけだった。ベッドに並んで会議机が置いてある。丸椅子が二つ向こう側にあり、爽子はベッド側の背もたれのある椅子に掛けた。
「そっちに掛けて」
それから気が付いたように立ち上がり、散らばった雑誌や文学全集を片側に寄せ、机の上を拭いた。
　健太が窓側の椅子に掛け、また部屋を見回した。入口側に掛けた正雄もつられて見回している。幾ら見ても何も無い。本箱も無いし、クリーム色の壁も壁のまま、カレンダーが掛けてある他にはポスターも無い。
「爽子、兄弟がいたのか」
健太が聞いた。
「私一人っ子よ。ああ、これ。普通のベッドって私あまり好きじゃ無いのよ」
良く見ると上の段には冬物の蒲団が乗せてある。
「地図持って来た？」
「うん、正ちゃんは忘れたけど」
「いいよ、こっちは二人で見るから」
「上手く計画立てないと大変よ。何しろ広いんだから」
三人は地図を広げて見入った。爽子は椅子の背にもたれ、手に持って見、健太達は机に置き、二人で覗き込んでいる。
「これが足跡だとして、健ちゃんの言うように西から東に歩いて行ったとすると、端の二つが歩幅を表している事になる。とまあこういう事なんだけど、だとすると両端の二つを平行に結んだライン上に、他の足跡も在るという事になるよね」
「うん、道草食ったり、よろけたりしなければね」
「それなら丁度この道と、この道にだいたい沿っているって事じゃない」
健太がペン立てからマーカーを取り出して地図に印を付ける。
「ポンポンと来て、ポンポンとポンポンポン、ほらピッタリ収まった。間は五歩という事か」
「スキップしなかったらね」
「タメイケドンがスキップしたら凄いぞ。ドンドンドン、地震か、でかい隕石が落ちたくらい凄いぞ」
健太が腰に手を当てて体を上下させたので、大笑いになった。ひとしきり笑い、爽子が真顔で言った。
「でもきっとドンドンじゃ無くて、ドーン、ドーン、よ。間隔が開いていなくちゃおかしいわ」
爽子が電卓を出して計算を始める。

「えーと、二本足だから、人間と同じだとして時速4キロ、歩巾が600メートルだから0.6キロメートル割る時速4キロは0.15」
「一歩15分か」
「馬鹿ね、15分じゃないわよ、0.15時間。だから60分を掛けるの、9分よ、一歩9分」
三人が顔を見合わせた。
「ポツ、じゃないな、ズッシーン」
言いながら体を枕めたままじっと動かない健太。正雄も爽子も体を硬くして待っている。段々健太の顔が赤くなってきた。
「ハー、駄目だ、とても9分もやってられない」
「何で息止めてるのよ」
また大笑いが始まり、雑談につながっていく。

　何と言っても一番の問題はタメイケドンの食べ物だった、さすがの健太も1500メートルの高さの木の葉とは言い出さなかった。しゃがんだり這ったりするんだったら四足歩行の方が便利だし、象の鼻のように尻尾を使うというのも無理があるようだ。肉食で、他の恐竜を捕まえて食べるといっても、地震のような地響きが遠くからしたのでは、タメイケドンがいくら強くても皆逃げ出した後で、何の役にも立ちそうに無い。抜き足、差し足のタメイケドンなんて惨め過ぎるし、カメレオンみたいに舌がビューと伸びるとか、好き勝手な事を言い合っている。
「海だな、海ならすべて上手くいくぞ」
やはりタメイケドンの事なら、健太が第一人者だ。正雄は目を閉じ、爽子は窓の外に視線を移した。海の事など全く考えに無かった二人の頭から、もやもやしたものがスーッと消えていく。
「プランクトンとか、魚とかなら上手くいくだろう」
「さすがにタメイケドンの父親ね、敵わないわ」
「そうだよ海藻だよ、ジャイアントケルプなんか100メートルも伸びるそうだから、タメイケドンの食い物なら、うって付けだよ」
話しが又現実味をおびてきて、議論が白熱してくる。
「ガラパゴスには海イグアナもいるわよ。あまり関係ないけど、イグアナドンていう恐竜もいるしね」
二人のペースにはまり、爽子もただの駄じゃれを言い出す。
「背中のヒダヒダで立ち泳ぎなんかしたりしてね」
それはどう想像してもぶざまな姿になり、三人とも笑い転げた。
「ヒダヒダは立ち泳ぎ用じゃ無くて、海に浮かんでいる時、海面にパッと広げて熱を吸収するんだよ、たぶん。海イグアナも体が冷えるから長く泳いでいられず、陸に上がって日向ぼっこしてるからね」
「そうね、そうやって太陽熱を吸収していたら太平洋だって渡れるかも知れないわね。でも正雄君、こんなに大きいと放熱の方が重要な役目かも知れないわよ」
　タメイケドンはいつか、ソーラーシステムを備えた大恐竜に成長していた。

「爽子さん、3時だけど、お茶を上に持って行きましょうか？」
「え、もうそんな時間？どうりで暑いと思ったわ。下でいただきまあす」
ドタドタと三人で下に下り、居間に入った。
奥のダイニングキッチンのテーブルにお茶とパンケーキが並んでいる。
「適当に掛けて」
お客さん用に二つ並べて置いてあるので、腰掛ける位置ははっきりしていた。
「さあどうぞ、紅茶はホットだけど暑い時は温かい物の方が身体にいいのよ。でも冷たくするなら氷も在るわよ」
爽子の母が二人に聞いた。爽子はと見るとホットで飲んでいる。
「ホットでいいです」
「あ、僕も」
「こっちが蜂蜜でこっちが黒蜜ね、お好きな方をどうぞ」
「はい、いただきます」
健太が蜂蜜、正雄が黒蜜をかけた。
　爽子の母はストレートヘアーを爽子と同じ様にショートカットにしている。キッチンは明るく、都会風だった。健太も正雄も都会風のキッチンなんてみた事も無かったが、これがそうだと思った。シンクの出窓に花の無いグリーンの鉢植えが、木の鉢カバーに入れて置かれている。テーブルにはカットグラスを花瓶にして、つゆ草が入っている。壁にはコーンのリースが掛けてあり、全体に機能的でまとまった感じがした。
「爽子さんの部屋、殺風景だったでしょう」
「はい、子供部屋らしくは無かったです」
と正雄。健太が口の中の物を呑み込んで答える。
「引っ越してきたばかりという感じです」
「あらピッタリよ、それ」
母親がニッコリと健太を見た。健太が促されるように言葉を継いだ。
「でも女の子っぽいのよか気が楽です」
「あら健太君、女の子の部屋なんかへ行くの」
爽子が話題を自分から他へ向けようとしている。
「行かんよ、ここが初めて。でも、姉ちゃんの部屋は臭くてたまらん」
「何それ」
「香水とか、何だか知らないけど、一杯瓶が在って、臭いの何のって」
爽子の母が又ニッコリ笑って健太を見た。健太は照れくさくて、皿をガチャガチャいわせて、正雄の残りのホットケーキと自分のを取り換えた。
「あら、あなた達仲良しなのね」
「いやあねえ、いつもそうなの」
「美味しい物の時はね」
三人ともきれいに残さずに食べた。

「爽子さんが家に友達を連れて来るなんて滅多に無いのよ。こんなに楽しそうに笑うのも、ここへ来てから初めてかも知れないわね」
「お母さん変な事言わないでよ」
今度は健太達がニヤニヤしている。
「ちょっと居間の方に来て」
二人を促して爽子が席を立った。
「ごちそうさま」
「ごちそうさまでした」
ガタガタと二人も続いた。居間には壁に本棚が並び、ガラス扉のある書棚に縄文土器が入っていた。
「ほらこれ、お父さんが集めているのよ」
健太も正雄も欠片を手に取り、しげしげ眺めている。
　この街にも土器がたくさん出ていた。今もどこかで発掘している。出土品の極く一部が街外れの会館に展示してあるが、大部分整理もされずにダンボール詰めにしてある。つまり、たくさんあっても見る機会があまり無いのだった。
　傷の無い立派な壷も在り、健太がそれに見入っている。
「タメイケドンの模様みたいでしょう。でもそれレプリカよ」
「レプリカって」
「模造品、コピーって事」
健太はそれを見て、ますますタメイケドンと縄文人が結び付いてしまった。
「明日はさ、さっきの二つの道を自転車で回ってみましょう。ぐるっと回ればちょうどいいわ」
　又1時にここに迎えに来る事になり、帰りがけに爽子の母が又遊びにいらっしゃいとニッコリ送ってくれた。

　遠くに入道雲が浮かんでいる。海は見えないが海の上に浮かんでいた。三人はその雲に向かって加速して行く。先頭が正雄の軽快車、次が爽子のマウンテンバイク、そして健太のサイクリング車と続いている。三人とも野球帽をつばを後ろにしてかぶっている。
　これは旧街道だ。古い家並みが続いている。家が途切れると田んぼになり、松の古木がくねくねと空に向かっている。先ずこの道を海に向かって進み、ぶつかった新国道を右に折れ東に進む。これは海岸線と平行している事になる。バイパスを越え、大川を渡り、少し先で又右に曲がる。又少し行き右に曲がり、ずっと行くとこの旧街道に戻って来る事になる。これが今日の溜め池探索計画になっていた。
　旧街道沿いに溜め池が一つ在る。それは既に溜め池としては使われてはいない。防火用水として消防団が管理しているが、今ではそれも形ばかりになってしまっていた。左手にこの池を見ながら正雄が振り向いた。誰も反応し無かったのでそのまま通り過ぎて行く。新国道に出る手前で正雄が止まった。
「新国道を行くよりこの路地を行く方がいいんじゃないかと思うんだけど、新国道を行っても古そうな家は無いしね」
「行き止りかも知れないぞ」
「いいわよ、行き止まりだったら戻ってくれば。中の方もいずれ見なくちゃならないんだもの」
　路地に入ると道巾は狭かったが車もほとんど通らず、絶好のサイクリング道路だった。表通りの整然とした感じに比べ、雑然として凸凹と家々の裏側を見せている。所々に民家も在り、大きな寺も在った。前にはずっと田んぼだったのだろうが整地され、空き地になって看板などが立っている。
　この辺りには聞くのに良さそうな農家が何も無かった。路地は行き止まらずにずっと続いている。これはたぶん農道だろうと言う事になり、このまま行く事になった。空き地の向うに田んぼの広がりも見え、ちょうど爽子の家の辺りの感じでもある。
代わり映えのしない風景に、健太が午前中ピカピカに磨き、油を差した自転車のギヤをカチャカチャと変え、ギヤの入り具合を確かめたり、急ブレーキを掛けたりして自転車の調子を見ながら走っている。
　先にバイパスに出た正雄と爽子が止まって待っている。
「向こう側も同じように農道が続いているみたいだから、ここ渡るわよ」
「何してたんだよ」
「ほら、青になったわよ」
歩行者用の信号を渡り、又農道を行く。今度は直ぐに回りが田んぼになり、ずっと先まで開け、大川のくねりも見える。川向うにも田んぼがずっと広がっている。
　大川の土手は別段高く無く、自転車でそのまま入った。川に沿ってずっと行けるようになっている。
「ちょっと川に下りようぜ」

後ろから健太が二人に声を掛ける。どこからでも下に行けるのだが、一応草の少ない所を選んで正雄が止まった。やはり正雄、爽子と続いている。
「ヘビ、いるかも知れんぞ」
健太が後ろから脅かしている。
「やだ、冗談言わないでよ」
爽子の足が止まってしまった。いつもの事だと思いながら正雄が落ちていた棒切れを拾い、草むらを叩きながら進み、爽子が続き、健太が続いて行く。
　川原に出ると直ぐに靴を脱ぎ、ジャブジャブと水に入る。川も河口に近いこの辺りでは期待に反して生温い。
「やだ、気持ち悪い」
爽子は直ぐに上がってしまった。健太と正雄が膝まで入り、更に短パンをまくり上げている。
「こら！このへんはＴバック禁止だぞー」
爽子が川原からからかっている。
　二人だけならここで水を掛け合ったりする所なのだが、遠慮しておとなしい。健太はもう爪先立っていた。
「やばい、正ちゃん、どうにもならん。動くとパンツが濡れる」
「もお俺、上がるよ」
健太が後ろで変な声を出している。正雄は水を掛けられないように警戒して浅い所に戻っていた。健太もいさぎよく戻り始める。
「健ちゃん絶対パンツ濡らしたぞ」
先に上がった正雄が足を強く賑って水を切っている所へ健太も上がって来る。
「あーあ、パンツ濡らした」
妙な、情けない格好で歩いて来た。
「爽子、マウンテンバイクちょっと乗せろよ」
「嫌よ。そんな濡れたパンツでなんか乗らないでよ…。冗談よ、乗っていいわよ、どうぞ乗って下さい」
　健太がニッコリ顔に戻り、直ぐに土手にかけ上がり、マウンテンバイクを走らせ、前輪を上げたり、スタンディングをしたりしている。正雄と爽子が土手に立つと、猛スピードで突っ込んで来て急ブレーキを掛けて止まった。正雄も交代して一通りマウンテンバイクを乗り回し、直ぐに戻って来た。
「ほら爽子、俺のパンツできれいにしておいたぞ」
そういいながら正雄が手でサドルをたたいた。
　三人の笑い声はこの街のどこででも良く似合った。川面を低く飛んできた燕がジェットコースターのように土手を越えて行く。幾羽も幾羽も同じように越えて行く。健太がその燕の道に立って邪魔をし出した。後の燕はまるで初めから健太がそこにいたかのように当り前に上を越えていく。
「健ちゃん、もう行くよ。そのうち、うんち掛けられるぞ」

土手を新国道の方へ下り、大川を渡った。上から見ると燕があちこちに舞っている。橋の回りには特別多く、橋桁に巣があるらしい。
　橋の上は川原よりずっと風があった、大型トラックの作る風に巻き込まれないように、三人とも必死で自転車をこぐ。橋の下に潜らない燕が橋で反転し、急上昇してアッと言う間に黒い点になって行く。橋の上でひらひらしていた紋白蝶がトラックの風に煽られ、上に下に、右に左にと大きく泳いでいる。トラックに吸い込まれそうに見えて、決してぶつからず、そのうち脇に外れて川に逃れて行った。
　しばらく新国道を東に進み、右に曲がる。この辺りは古くからの街らしく道路にちょん切られたような家並が見える。それも途切れだし、又田んぼが覗き出した。

　登りが続いたので爽子が顎を出し掛けていた。街が終わり、道路から田んぼの中へ私道を引き込んだ大きな農家が見え、そこで爽子が自転車を止めた。呼んでも気づかず先に行く正雄を慌てて健太が連れ戻した。
「一休みしながらこの家で溜め池の事、聞いてみましょうよ」
　聞き取りは今日の予定に無かったが、時間もまだ充分在るし、水を貰いながら話しを聞いてみる事になった。爽子が先頭で私道を入って行く。鶏が裏の方で大騒ぎを始めた。前庭にも一羽うろうろしている。寝そべっていた薄汚れた白犬がむっくり起き上がり、こっちにのそのそ近寄りながら義務的に吠え出した。爽子が近寄り、手を舐めさせ、頭を撫でると直ぐに鳴き止んだ。二人がボッと、後ろでつっ立っている。
「こんにちわ」
爽子が開け放しの玄関口で声を掛けた。中を覗いていると、ずっと裏庭までつながっている。奥の土間の入口からおじいさんらしい人がヌッと入って来た。
「良子か？」
「いえ違います。あのう、水を飲ませて下さい」
突然名前を呼ばれて爽子もまごついている。土間は暗く外の光りに馴れた目では、おじいさんが痩せこけた影絵芝居のように見える。おじいさんも爽子が逆光になっていて、良く見えなかったらしい。
「何だ違うか、水なら外のほれ、柿の木の所にあるから飲めばええ」
「すいません」
既に水場に来ていた健太と正雄が蛇口をひねって顔をジヤブジヤブ洗い、そのまま手で受けた水を飲む。爽子も顔を洗って同じようにして水を飲だ。小さなハンカチでは拭き切れず、洗って又拭く。頭も首も拭き、又ハンカチを洗う。健太と正雄はＴシャツを脱ぎ、それで顔を拭き汗も拭って、又スッポリと着てしまっていた。
　二人は爽子が終わるまで犬の頭を撫でたり、スカンポをむしって鶏に食べさせたりしていた。溜め池の話しを聞こうと爽子が玄関の方へ向き直ると、おじいさんがそこでそのまま三人を見るとも無しに見ている。
「どうもありがとうございました」

爽子の声で二人とも顔を上げ、挨拶しようとおじいさんを見た。正雄の喉からあっと低い声がもれる。健太が不信げに正雄を見て、おじいさんを見て同じように声を呑み込んだ。
「あのう、この辺りの溜め池に付いて教えて欲しいんですけど。ほら、あなた達もいらっしゃいよ」
爽子に促されて二人がおずおずとやって来る。
「何ぐずぐずしてるの」
「いやあ、そのう、ありがとうございました」
おじいさんの顔に別段変わった所も表れず、普段と変わり無さそうだった。二人を見ても表情に変化も無く、眩しそうに目を細めているだけだ。自分たちの事は忘れているらしいと二人ともやや安心して急に元気を取り戻した。
「溜め池の事を聞きたいんですけと、宜しくお願いします」
「溜め池のう、この先にも在るが、それがどうした」
どうもこのじいさんは苦手だ。二人とも爽子をチラリと見やった。
「この先に在るのはわかっているんですけど、この近くで前に在ったけど今は埋め立てられていて無くなったというの、ありませんか」
「無い事は無いがのう、そんな事聞いてどうする」
このじいさんはやはり恐いよ、二人とも又爽子をチラリと見る。
「夏休みの自由研究で調べているんです」
「ホー、自由研究か、もう少し街に入った所に一つ在ったがのう」
爽子の後にいた二人も思わず前に乗り出してくる。正雄がポケットからビニール袋に入れてあった地図を出して広げた。健太がマーカーを出す。
「どの辺ですか。ここはこのへんですけど」
健太がマーカーで地図を指す。
「家からもう少し街に寄った所だったからのう。大体この辺りかのう」
健太が地図の下に手を当て、素早くマークした。
三人が目論んでいたタメイケドンの足跡とほぼ一致している。三人は地図から顔を上げ、頭を前後に揺すり、嬉しさを隠し切れない。
「ほれ、向うに台地が続いているじゃろう、あっちにはまだ二つ残っているがのう」
おじいさんが聞かれない事まで話し出した。
「こっちは大川の水が使えるようになったで、潰してしもうた。もう何十年も前だがのう」
「その溜め池、こっち側の埋め立ててしまったやつですけど、名前とかあったんですか」
爽子が律義に相手をし出す。
「名前のう」
ここからだと随分近くに見える屏岩の方を仰ぎながら、おじいさんが更に目を細めている。
「はてな、もう随分昔の事だからのう、よう思い出さん…、ばあさーん」
奥で返事があり、妙な間を埋められないでいる所へ縁側におばあさんが顔を出した。

「何だろう、どうも良子じゃないと思ったが、ほれこっちへ来て、キュウリでも食べなさらんか」
それはバナナのように曲がり、青々としたキュウリで、縦に二つに割り、種を取った後の溝に味噌が塗ってあった。
「いただきまーす」
正雄が取り、健太も手を伸ばした。爽子がもじもじして、食べようかどうしようかと迷っている。ぐずぐずしている爽子に健太がキュウリの皿を取って差し出す。反射的に爽子が一本取った。残った一本をおじいさんに差し出している。
「わしにものう」
おじいさんも取った。爽子が手に持ったまま、まだどうしようかと考えている。ポリポリという音につられて口にすると、キュウリの水々しさと、味噌が上手くバランスして何とも言えない爽やかさがあった。ボリボリ噛むと後から後から水々しさが沸いてくる。
「美味しい」
思わず爽子が口に出した。
「そうじゃろうて、さっき取ったばかりだからのう」
顔を洗った時飲んだ水は全部汗になって出て行ってしまったように感じられたが、これは体中に水分が行き渡って行くような感じがする。
「これ何て言うんですか」
「これかいね、私らただキュウリと言うとります」
おばあさんが縁側に小さく折り畳まれたみたいにチョコンと座り、やはり目を細めている。
「ばあさん、ほれ、前に街の方に在った溜め池のう、あれ名前何と言うたかのう」
「又えろう古い話だが、おじいさんが忘れてしまったかいね。ありゃあ確か、雁落しと言うとった」
「おおそうじゃった、そうじゃった。度忘れしとったわ」
「変わった名前ですね」
「わしらが生まれるずっと前にの、渡って来た雁が病気か何かで随分死んで、あの池にたくさん浮かんどったと言う事だったかのう」
おばあさんが目をしょぼつかせて頷いている。爽子は前に読んだ、この街の民話を思い出していた。
　雁の話があった。渡ってきた雁を獲ろうと長元坊が待ち構えているとムジナに脅かされた雁達が、池で何日もぐずぐずしているうちに何羽も、何羽も死んでしまった。だが、長元坊は雁をとる気は全く無く、ただ悠々と空を飛んでいただけだった。と言う話しだった。カワウソと潜りっこした雁の話もあつた。
「この街の民話に雁の話しがあるんですけと、その池の事でしょうか」
「そうじゃなあ、あの池の事だがの。今じゃ話し語る年寄りも誰もいなくなった。わしも昔あの池に取り残された雁を見た事があるでのう」

　爽子は急に雁の事がかわいそうになり、空を見上げた。今はまだ雁の渡る時期では無く、少し青味の増した空には入道雲だけが浮かんでいる。
「雁金や一羽真中の湖青し」
突然おじいさんが俳句を呟いた。
「まあまあ、おじいさんは子供にまで俳句語って」
爽子は何かその悲しい響きが胸に詰まり、又空を見上げた。
「どうも御馳走様でした。話しとても参考になりました。そろそろ帰る時間なので、どうもありがとうございました」
正雄が不意にそんな挨拶をしだしたので、二人とも狐につままれたような気もしたが、ごちそうさま、ありがとうございましたと、一緒に自転車を回し出した。
「小僧、稲刈りが済んだら又ドジョウ取りに来い。あの田んぼは特別だでのう。ここらでドジョウがいるのはあの田んぼだけだ」
健太も正雄も不意討ちを喰らい、冷汗が吹き出てきた。向きを変えた自転車のハンドルを握ったまま首だけおじいさんに向け、ありがとうございますを連発してから自転車に跨り、橋まで田んぼばかりの道を突っ走った。
　溜め池の一つが見付かったのと、おじいさんが自分達を覚えていたのと、ごちゃ混ぜになって健太も正雄もドキドキが止まらない。橋の手前で自転車を止め、土手に入り、大きく息をついた。
「何なの、突然どうしちゃったの」
二人がまだ息を弾ませている。
「いや、前にさ、あのじいさんの田んぼに入ってドジョウを取っていて怒られた事があるんだよ。てっきり忘れていると思ったのに、なあ正ちゃん、いきなりだもん、驚いたよ」
　健太の説明によると、一月くらい前、梅雨の晴れ間に5、6人で田んぼに入ってドジョウを取っていた時、さっきのおじいさんに見付かって、他の者はさっさと逃げたのに、健太が脱げたスニーカーを引っ張り出すのに手間取り、二人とも捕まってしまった。こうなったら謝るのが一番と、素直に謝り抜いて、倒した稲をなんとか元どおりに戻して許して貰ったのだった。
「やあね、正雄君までそんな事してるなんて思わなかったわ」
「チェ、正ちゃん見掛けがおとなしいから得だよな」
「それで正雄君、どうして急に帰るなんて言い出したの」
「いやあ、あのおじいちゃん、急に俳句なんか語り出したろう。うちの本家のおじいちゃんも俳句やってて語りだすと止まらなくてさ、途中で逃げると怒るんだよ。だからさ、早いとこ切り上げた方が無難だなと思ってさ」
「そうだよな、あのじいちゃん喋り出すと長そうだったもんな、聞いてもいない事も喋り出すし」
「でも私あの俳句良く分かん無いけど、なんとなく好きだな」
二人ともまじまじと爽子の顔を見た。
「何よ、なんか変？」

「俳句、好きなのか？」
「別にそう言う訳でも無いけど」
「かりがねって何だ。爽子待った待った。正ちゃん知ってるか」
「知らない」
健太がなぜか納得して爽子を促す。
「たぶん雁の事だと思うけど、静かで、何と無くもの哀しい感じがしていいなあって思ったの。それだけ。それより溜め池が一つ見付かったわね」
「うん、こんなに早く見付かるなんて思わなかった」
「だって今日は一回りするだけのつもりだったからな」
　目指す物が一つ見付かった割りには三人とも盛り上がっていなかった。考えてみると雁落しの話しの後、爽子が心なしか沈みがちなような、そんな気が健太も正雄もしていた。二人だけの事ならくすぐりっこでもすれば、沈んだ気持ちなど直ぐにどこかに飛んで行ってしまうのだが、爽子にはそうもいかなかった。かといって何をどう聞いていいのかも分からずに、二人とも感染したように盛り下がったままで、どうにもできずにいた。
「あのキュウリ美味しかったわね」
「え、ああ爽子がちっとも取ろうとしないから、遠慮してるのかと思った」
「あんな大きいの、しかも真ん中にベットリ味噌が塗ってあるし、食べ切れなかったら大変だと思って、このへんじゃ、あれ良くやるの」
「本家のおばあちゃんが前よくやってくれたけど、この頃そういえばやらないなあ」
　ポツリポツリ話しながら自転車を橋に戻し始める。爽子は特に沈んでいた訳でも無く、思いがけ無い大収穫はあるし、キュウリも美味しかったし、雁落しという池の名にも感ずるものがあり、むしろジワーッとした嬉しさがあったのだ。
「あのへんにも一つ溜め池が在るはずだよな」
「正ちゃん今日のコース、左回りの方が良かったのと違うか」
「そうだな、その方が走り易かったな」
　屏岩の上の雲が少し赤らんできていた。鳥が5、6羽群れて頭の上を飛んで行く。
「でも、逆回りだったら下りだから、あそこでおじいさんの家には寄らなかったわね」
「怪我の巧妙ってやつですかね」
自転車を押しながら誰からとも無く、反省会となった。
「明日はどうする」
「あ、そうだ、私しばらく駄目だわ。東京のおばあちゃんの家へ遊びに行くのよ、明日はそれでお母さんと買物よ、帰って来るのはお盆過ぎになると思うわ」
「え、そうなんか」
二人ともがっかりしてしまったが、溜め池が一つ見付かったので後はわりと簡単そうに思え、爽子が帰って来てから又探す事になった。
　帰りは新国道と違い、ずっと交通量も少なかった。回りもほとんど田んぼが続き、夕方になったせいか、燕がよくぶつからないものだと思うほど群がり飛んでいた。

　その夜、健太は夕食の後、居間でテレビを見ていた。何だかゆっくりテレビを見るのは久し振りのような気がしていた。
「健太、あなたこの頃杉本さんと仲良くしているって、あの子委員長なんだってね」
後片付けを終え、コーヒーを入れながら母親が話し掛けてきた。健太が内心ギクリとしながら空返事をしている。
「あら、いい匂い。私にも入れてよ」
「お父さんが帰る前にお風呂に入んなさいよ」
「コーヒー飲んでから入るわ、お父さん、今日は遅いんじゃないの。杉本さんて誰よ」
姉の桂子まで口を挟んでくるとうるさい事になると思い、部屋に引き上げてしまおうと健太が腰を上げかけた。
「それで溜め池を調べてるって、何なの」
浮いた尻が中途半端な位置から、そっと元の椅子に逆戻りしていた。健太は爽子が言ったように、三人で夏休みの自由研究をするんだと説明した。
「コーヒーどうする」
　ここの子供用のコーヒーは色と香りが少しある程度の薄い物、つまり大人が入れた物の残りかすにお湯をドリップさせ、更にそれを薄めた代物だった。桂子がそれをアメリカンドゥリームと、酒落た名前で呼んでいた。
「コーヒーいいや、紅茶にして」
言いながら健太はしまったと思い、桂子を盗み見た。案の定、待ってましたとばかりに桂子が健太に笑顔を見せている。
「へー、杉本爽子さんの家で、紅茶を飲んだんだ。美味しかった？ケンタ君」
「うるせー、いいだろう。人が紅茶飲もうが、どうしようが」
言い返してみたものの、深みに嵌り込みそうで、歯切れの悪い抵抗になる。
「いいわよー、何飲もうが。ようし、今度お姉さんが爽子さんにアメリカンドゥリームを御馳走して上げましょうねー」
「桂子はもういい加減にしなさい」
健太が言い返す前に母親に釘を刺され、桂子が首をすくめている。
「それより健太、溜め池の中に入っていないでしょうね…底に泥が溜まっているから足が潜ったりして、溺れたりするからね。絶対に入っちゃ駄目よ」
いつもの軽いお小言かと健太は聞き流しながら、テーブルの下で桂子と足を蹴っ飛ばしあったりしている。
「健太聞いているの、入った事あるんじゃないの、正直に言いなさい」
「…」
「絶対に入ったら駄目よ。今までの事は何にも言わないから…、本当の事を言いなさい」
いつに無く強い口調の母親に桂子の足が引っ込み、ニヤついている。

「ほらほら、白状しろ」
「桂子は黙っていなさい」
強い口調が続き、桂子も驚いている。
「前に正ちゃんと釣りをしていて木から落ちて、泳いだ事がある」
いきなりポカリときてしまった。
「いてっ、なんにも言わないって…」
今までぶった事も無く、こんな風に余り怒った事も無い母親の真っ赤になった顔に気づいて、健太の語尾が消えてしまった。
「何も言っていないでしょ」
桂子も何か不思議なものを見るような目で見ている。
「いい、これから絶対入っちゃ駄目よ。あなたが死んじゃったらお母さんどうしたらいいのよ」
母親の目から涙がポロポロと溢れ出した。健太は何が起こったのか全く分からず、どうしたらいいのかも分からず、小さな声でうん分かったと頷いている。
　付けっ放しのテレビのバラエティー番組から雑然とした音楽や、笑い声が流れてきていた。桂子は笑いを噛み殺しながら母親の大げさな芝居を揶揄するタイミングを計っている。母親がティッシュを取り、鼻をかみ、ハンカチを出してそっと目頭を押さえた。
(やだ、お母さんたら、マジみたい、健太もやけに神妙にしているし、一人だけお笑いの中にいる私って何なの）、桂子がバツの悪さを隠すように立ち上がった。
「お風呂に入ろうっと」
バッタンバッタンとやたら大きな音を立てて桂子が出て行った。
　催眠術から醒めたかのように健太が頭を回し、テレビの方を見、窓の暗がりに目をやり、母親の方に目を泳がしてみたりしている。そしてテーブルに目を落し、ぬるくなった紅茶をガブリと飲んだ。
「おやすみなさい」
健太には他に言葉が無かった。今年の夏休みは一体全体どうなっているのか、訳の分からない事が次々と起き、しかも自分で理由付けもできず、やたらにキョロキョロしているだけのような気になっていた。
　その夜、健太は母が泣いていて、そこにバッタンバッタンとのた打っている海亀がいて、その顔は良く見ると桂子の顔でケラケラ笑っていて、バラエティーな音楽がして、海にはタメイケドンが泳いでいる夢を見た。

　爽子のいない夏休みは急に色あせたものになってしまった。二人とも思いは同じらしく、どちらからも誘いに行っていなかった。
「正雄、この頃健ちゃんと遊ばないね、喧嘩でもしたの」
「別に」
この2、3日正雄は宿題をやったり、本を読んだりして暇を潰していた。孝を連れて虫取りに行く事もあったが、それも近くで済ませていた。

「正雄、どこへも行かないんだったら、本家にお使いに行ってくれない」
「いいよ」
母親が自分で作ったおばあちゃんのサマードレスを風呂敷に包んでいる。母親の目が孝も連れて行けと言っている。
「孝行くか」
もちろん行かない訳が無い。すでに麦藁帽子を被っている。
「自転車で行くから野球帽にしろ」
孝が後ろに持っていた野球帽にパッと被り直す。
　本家はJRの線路を越え、山裾を海の方へ曲がり、少し行った所にあった。途中の道も朝夕のラッシュ時の他は車もほとんど通らない。孝を先に行かせ、正雄が後ろから付いて行く、左側を走れだとか、そこで止まれだとか、後ろから細かく指示を出している。
「そこ左」
「分かってるよ」
着くと正雄は玄関に入らず、脇に回った。正雄の父がここの末っ子で、長男の末っ子が今、高三だった。夏は裏側の北向きの部屋を居間にしている。庭に池があり、正雄がずっと小さかったころ、この池でおじいちゃんの大事な鯉を釣って尻を叩かれ、手を叩かれ、散々な目にあっていた。しかし散々な目にあったのは正雄だけでは無かった。その後、おじいちゃんも、孫と鯉とどっちが大事だとおばあちゃんにいつまでも意見をされ、ずっとしょげ返っていた。それからしばらくはおじいちゃんが妙に優しくて、お菓子やら、玩具やら、何かに付けて買ってくれたのだった。今、孝が乗っている自転車もその時の物だ。
「おや孝も来たか、よう来た、よう来た」
「こんにちわ、お母さんがこれ持って行けって」
「はいありがとう、上がってお菓子でも食べて行けばいい」
テーブルにはすでに袋菓子が幾つか出ている。孝がさっさと上がり一応、封を切ってもらおうと待っている。正雄も縁側からそのまま上がった。
「梅ジュースも入れようかね」
お菓子を袋から出し、おばあちゃんが台所へ立った。襖を開け放った真ん中の部屋でおじいちゃんが一人で碁を打っていた。時たまピシッ、ピシッと高い音が聞こえてくる。
「はい梅ジュース、ごくごく飲まずにゆっくり飲むんだよ」
「孝、そっちへは行かんとけ」
「そうだ、おじいちゃんの邪魔すると大変だよ。一人で碁を打っていて、どうしてそんなにむきになれるかね」
「本、見てもいい」
「どれでも見ていいよ、もう誰も見る者もいないし、好きにするといい」
　廊下は広く一間はあり、そこに本棚を並べ、雑多な本が整理もされずに突っ込まれている。爽子の読んでいた文学全集は何だったんだろうと思いながら正雄は背表子を目で追い、適当に一冊取って戻った。

「正雄は本が好きだね」
「うん、おばあちゃん、大川の向うの八代田のはずれに一軒、田んぼの中にあるの知ってる。そこの家、屏岩の下にも田んぼがあるけど」
袋菓子をつまみ、持って来た本をパラパラめくりながら正雄が聞くとも無しに聞く。
「さて、川向うだとね」
「前、そこの田んぼでどじょう取っていて叱られた事がある」
「そりゃあ、神田の爺さまだろう」
おじいちゃんが碁を終えてテーブルに座り、氷の解けた梅ジュースを飲み出した。痩せた喉に付いた喉仏が何かの機械のように上下している。
「あの爺さまはなかなかの頑固者だ。ほら、ばあさんも知っとるだろう。圃場整理した時、屏岩の所の田んぼは代々の墓所の田んぼだと言ってそのまんまにしてしまっただろう」
「ああ、あの時の。あの時は騒ぎでしたね」
「ほれ、あの田も自然米だとかと言って、農薬はもちろん、化学肥料も入れておらん」
「あれま、そんなやり方で米ができるものかね」
「一年置きに水抜いて休ませているから、いい米できてるようだな」
健太抜きで年寄り二人で話しが弾んでいた。
「おじいちゃん、『かりがねや一羽まなかのうみ青し』っていう俳句知ってる？」
おじいちゃんの目がキラリと光った。
「何で正雄がその句を知っとる。そりゃあ昔、あの爺さまが作った句だ。中央から先生が来た時の句でなあ、えらく誉められて自慢の一句だ」
俳句を通してか、百姓仲間か、二人は知合いらしかった。
「それどういう意味、かりがねつて雁の事だっていうけど、後が全然分らないよ」
「雁金が分かったのか」
「友達がそう言っていた」
正雄は長くならないようにと警戒しながらも俳句の意味も知りたい欲求に勝てなかった。
「まなかと言うのは真ん中の事だ」
おじいちゃんが紙にその俳句を書き、正雄に見せた。
「字で見ると少しは分かるだろう」
「湖ってウミって読んでもいいのか。海だと思ってたから変なわけだ」
「字で見たら分かったか」
「雁が一羽青い湖の真ん中にいるって事だろう。一羽だから淋しそうな、悲しそうな感じもするけど」
「ほう、正雄は悲しそうな感じが分かるか」
「うん、何となくだけど」
適当に誤魔化し、大した関心も無い風を装いながらパラパラ本をめくっている。

「一羽をどう考えるかと言う事だな、雁は群れでいる鳥だからな、たまたま一羽だったとか、一羽でいるのが好きな雁だとは考えにくいだろう。これは渡りの途中で病気になったか、はぐれたかして置いて行かれた雁だな」
これは長くなりそうだ、正雄が覚悟を決めた。
「渡る事のできなくなった雁が一羽取り残されて、湖の真ん中の深くて青い所にいる。湖は風も無く波も無く、クアークアーアアンという雁の声もしない。湖の青は空の青を写した色でもあり、空間の広がりもあるだろう。それだけじゃ無いぞ、何度も読み込めばその澄み渡った秋の空を今、他の仲間の雁が飛んでいるというイメージが沸き上がってくるだろう。そうすると今度は物悲しさ、寂寥感みたいなものが言葉ででは無く、胸の中に広がってくるんだ。この雁が雁金だったか普通の雁だったかはよく分らんが、雁金の方が少し小さいから、イメージとしたらますます寂しげ悲しげだなー」
正雄は説明を聞き、爽子が何でこの句を気にいったのか分かったような気がしてきた。
「正雄が何でこの句を知っているんだ」
俳句と爽子が重なり、ごちゃごちゃになったイメージの中から、何と無く爽子を拾い出そうとしていた正雄の頭が一瞬のうちに現実に引き戻されてしまった。
「この間そこの家で水貰って飲んで、キュウリも貰ったんだけど、その時おじいさんが語ってた」
「それだけで覚えてたのか。正雄は結構俳句に向いているかも知れんな」
正雄はおじいちゃんに突っ込まれ過ぎないように本をめくりながら、余り頭を上げないようにしている。爽子が別に悲しがっていた訳でも無いのに、浮かんでくる爽子の顔が悲しげだった。そんな正雄の感傷とはお構い無しにおじいちゃんが語り出してしまった。
「正雄、俳句っていうのはな、この世界を心の中も外もスパッと切る事なんだ。その切口の単純さがすべてなんだ。単純なら単純なほど断面が綺麗になるし、分かり易いというものなんだ。そこにすべてが映し出されてくる、という訳だ。たった十七文字で作る切口に世界のすべてが映し出される、という事だ。分かるか」
「…」
「なら、その切る道具は何だ」
正雄にはさっぱり分からなかったが、途中で逃げるとおじいちゃんの機嫌が悪くなるので黙って聞いている。
「それは切れ字という物なんだ。や、かな、けり、とかいうあれだな、芭蕉は四十八字すべて切れ字なり、なんて言っとるが、なかなか簡単では無いな。前後のつながりを断ち切って、そこで意識の流れを一時的に堰止め、大きく溜めておいたものを一気に爆発させ、平凡な風景的なイメージを心の深い所にまで吹き込むんだ」
　正雄にはますます皆目分からなくなった。下手な事は言えないし、しかし何か言わなくてはと考えても、空回りするばかりだった。もう俳句より、この場から逃げる方法を考えていた正雄は、ところで孝はどこへ行った、と言うおばあちゃんの声に飛び付いた。
「ちょっと外を見てくるから。一人で自転車に乗って行くと危ないから」

そそくさと外に出て、表玄関の方に回ると孝が南側の縁側の下に在る蟻地獄に蟻を落して遊んでいた。
「孝、帰るか」
「うん」
「じゃあ、さっきの風呂敷貰って来い」
ぼんやり待っているとおばあちゃんも一緒にこっちの縁側に出てきた。
「ありがとうね、お母さんにも宜しくね」
ついでに溜め池の事も聞いてみたが、やはりこの地区の物しか分からなかった。
　帰りに健太の家に寄った。誰もいないので近くの空き地に回ってみると、健太が一人でボールを蹴っている。正雄が自転車を乗り入れ、健太の蹴ったボールをそのまま自転車の前輪で弾き返した。ボールはほとんど飛ばず、少し転がって止まってしまった。
「失敗、失敗」
「へったくそ」
と言っている間に孝が素早くボールを蹴った。とんでもない方へ転がって行くボールを健太が怒なりながら追い掛けて行く。正雄も自転車で走った。かや吊り草だのギシギシだの葛の蔓だのが散らばっている。背高泡立草の群落の前で健太がボールを拾いこっちに歩いて来た。
「正ちゃん、気を付けないとこのへん、犬の糞だらけだぞ」
ボールを両手で挟んで近付いて来た健太が、そのボールを正雄にぶつけようとしている。
「タンマ、タンマ。それ反則」
と言っている間にボールが飛んでくる。自転車の上の正雄には避け切れず、胸に命中してしまった。
「わ、お兄ちゃん、きったなーい。どこに付いた」
正雄も胸を見ている。
「ジョーク、ジョーク」
健太が笑いながらボールを拾った、
「糞なんか付いていないよ、でも糞は本当に落ちているからな」
健太が拾ったボールを孝の頭で弾ませている。
「健ちゃん、どうしてた」
「別に何もして無い。なんかあれから気が抜けちゃって」
「俺もだよ、今、本家へお使いの帰りなんだけど、お昼っから川へでも行かないか」
「うん行こう、釣竿でも持って行くか」
孝が犬の糞を見つけて、棒で転がして遊んでいる。
「お兄ちゃん、タメイケドンのうんちってこんなか」
孝の持ってきた棒の先に糞が刺さっていた。
「きったないな、早く捨てろ、タメイケドンの糞がそんなに小さい訳が無いだろう」
「それなら…そのボール位」
「小さい小さい」

「それじゃあ」
孝が回りをキョロキョロ見回しているが、適当な物が無い。
「健ちゃんくらい」
健太が体をクニャクニャくねらせながらしゃがみ込み、糞の真似をしている。正雄も困ってしまった。もっと大きいと思うけれど、一体どの位なのだろう。
「あの家くらいはあるよな、健ちゃん」
「分からん、けどあるだろうな、…正ちゃん、爬虫類のうんち見た事あるか」
二人ともヘビやトカゲのうんちなど見た事も無い。
それどころかせいぜい自分のうんちと犬のうんち、鳩のうんちくらいしか思い出せない。猫のうんちすら定かでは無い。
　前に遊牧民が羊のうんちを拾ってカマドで燃しているのをテレビで見て、いくら乾いているからといって何でうんちがあんなに良く燃えるのかと、不思議に思った事があった。二人とも養豚場や、畜産農家へ見学に行った事があったが、今は牛も配合飼料で育てているので、繊維が多く混ざった乾けばいかにも良く燃えそうな物は見た事が無かった。
　結局二人とも自分のうんちを巨大化した物しか思い浮かばなかった。

　川原は石の照り返しで暑かったが、川風も適当にあり、釣糸を垂れていると気持ちが良かった。さざ波の立っている瀬に向かって上流から糸を流して行く。
　まるで当りが無い。川原の焼けた石が熱いので、二人ともスニーカーを履いたままだ。何度やっても当りが無く、健太は餌のウインナーソーセージを自分で全部食べてしまい、水際で石を引っ繰り返して川虫を捕まえたりしている。それもそのうち飽きてしまい、正雄のポイントに石を放り込み出した。
「正ちゃん、釣れんからもう止めよう」
正雄も当りが無く、魚より爽子の事をぼんやり考えていた。健太の所へ戻り、靴を脱ぎ、水を捨て、逆さにして焼けた石の上に置いた。短パンから出た太ももが焼けた石に触らないようにして座る。
「アチッ」
「どじ、石を引っ繰り返してから座るんだよ。…正ちゃん、これ」
健太が握り拳ほどの石を出している。
「何、投げるのか」
「違うよ、それ化石だろう」
見ると確かに蜆みたいな貝の化石が付いている。
「これどこにあった」
「そこ、さっき投げようと思って取ったら付いてた」
正雄も辺りを見回し、2、3個引っ繰り返してみる。
「もう無いな」
屏岩の近くで化石が少し取れるので、二人とも余り熱心になっていない。

「正ちゃん、爽子の事どう思う」
後ろの方で蛙が一匹鳴き出した。弱々しい声が聞こえたり消えたりしている。
「どうって」
正雄は答えに窮している。窮していると言うか頭に何も浮かんでこなかった。爽子の事も分からないし、二人組が三人組みたいになったけれど、それがどういう事なのか、これからどうなるのか、もちろん爽子がどう思っているのか何て見当も付かない。無理やり答えを見つけようとしても頭が空回りするだけだった。ただ一つだけ、はっきりしていた。健太との友情は壊したくない。それは健太も同じらしく、それ以上深入りしてこなかった。
　屏岩が青空の中にくっきりと立っていた。二人とも下を向いていられず、引っ繰り返した石に後ろで手をついて川面から屏岩に目を移した。
「今度爽子を誘って化石取りに行こう」
「そうだな、ひょっとしたら恐竜の化石があるかもしれないしな」
口に出してみたものの、二人とも余り期待はしていなかった。
「橋の方の葦原に行ってみようよ。あっちの方が何か釣れそうな気がする」
石の上の尻も熱いし、そろそろ痛くもなってきていたが、むしろ話題が転換できて二人とも内心ホッとしていた。
　川の真ん中で水しぶきが上がり、魚が跳ねたようだった。正雄の靴は水を切ったといってもスポンジがたっぷりと水を吸っている。歩く度にグチュグチュと気持ちが悪い。何で水の中だと平気なのか不思議と言えば不思議だった。
　土手を二人がジグザグに走ったり、ジャンプしたりしながら走って行く。葦原に着いてみると、上から見るよりずっと深く、所々に水もあり、ズブッと靴が沈んだ。今日は中からヨシキリのけたたましい声も聞こえる。
　正雄がどこで釣ろうかと物色していると、先に奥に入っていた健太が突然飛び出して来た。
「正ちゃん、逃げろ！藪蚊が物凄い」
健太が手で体中を叩きながらダッシュして行く。正雄の回りにも蚊があふれだし、慌てて健太の後を追って逃げる。止まると、すぐに回りに蚊がまとわり付いてくる。とうとう二人は土手の上まで駆け登った。上には風があり、蚊が吹き飛ばされ、息がつけた。膝の上に手を置き、大きく荒い息をついている。
「健ちゃん、これじゃあ無理と違うか」
健太のももと、腕にプチプチと赤い斑点ができ、おまけに足には途中のススキで何カ所か切傷もできている。健太がそれをボリボリと掻きむしったり、爪でバッ点を付けたりもしている。
「正ちゃん、刺されなかったのか」
「なんとかね」
「このままじゃ済ませませんよ。向こう側に回ってみよう」
二人は土手を回り込んで下流の川原に下りた。
「ほら、こっちは風があるから大丈夫だ」
こっち側は葦の群落も切れ、小さな固まりになって点在しながら石の川原に続いている。

　健太も今度は深く入り込まずに周辺部をうろついている。葦の周りは土手側にも水があり、ズブリと潜る所もある。良く見るとザリガニが隠れていた。健太が正雄からウインナーソーセージを分けて貰い、早速糸を垂らしだす。正雄は川の方に回り、水際の葦の根回りを物色している。
　健太が直ぐに一匹釣り上げ、それを持って川原をうろついている。股になった木の枝を拾い、それにザリガニを挟んで川原に立てた。そうしておいて、ペットボトルを捨ってきた。
「正ちゃん、ナイフ持って無いよな」
「うん、持って来てない」
また健太が川原をキョロキョロしだした。今度は硬そうな石を拾い、大きな石を台にして割り出す。なかなか割れなかったが、思い切り叩くとパカッと割れ、更に何個かに小さく割った。正雄が大きな音を立てている健太を見ていたが、何か納得して自分の釣に戻った。
「健ちゃん、余り大きな音立てるなよな」
健太が割れた石の破片の中から鋭く尖った物を選び出し、ペットボトルの上を切り出した。
思ったより良く切れている。ザリガニが入るだけ開けばいいので、事は簡単に済んだ。それに水を入れ、切口をペコッと広げ、ザリガニを押し込んだ。
　ザリガニは良く釣れた。
「何だ正ちゃん、一匹か」
やって来た正雄に半分水に沈めたザリガニの詰まったペットボトルを自慢げに指している。
「俺、ザリガニじゃ無くて鯰を釣ろうと思っていたもん」
と言いながら健太のペットボトルにザリガニを押し込む。
「もうこれギッシギシだよ」
「うん、そうなんだけどさ」
しゃがみ込んでペットボトルを揺すっている正雄の所へ健太も上がって来た。
「わっ健ちゃん、その足の黒いの何だ」
ちょうど正雄の目の前にある健太のふくらはぎにヒルが貼り付いている。
「葉っぱだろう」
健太が無造作に払ったが取れず、押されて尻尾の方がムニュッとふくらんだりしている。
「何だこれ、気持ち悪い。正ちゃん取ってくれよ」
「やだよ、俺だって気持ち悪いよ」
「薄情だな」
健太が言いながらむしり取って石の上に投げ捨てた。蛭が石の上でモゴモゴと尻尾を上げたり、頭を上げたりしていたが、直ぐに動かなくなった。それを二人でこわごわ見ていたが、正雄が健太のふくらはぎを見てまたワッと叫んだ。吸い付かれた所から血が一筋ツーっと流れ出している。健太が掌でそれを拭った。
　血が薄く横に広がり、見ているうちにツーっと又血が流れ出てくる。
「正ちゃん、止まらないよ」
「痛い？」
「全然、痛くも痒くも無い」

又拭った。又ツーっと流れ出す。
「どこの小僧かと思ったらこの間の小僧かの」
蛭に気を取られていた二人がハッと顔を上げると雁落としのおじいさんが立っている。
「ほー、蛭に吸い付かれたのう。ちょっとまあ、待っとれ」
と言っておじいさんが土手の方へ戻って行く。
相変わらず健太のふくらはぎには血の帯びが付いている。おじいさんがヨモギを摘んで直ぐに戻って来た。
「ボーっと立っとらんで、その辺の座りのいい石に座らんかの」
健太が座ると、青汁が出るまで良く揉んだヨモギを健太のふくらはぎに貼り付けた。
「しぼらくこうやって手で押さえて置けばいい。直ぐ止まるでの」
　おじいさんがどっこらしょと腰を上げ、葦原をじつと見ている。
「あの辺はのう、昔は沼だったで、わしも良く蛭に吸い付かれたもんだ」
沼と聞いて健太も正雄も思わず腰を浮かせた。健太は立つとヨモギを押さえていられ無くなるので、又腰を下ろしてしまった。正雄が立ち上がり、おじいさんに聞き始めた。
「沼ってあの葦のどのへんですか」
「そこの葦でない。そこは川だで、土手の向こう側だ、やっぱり葦が生えとろう」
二人は耳を疑った。それならタメイケドンの足跡にピッタリだった。変なものに吸い付かれた健太のショックも消し飛んだ。
「大きさはどのくらいですか、溜め池くらいはありましたか」
「そうさの、溜め池のう、まあそんなもんかのう」
やったー、二人とも飛び上がらんばかりだ。この場に爽子がいないのが本当に残念だった。
「川の向うにも同じような沼があったがのう」
「え！」
このじいさん、本当は俺達が余り喜ぶもんだから、からかっているんじゃないだろうか、それとも夢だろうか、この前、亀の姉ちゃんの夢を見たばかりだからな、健太は動け無い分何だか疑り深くなっている。
「本当だがの、川の蛇行した跡だがの」
どうも二人とも顔付きが何か変になったらしく、おじいさんが自分で念を押した。
「どれ」
短く呟き、おじいさんが水際の方へ歩いて行く。
「健ちゃん、本当かなー」
「分からん、何だ正ちゃんも疑ってたのか。何だか狐につままれているみたいだ。ここだって痛くも痒くも無いし」
健太がヨモギを取ってみると、もう血は止まっていた。ヨモギの手当てが良かったのか、それとも狐につままれて最初から血なんて出ていなかったのかと、ゆっくり顔を上げ、おじいさんの方を見やった。

　おじいさんが水に入って何やらバシャバシャやっている。西日が逆光になり、怪しげなシルエットになっていた。尻尾が付いでいるようにも見える。恐る恐る近付くと、水から竹筒を引き上げている。
「それ何ですか」
「鰻を取る仕掛けだがの」
尻尾みたいに見えたのは腰に付けたビクだった。仕掛けは中に傘の骨のような竹ひごが先すぼまりで入っていて、もう片方には小さな穴が開き、栓がしてあった。
「入っとるのう」
おじいさんが栓を開け、揺すりながらビクに鰻を出した。
「今日は大漁だのう、2匹も捕れたで」
そう言って口を上流に向けて又沈めた。
「前は良く捕れたが、この頃は少のうなった。ほれ向こう側みたいに護岸にコンクリートを打ってしまうと、鰻の巣穴が無くなるでのう、んでもこの川はまだましな方だで」
二人もおじいさんの目を追って対岸に白く眩しく光るコンクリートを見ている。
　大川にはたいてい川の曲がりの流れのきつい所にコンクリートが打ってあったが、他は石積みの護岸で何もして無い所もたくさん残っていた。
「沼はいつ頃まであったんですか」
「わしの若い頃にはまだあったが、沼といっても浅くて田んぼみたいなもんだったのう、そういうもんは段々泥で溜まったり、枯草で埋まったりして無くなって行くものだで。今じゃヨシズも使わんでのう」
「ヨシズって何ですか」
「…ヨシズのすだれだ。…この鰻持って行くか？」
このおじいさんにはいつも驚かされる。二人とも突然で返事に困ってしまった。
「わしもばあさんも歳だで、鰻はあぶらっこ過ぎるでな」
「あ、頂きます」
事情が分かった途端に声が出ていた。健太がペットボトルを拾い又上を切った。
「じゃあ、この中に入れて下さい」
おじいさんが無造作に鰻をつかみ、その中に押し込んだ。
　その夜は一匹の鰻を前にして、健太の家でも正雄の家でも一騒動があった。
　健太の母親は生きている鰻を見て、初めからあきらめてしまった。桂子が自分でやると言って大騒ぎになったが、結局キッチンの床を水浸しにし、逃げた鰻をチリトリですくい、バケツに戻して終わった。
　正雄の母親は鰻をさばかず、ぶつ切りにして鍋に放り込んでしまった。タマネギと一緒に良く煮込み、醤油で味付けし、最後にネギを入れ、卵でとじて丼にした。なかなかの味だった。でも骨を取るのが大変で、しかも蓋を取った時、正雄の丼には鰻の頭が入っていた。
　それからしばらくして、8月16日に爽子が帰つて来た。

　爽子の出現でほんの少しギクシャクしかけた健太と正雄だったが、爽子が東京から戻ると不思議なバランスと統一が取れ、二人組だった時よりもっと良くお互いの事が分かるような気分になっていた。
「それで正雄君、そのワイルドな鰻丼食べたの」
「もち」
「恨みがましい目をした鰻の頭も」
「お母さんが食えるって言うからさ、食ってみると結構うまかったよ」
「えー！骨は」
「頭の骨はあまり気にならなかったなあ。丼はそれはそれは美味しかったですよ。まったりとしたこくのある味、とろけるような皮の脂、それにタマネギの甘味がからまり、更にネギの刺激が複雑なハーモニーを醸し出す。そしてチクチクと舌を刺す鰻の骨が濃厚な味に馬鹿になり掛けた舌に再び活力を与える」
「分かったわよ、分かった。それなんの漫画よ、鰻の骨が脳味噌に刺さってるんじゃないの」
久し振りに笑いが戻ってきた。
「健ちゃん、鰻、食べられなくてさ」
健太は鰻に関しては遅れを取ったと思っているらしく、この話になると、いつも大人しくなった。
「それでさあ、健ちゃん、その鰻まだバケツで飼ってんの。健二って、名前まで付けてんだよ」
「何それ」
爽子の顔はまだ笑っていなかったが、腹がよじれ出している。
「姉ちゃんが勝手に付けちゃったんだよ。本当はドラゴンスネークって付けたんだけど」
「なあにそれ、そっちの方がもっと可笑しいじゃない」
爽子が腹のよじれを押さえ切れず、全身でゲラゲラと笑い出した。健太も正雄も何が可笑しいのか良く分からなかったが、つられて笑っている。
「餌、あげてるの」
「金魚の餌をやってる。良く食うよ」
「ザリガニはどうしたの？」

　ザリガニは正雄の家で孝にくれ、健太は一匹だけ持って帰り、金魚の水槽に入れたのだった。水草や、竜宮城の模型がザリガニにピッタリと似合った。鰻を水槽に入れる気はしなかったが、ザリガニは金魚より良く合った。
　事件は次ぎの日の朝起きた。本当はその夜のうちに起きていたのだが。
　朝、歯を磨きながら水槽を見た桂子が、唸った。口じゅう泡だらけにしたまま、健太を叩き起こしにすっ飛んで来た。
「健太！起きなさいよ。あんたのザリガニ早く出して！直ぐ、今直ぐよ！」

桂子が健太のタオルケットをむしり取った。健太の寝ぼけ眼に、頭はボサボサで、口じゅう泡だらけで、鼻の頭にも白い泡を付けた桂子の顔がアップになって飛び込んできた。それでも寝ぼけながら桂子に引っ張られて水槽の前に行くと、ザリガニは竜宮城の脇で静かに底の砂利にへばり付いていた。
「グッピーが半分いないのよ。良く見なさいよ。こいつが絶対犯人よ、こいつがグッピーを食べちゃったのよ、早く出して、今直ぐよ、早く！」
健太が慌てて水槽に手を突っ込んだ。上から先ずザリガニの背中をギュッと押さえ、それから両手を入れてハサミを持って水から上げた。竜宮城が引っくり返り、砂利が水の中に舞上がっている。桂子の剣幕とは裏腹に、それがまるでタメイケドンの通った跡みたいに見え、健太は思わずニヤニヤしてしまった。
「何ニヤ付いているのよ。そんなもの捨ててしまいなさい。今日中に捨てるのよ、いい」
「あなたたち朝から何騒いでいるのよ。あらやだ、桂子、鏡、見てみなさいよ。健太の顔にまで泡を飛ばしているじゃない」
母親が半分吹き出しかかっている。鏡を見た健太がザリガニを持ったまま腕に顔をこすり付けた。取り敢えず風呂場の洗面器にザリガニを放した。

　「それでそのザリガニ捨てたの」
「うん、だってバケツには鰻が入っているし、ペットボトルじゃあ狭過ぎるだろう。ザリガニは捨てたけど鰻はそのままにして置いたんだ。そしたら姉ちゃんが健二地震だぞ、予知してみろ、とか言っていつもバケツを蹴とばすもんだから、とうとう健二になっちゃたんだよ」
「やだ、面白過ぎる。鯰と間違えてる」
久し振りの三人は笑い転げる事でお互いの意識を混ぜ合わせようとしているようだった。
　笑いの種が次々出てくる。
「それで正雄君ちのはどうなったの」
「うちでも事件が起きたんだよ。うちは鰻は食べちゃったからバケツはちゃんと使えたんだけどね」

　孝がバケツにザリガニをあけ、数えてみると大小取り混ぜて5匹もいた。その日は餌は何がいいとか、ザリガニに紐を付けろだとかと大騒ぎになった。
「うちの事件は2日目の朝から始まったんだ」
「変な声出さないで、さっさと進めなさいよ」
孝がその朝数えてみると1匹いなくなっていた。逃げ出したのかと回りを調べたがどこにもいない。結局猫が捕ったという事になり、ざるで蓋をして置いた。ところが次ぎの日も1匹いなくなった。ざるの蓋は外れて近くに転がっていた。ざるの蓋が風で飛んだのかと、今度は石を乗せておいた。それなのに1日置いて次ぎの日に今度は一番小さな奴がいなくなった。蓋は飛んでいなかった。
「やだ、どうしたのそれ、まるでミステリー」

「共食いしてたんだ」
「えー、どうして分かったの」
「良く見てみたら口から足が出てた」
「おっおー、それでどうした」
「今、大きいの2匹でにらみ合っている」
「でも最初の2匹は猫か鳥にとられた可能性もあるわよね」
「うん、真相は…バケツの中…にも無いから分らない」
「もう残ったのも逃がしてやった方がいいんじゃないの」
「うん、孝次第だけどね」

　爽子の部屋は相変わらず殺風景だった。この前置いてあった文学全集も片付けられ、その代りに夏休みの宿題が散らばっている。ずっと考えないようにしていたのに、この散らばった宿題帳を目の前にすると否応も無しに、最後の現実が健太の頭をよぎっていく。と言っても本当によぎっただけだったが。
「川の所の沼は溜め池じゃないようだけと、別にいいんじゃない。もともと完全な証拠なんて無理なんだから。それらしい事を積み上げて行く方が楽しいわよ」
　爽子は東京で見た博物館の恐竜を思い出していた。入った時の驚きが歩いて行くにつれてしぼんでしまい、一回りしてエントランスに戻って来た時には、そこにあった骨格模型がただの模型にしか見えなくなっていたのだった。
「そうなんだよ、この前もタメイケドンのうんちの話で盛り上がってさ」
健太が話の輪に又復帰した。
「やっぱり家くらいはあると思うだろう」
「どのくらい食べるのかしら、爬虫類は哺乳類よりずっと少ないはずよ。あ、そうだ。タメイケドンは海で餌を取っているのよ。海がメインの生活の場だとすると海でうんちしているかも知れないわね」
正雄は家みたいに大きいボール状の物を想像し、健太は金魚のうんちみたいなドラム缶がつながって行く所を思い描いている。
「きっと、そのうんちを魚が食っているな」
「そうそう、陸だと潰されてしまう奴がいるかも知れないけど、海なら平気だよな。おしっこも洪水にならずに済むしね」
「大川にタメイケドンのおしっこの鉄砲水が出たら凄いだろうな」
「やな事言わないでよ、この前入った時も生温くて、ちょうどそんな感じだったんだから」
笑いながら健太がポケットをごそつかせて、この間の化石を取り出した。
「ほら、これ、この間川原で拾ったやつ、こっちは屏岩の近くの崖で取ったんだ」
爽子の顔色をうかがいながら差し出している。貝の化石と植物の化石だった。
「そこどこ、私も採りに行きたい」
「この前も爽子を誘って行こうって言っていたんだ。自転車なら直ぐだよ」

黒っぽい色の石に浮き出た木の葉や貝にももちろん魅力があったが、爽子はそれよりも化石が出てくる場所を見てみたかった。
「自転車で行けるの？山の中とか歩かないの」
「道端の崖だよ、何も歩かないでいいさ、楽なもんだよ」
爽子のいい反応がしぼまないように、健太が食い下がっている。しかし神秘的な場所を想像した爽子は少しがっかりしていた。
「金鎚あるか。無かったらうちのを貸すけど」
「あると思うわ」
「正ちゃんちの方から行った方が近いから、この前のコンビニで待ち合わせて、それから正ちゃんちに寄って行こう」
いつものように1時という事になった。爽子が盛り下がってしまったように見え、慌てた健太もほっとしている。
　爽子が２段ベッドの枕元の引き出しから博物館の出口で買った外国産の貝の化石を出して、二人に見せた。断面がピカピカに磨かれたフズリナの化石が黒地に白く複雑な模様を浮かび上がらせ、それなりに奇麗だった、
　健太と正雄は代わる代わるそれを手に取り、矯(た)めつ眇(すが)めつ都会を感じ取った。ゲームのイベントで行った1年前の東京より、爽子のフズリナの化石の方がずっと都会風に思えた。

　午前中、健太は母親に言われて机に向かった。宿題は少しもはかどらなかった。机に宿題帳を広げただけでお昼になってしまった。散らかり方だけなら爽子とさして違わない。それに気付き、健太が一人で楽しくなっている。(うん、結局結果に大差は無いな）と勝手に納得してお昼は盛り盛り食べた。
「健太、宿題進んだの」
「うん、まあね」
　コンビニには爽子が先に来ていた。麦藁帽子に白いブラウス、デニムのスカート、切りかえしラインに白い糸で太いステッチが入っていてブラウスと一体感を作っている。
「あれ自転車は？」
爽子のマウンテンバイクが無かった。
「まいっちゃったわよ。お昼に見たらパンクしていて。屏岩の近くなら歩いても大した事は無いでしょう」
「うん、大した事は無いけど、後ろに乗ればいいよ」
「でも」
「平気だよ。この辺は車も少ないし」
ここで爽子を乗せなかったら、この先こんな降って湧いたような幸運が在ったとしても、一生掴むことなんかできない。健太が食い下がる。
「大丈夫、大丈犬」
健太が素早く自転車の向きを変え、荷台を爽子の前に持ってきた

「そうね」
爽子が帽子のゴム紐を顎に掛け、サドルに掴まって荷台に跨った。
「やだこれ、足をどこに置くのよ」
「車軸のそこのボルトの所へでも乗っけとけばいいさ」
爽子の準備ができ、健太が乗ろうとすると、既に爽子が乗っているので後ろからは跨げない。やむをえず前から足を上げて跨こうとすると、自転車がぐらぐらと大きく揺れた。
「ちょっと、ちょっと、本当に大丈夫なの」
ここで引き下がる訳には行かない。絶対にそんな事はできない。しかしこのまま前から跨ぐのには無理がある。支え切れない。
「大丈夫、大丈夫だけどちょっと降りてみて」
爽子がサドルに手を着いて後ろにピョンと飛び降りると、健太がサドルの下にあるレバーを回し、爪先くらいしか着かなかったサドルの高さを足がしっかりと着く位置まで下げた。
「ほら、これで大丈夫」
「本当なの」
爽子はまるで信用していない。
「それじゃ、今度は俺が先に乗っているから、後から乗ってみよう」
健太がサドルに跨り、しっかりと地面に足を着いて踏んばっている。
「これで駄目だったら歩いて行くからね」
乗ってみると結構安定していた。
「ほら、大丈夫だろう、よし出発」
走り出す時に少しよろけたが、スピードにのればふらつく事は無かった。
　正雄の家に着くと中で孝がぐずっている。正雄が直ぐに出てきて自転車を引っ張り出した。
「孝君、なに泣いているの」
「なんでもない、なんでもない。さ、行こう」
さっきまで連れて行け、行かないで、もめていたのだった。
「それより自転車どうした？」
「パンクしたんだって」
「私、正雄君の自転車にするわ。ほら、荷台が低いから足が着くでしょう、うん、この方がいいわ、怖くないもの」
爽子がもう正雄の自転車の後ろに跨っている。
正雄の自転車は前から跨げるように、フレームが斜めに下がっていた。
「二人乗りをするんだったらこっちの方がいいよな、健ちゃん」
今度は正雄が張りきりだし、前からなんなく跨った。
「ほら、安定してるでしょう。さあ出発」
爽子の掛声で正雄が走り出した。健太にとっては全く残念な展開になってしまった。舌打ちを一つして、サドルを戻して健太も二人の後を追った、
　「全く正雄はしょうが無いわね。私もちょっと挨拶しようと思っていたのに」

正雄の母が道に出て三人を見送っている。
「まあまあ、後ろに爽子ちゃんを乗せちゃって。あれじゃあ直ぐ登りに掛かるから、そのうちに顎を出すわ。孝、孝、ほら自転車出して、お兄ちゃん達を追い掛けな。直ぐ追い付くから」
　正雄は必至になってこいだ。太ももがもうパンパンになっている。そこにジリジリと夏の太陽が照り付け、ますますふくらんできた。
汗はもう幾ら出ても役に立た無くなっている。
「はい、ストープッ」
正雄がこぐのを止めた。自転車の惰力も上り坂に押され、直ぐに尽きた。
「健太君、正雄君と交代よ」
爽子が振り返ると、健太の後ろに口をへの字にした孝がいる。
「あら孝君、付いて来てたの」
道端に座り込んで太ももを叩いている正雄が孝の方に顔を上げた。
「お母ちゃんがさ、直ぐに追い付くから追いかけて行けって」
「お前なあ」
「いいじゃない。さてはさっき泣いていたのはこれだったのね。よし、お姉ちゃんが許可しましょう」
これで正雄にはもう文句の付けようが無い。
「正ちゃん。行くぞ」
健太が又回ってきた出番に張り切っている。
「お兄ちゃん、先に行くよ」
正雄も立ちがり、上り坂にうんざりしながら自転車に跨った。しかし、一人で乗る自転車は思いのほか軽く、直ぐ二人に追い付いた。健太を見ると、この役から絶対降りてなるものかと、坂をものともせずにこいでいる。あっと言う間に健太のＴシャツの背中がぬれてきた。顎からもポタポタと汗が流れ落ちている。
「健太君、ムチ入れようか」
健太が言い返す余裕もなく黙々とこぎ続けている。爽子がそろそろ交代時かなと思った時、上り坂が終わった。
「やっほう」
最後の力の入った一こぎの後、ゆるい下り坂になった。後は採集場所まで登りが無く、軽快に自転車が走る。カーブを2、3回周って健太が自転車を止めた。なんの変哲も無いただの道で、崖と言ってもたいして高くも無く、路肩から直ぐに疎らな藪になっている。
「ここ？」
爽子が自転車から降り、辺りを見回した。明らかにがっかりした様子を見せている。
　山の反対側はいつもどおりの田んぼが見おろせ、どこの田んぼも十分黄色く色づいている。その黄色の向うに黒く川が流れ、時々渡る風が川面を白く変えて行く。その向うに家々が小さく影になり、所々にビルが白く光って見える。街の騒音もここまでは届かず、蝉と鳥と風の音が遠く近く、混ざり合い、田園風景としては良くまとまっていた。

「孝、自転車を脇によけとけよ。おまえ金鎚持って来たのか？」
孝は袋から金鎚を出して得意になっている。
ここが秘境的場所だとは初めから期待していなかった爽子も、気を取り直して金鎚を出した。
「このへんに落ちている黒っぽい石を拾って、先ず表面に化石が出ていないか見て、それから叩いて割ってみるんだ。下に落ちているのばかりじゃ無くて、崖の所に出ているのを叩いてもいいけどね」
健太が爽子に一応のやり方を教える。
「孝も分かったな。手を叩くなよ」
　それからしばらくの間はガンガン、カンカンと金鎚の音が響いた。蝉と鳥と風と金鎚の音、田園風景にそれほど違和感は無かった。
「あった！ほら、貝だ」
正雄が一つ見付けた。四人ともそれを見て、又黙々と石を叩き出す。前よりテンポが上がっている。
　それから30分、先ず孝が脱落した。天道虫を見付けて金鎚を放りだしてしまった。爽子のペースも落ちてきて、ついにさっき正雄が見付けた蜆をいじくり出している。これで何も出なかったら信用が丸潰れになってしまう。健太が崖に貼り付いて、キツツキみたいに叩き始めた。石の粉が口に入り、時々ペッペッと吐き出している。
「あった」
又蜆だった。さっきの物と同じ様にきれいに出ている。川原で健太が拾った物は少し磨耗していたが、これはきれいに貝の筋が出ている。健太が直ぐに石割りに復帰して又キツツキになった。
　爽子は腕も腰も疲れたし、出そうも無いので周辺部を探索しようとブラブラ歩き出した。カーブを曲がると崖にはセメントの吹き付けがしてある。午後の夏の日差しが跳ね返され、そこはオーブンの中にいるような暑さだ。風が無かったら、こんな所に1分もいられないと思いながら次ぎのカーブを曲がる。まだセメントの吹き付けが続いている。そういえば川原から見ても随分白く続いていたし、相当切り崩して道を作ったんだと思いながら歩いた。これが続くのなら先へ行ってもしょうが無いかと思いながら、暑さで爽子は谷側に移動した。下から少し風が吹き上げてきている。谷はせいぜい1Oメートル位に思えた。斜面は灌木の藪になっている。良く見ると所々に大きな黒い石の塊が見えた。
「あ、そうか、そうなんだ」
爽子がくるりと向きを変え、急いで皆の所へ戻り始めた。
　石を叩く音が止んでいた。二人とも道端の石に腰を下ろしてぼんやり川の方を見ている。
「止めたの、新しいの出た？」
「もうここには無いみたい」
二人ともぐったりとしている。健太が真っ赤になった掌を爽子に見せた。中指の下に豆が一つできている。
「あらかわいそう、それより向うの方にありそうよ」
「あっちは全部セメントで固められてるじゃないか」

豆には大した同情も集まらず、照れながら手を引っ込めて健太が言った。
「そうじゃ無くて、下よ下！」
「…」
「お兄ちゃーん」
少し行った所で孝が叫んだ。
「タメイケドンのうんちの化石見付けたよ」
見るとサッカーボールより少し大きい丸い石を転がして来ている。
「重いよ。こっちへ来てよ」
「下がどうしたって」
三人が話を続けながら孝の方へ歩いて行く。
「だから、崖を切り崩した時の石が下に落ちてるのよ。これと同じ様な黒っぽい石よ」
「あ、そうか。その石にも化石が入っているかも知れないな」
正雄がもう一叩きするのもうんざりだ、と思いながら健太を見ると、健太も叩き疲れた様子を見せている。
「ほら兄ちゃん、これうんちの化石だろう」
「こりゃあ違うだろう。随分風化してタマネギみたいに剥けるなあ」
「はい残念でした。ただの丸い石」
「そうね、タメイケドンの鼻糞より小さいかも知れないわね。さあ、向うへ行ってみましょう」
孝がなお未練がましく金鎚でそれを叩き出した。ポロポロと表面がタマネギの皮のように剥げ落ちてくる。
「孝ぐずぐずしないで早く来い」
孝がタマネギ石に一蹴りくれて、やっと走って来た。
　三人は道の谷側を風に吹かれて歩いた。風が少し強くなった。上空の風はさらに強く、セメントの崖の凸凹のスクリーンに雲が次々と通り過ぎて行く。
「無いじゃないか」
「カーブを曲がるとあるわよ」
三人が崖下を覗き込みながら歩いて行く。
「でもなんか黒っぽい石があるな」
「うん、確かに」
カーブを曲がると爽子の言う通り、黒い石が藪の中の土から顔を覗かせでいる。
「私はここ降りないわよ。あなたたち二人で取ってきてよ」
二人が顔を見合わせた。
「そうだろうと思ったよ」
「孝は上で待ってろよ」
二人が灌木に掴まりながら降り出した。
「正ちゃん、このへん足場が悪いなあ、どうする」
「下まで降りてみよう。下の方がありそうだよ」

そうと決れば10メートルくらい、二人はあっと言う間につたい降りた。
　下は傾斜が緩み土砂が溜まっているが、黒い石もあちこちに見える。
「一番下まで降りちゃおう、下の方がいっぱい転がってる」
崖下に降りると、藪の陰になり上の道が見え隠れしている。二人が直ぐに叩き出した。
「あったぞ。木の葉」
「あ、俺も。なんだここ、いっぱいあるじやないか」
割りながら横に歩いて行くと、瞬く間に袋がいっぱいになってしまった。
「もういいよ、正ちゃん」
「うん、持ち切れないよな。良さそうなのを選んで。あとは捨ててしまおう」
石が小さいせいもあってか、完全な状態の物は無かった。二人はなるべく大きくて、端がきちんと出ている物を選んで残りは捨てた。
「爽子に一つ塊を持って行ってやろう」
健太が良さそうな石を選んだ。
「どう、あった」
音が止んだので上から爽子が呼んでいる。
「あった、あった。いいのがいっぱいある。今、上がるから」
正雄が登り始めた。
「正ちゃん、ちょっと待てよ」
大真面目な顔で健太が正雄の服を引っぱった。
「帰りは下りだろう」
正雄がいぶかしげな顔をして健太を見ている。
「爽子を乗せても今度は替わる必要無いだろう」
「だから？」
正雄は健太の考えていることが分かったがとぼけている。
「だからさ、どっちが爽子を乗せて行くかって事さ」
「健ちゃん、手の豆が痛いんじゃないのか」
「豆くらいどうって事無いさ」
「自転車は俺のだからな」
「誰の自転車かなんて問題じゃあ無いだろう。前、正ちゃんがさ、欲しがっていた船の模型やるよ」
「そういう、物で取引できる問題かあ」
二人が睨み合った。石の袋が肩にズシリとした重みを掛けてきている。
　健太が正雄の前で腕をぐるぐる回し出した。
「ようし。それならジャーンケーン」
「ちょっと待った。勝負は一回だぞ。一回決め」
二人がグッと又睨み合った。
「ジャンケン」

「ちょつと待った」
今度は健太が待ったを掛けた。
「アイコの時は休み無しで行くぞ。ジャンケンポン、ポンポンポン、て続けるからな」
「何してるのー」
「今行く」
「よし、もう待った無し。ジャンケンポン」
　ジャンケンはずっと正雄が優勢だった。ところがこの間、健太が癖で最初にグーを出す事が多いと教えてしまっていた。興奮すると人間は手に力が入り、手を握り締め、グーを出す事が多くなるらしい。雑誌に載っていたのを読んだ正雄が健太にバラしてしまったのだった。その後はたぶん五分五分、いくらか正雄が優勢ぐらいの戦績になっている。
　正雄は考えた。だから健太はグーを出さない。チョキかパーだ。だからパーを出せばアイコか負け、チョキを出せばアイコか勝ち、だから出すのはチョキしか無い。アイコなら次ぎはグーだ。パーを出して自分から負けるのは嫌だし、チョキのまま動かずに負けるのもご免だ。その後はもうなり行き次第だ。
　健太はグーを出していた。
「なんだよ健ちゃん。この間グーばっかり出してるって教えてやったろう」
「あ、そうだ。何も考えてなかった」
「もう、全く馬鹿ばかしい。健ちゃんには負けたよ。行こう」
健太は帰り道、爽子を乗せて下り坂を快適にドライブするビジョンの中で、もう2、3個石を持って行こうかと思うほど背中も軽くなった。
　「何やっていたのよ。遅いわねー」
「ご免、ご免」
二人が路肩の雑草に掴まってようやく道に這い上がった。健太は何も言わず、締まりの緩くなっている口もとを下に向け、直ぐに袋を降ろし獲物を広げ出した。
「きれいなのがあったわねー。私も降りれば良かった、どこか回り込めそうなとこないかしら」
「そう言うだろうと思ってさ」
健太が大っぴらにニヤ付いている。
「ほらこれ、爽子の持って来たから。絶対いいのが入ってるよ」
「本当、健太君よく気が付くじゃない」
爽子が直ぐ金鎚を取り出し、先ず全体を見て、縦にして地面に置いた。叩くとカーンといい音がして二つに割れた。きれいな木の葉の模様が現れた。葉脈もくっきり入っている。
「感激…いいのが入っていた。健太君ありがとう」
「じゃあ俺、この蜆のあげるよ」
正雄は最初からそのつもりだった。
「正雄君もありがとう」
　鳥の声も虫の声も遠くへ行き、強くなった風が街の音を時折運んで来ている。
「お兄ちゃん、僕も化石欲しい」

孝が爽子と正雄の間に首を突っ込んできた。
健太も正雄も爽子と二人っ切りになりたいとは思っていなかったが、孝は余計だった。長い夢も覚めてみれば瞬間の事であり、こんな短い夢も又長い夢のようでもある。
「そうね、孝君も欲しいわよね、正雄君」
「しょうが無いな」
正雄が孝の頭を一つ小突いた。それを合図に孝が一つ取り、素早く自分の袋に入れた。
「さあ、帰りましょうか。収穫もあったし」
「健ちゃんがさ、タメイケドンを思い付いた溜め池へ寄って行かないか」
正雄は短い夢の世界の入口が又どこかに開いていないかという気持ちだった。
「そうね、ちょっと遠回りするだけだもの、行ってみましょうか」
　歩きながら正雄が本家のじいちゃんに聞いた俳句の話や、爽子の机にあった文学全集に付いて聞いたりもしている。
「東京、どうだった」
「大して面白くも無かったわ。前は結構楽しかったんだけど、今年は駄目、何だか全然だったなあ」
「へー、ディズニーランド行った事あるか？」
「あるけど、あんな所、行きたがるのは子供かアメリカ人だけよ」
やっぱり爽子は変わっていると思いながら、正雄は行ってみたいという言葉を呑み込んでしまった。
　もとの場所に戻ると、健太がさっと正雄の自転車を爽子の前へ持って来た。
「帰りはどうしようかしら」
爽子が川の方に向けていた顔を二人の方へ回しながら、少し考えている風だ。
「じゃあ、その自転車かして」
爽子が正雄の自転車を健太から取った。健太が次ぎの自分の動きを決めかね、まご付いている。
「それで、正雄君は孝君の自転車、孝君は健太君の自転車に乗せて貰う。うん、いいじゃない、これがベストの配分よ」
正雄がこらえ切れ無い笑いをニヤ付かせて孝の自転車を取った。健太を見ると一気に地獄に落ちながら、自分の落ちた場所が分からない奴の顔をしている。孝がもう健太のサイクリング車の脇に立っている。
「健ちゃん、人生、人生ってさ、こんなもんなんだよな」
「なに変な事言ってるのよ、行くわよ」
正雄が慌てて孝の自転車のサドルを一番上の更に上ギリギリの位置まで上げた。少し低いがなんとか乗れそうだ。
　健太は正雄より少し長い夢を見ていただけだったようだ。覚めてみれば変わらない夢。
「健ちゃん、早くしないと置いてかれちゃうよ」
「ようし、行くか。孝乗れ、しっかり掴まっていろよ」

爽子よりはるかに軽い孝なら、先に乗っていようが後だろうがどうという事も無い。荒っぽく自転車に跨り、グイグイこぎ出した。
　あっと言う間に二人に追い付く。
「遅いぞ、遅いぞ。ちんたらやってんじゃないよ」
リン、リンとベルを鳴らして追い越して行く。
「やってんじゃないよ」
孝も追い越しざまに生意気を言って行く。
「おのれ、こしゃくな」
爽子もスピードを上げた。正雄も上げたが、子供用の自転車で分が悪い。下り坂になり更にスピードが上がる。汗と風が目に入り、目がショボ付いてくる。子供用の自転車の限界のスピードだった。バラバラになるんじゃないかと思うほど前輪が揺れている。
「一番」
孝が大声で叫んだ。
「二番」
直ぐに爽子が続いた。後を見るとだいぶ遅れて必死の正雄がやって来た。
「正雄君、それ怖くなかった？グラグラ揺れてたわよ」
「怖かったさ。死ぬかと思った。やっぱり子供用の自転車は子供が乗れ」
「嫌だ、健ちゃんのサイクリング車がいい。お兄ちゃんだって子供じゃないか」
爽子がケラケラと笑っている。
「おーい、あの時の足跡がまだあるぞ」
今年は雨が少なく、足跡が水から出て干からびて割れていた。
「あら本当だわ、こういうのが化石になるのよね。何万年も何百万年もたつと」
三人がタメイケドンの足跡を見ているような感傷に浸っている。
「爽子さ、タメイケドンが足跡の6、7倍だって事、どうして分かったんだ？」
「あ、それ。別に大した事じゃ無いんだけど。じゃあ、種明しをしましょうか」
爽子が悪戯っぽく笑っている。その笑い顔が可愛くて、正雄の顔が赤くなってしまった。
「じゃあ正雄君、そこに寝てみてよ」
「こうか」
「何が始まったんだ」
「タメイケドンがなんで足跡の6、7倍かって言うから」
正雄が仰向けになって緊張している。気懸かりなのは爽子より健太の方だった。何をするか分からない。案の定、何かを探して辺りをキョロキョロとしている。
「健ちゃん、何もするなよ。反則だぞ」
「いい」
ハッと、二人とも緊張して爽子に注目した。爽子が正雄の足元に立っている。
「一、二、三」
爽子が爪先に腫を付け、又爪先に腫を付けと交互に繰り返しながら歩き始めた。

「四、五、六、七、ほら大体6、7倍でしょう」
爽子の足が正雄の目の上にある。ずっと上まで見て行き、不覚にも正雄は目をつぶってしまった。健太も呆気に取られてしまい、身動きできずにいる。
　孝も爽子のまねをして同じように歩き始めた。
「九、十、僕十個」
「あら孝君の方が足小さいわね、ま、当り前か」
爽子はまるで屈託が無い。
「一、二、三、四、」
「何、馬鹿やってるんだよ」
健太も真似し出したので正雄がゆっくり起き上がった。（見えた？）健太が目で言いながら正雄をこずいた。目をつぶらなくても、夏の空の雲の眩しさになれた目には、ただの暗がりにしか見えなかっただろう。
「何も」
健太はなぜだかホッとしてしまった。正雄が見た物は逆光に照らされた爽子の足の毛だった。目をつぶると複雑に絡み合った金色のうぶ毛が、皆既日食のコロナのように浮かび上がってくる。
「溜め池はあと二つあるのよね」
孝とふざけ合っていた爽子が二人の方に向き直っていた。
「うん、でもあとの二つは近くに聞けるような農家なんか無かったよな」
「うん」
正雄が爽子の足を見ながら生返事をした、うぶ毛はもう光っていなかった。
「横道を入ったへんにお寺があったでしょう。あのお寺で聞いてみてもいいんじゃない」
「そうだよ、お寺でも何か分かるかも知れないな」
健太と正雄が相槌を打つ。
　夏休みも残りが少なくなってきている。二人とも爽子と、もっとしっかりとした仲間になって置きたかった。
「善は急げ、明日午後にしようか」
「そうね、じゃあ１時ごろ家に寄ってよ」
「お姉ちゃん、僕も行きたい」
孝が爽子の服を引っぱっている。
「いいわよ」
「だめだめ」
正雄が間髪を入れずに割って入った。
「お姉ちゃん」
「いいわよ。いいじゃない、バイパスに出ないんだし、あのへんまでは車も少ないし、正雄君、健太君もいいでしょう」
二人とも沈黙している。
「お姉ちゃん、お兄ちゃんにさ、置いてけぼりにしないで、ちゃんと連れて来いって言ってよ」

「そうね、今日の事もあるし」
爽子が正雄を見た。正雄が頭を掻いている。
「正雄君、孝君をちゃんと連れて来るのよ」
「仕方ないなあ」
正雄が孝の頭を一つこずく。
「帰りはやっぱりおまえが子供自転車に乗れ。トレーニングだ」
正雄がサドルを元のように下げた。クスッと爽子が笑っている。
「いいなあ、兄弟って。私一人っ子だから。お母さん、弱くて一人しか産め無かったんだって」
「兄弟、冗談でしょ」
久し振りに二人がハモった。爽子の笑い顔の中に暗い部分が見え、二人とも頭も手も振り、オーバーな動作になっている。
「兄弟なんか、なあ正ちゃん、うるさいばっかだよな。うちの姉ちゃんなんか最悪、ま、たまになんか買ってくれるけど」
「馬鹿ね、それがいいのよ」
爽子の明るい笑い顔を見ていた正雄の頭に、不意に雁金の句が浮かんできていた。
　帰りは細い田んぼ道を走った。これを下ると直ぐ正雄の家の横に出る。風は静かになっていたが、時折色付いた稲を所々で撫でている。そろそろ秋も近いのか雲に赤味が差していた。

「爽子さん。この化石どこで見つけたの」
「いいでしょう、屏岩の近くよ」
「健太君達に教えて貰ったんでしょう」
「それがそうじゃ無いのよ。二人とも全然見当はずれな所で採っているんだもの」
「はいキュウリ」
あの時以来、爽子はキュウリが大好物になっていた。
「ありがとう。でもあのおじいさんの所のとはだいぶ違うのよね」
「今日のは違うわよ。私もキュウリの味が前と違うと思って八百屋さんに聞いてみたのよ」
爽子がキュウリを一口噛った。
「本当だわ。音も味もあの時とおんなじ」
「でしょう。キュウリの種類が2、3年前とは違うんですって、ほらこれ、イボイボでザラザラでしょう。今のキュウリはツルツルでシナシナなのよ」
「へー、なんでかしら。こっちの方がずっと美味しいのに」
「その方が売れるんですって。私も不覚だったわ」
「どうして」
「冬にもキュウリがあるでしょう。だから味が変でも冬のキュウリだからと勝手に納得してしまっていたのよね、それで馴らされたのよ、きっと」
「それで、このキュウリはどうしたの」
「これ、八百屋さんが自分の家で作ったのを分けてくれたのよ」
「へー、良かったじゃない。これよこれ、このみずみずしさが味噌に合うのよ」
ポリポリ、シャリシャリ、キュウリの音が軽快に続く。
「あのおじいさんと、正雄君ちの本家のおじいさんと知り合いなんだって。なんか俳句仲間みたいよ」
「私もあの俳句好きだな。雁金や一羽真中の湖青し」
「あの一羽って病気で取り残された雁みたいよ」
「へー、そうなの。だから物悲しく感じるのかしら」
「それが健太君たらさ、(針金に一つ最中の餡うまし）だって」
キュウリを吹き出すやら何やらで、二人はテーブルが引っ繰り返りそうなほど笑い転げた。
　部屋に戻って、爽子が採って来た化石を机に置き、フズリナの化石もそこに並べた。凸凹した化石は何百万年も経て、不思議な生命力に溢れている。
ずっと馴染めなかったこの街にもこの夏休みに好きな物がたくさんできてしまっていた。やっとこの街が自分の故郷になる、そんな感じもしていたのだった

　パンクは30分ほどで直った。遠くの台風が運ぶ湿った南風で、朝からムシムシしている。自転車を押してかいた汗が帰りは自転車の上でベト付き、首の中から粘ってくるような感じがする。爽子は途中の工事現場で、落ちていた大きな釘を2、3本拾って帰った。
「パンクもう直ったの。あら、すごい汗、顔、洗いなさいよ」
「パンクは簡単に直ったんだけれど、蒸し暑くて大汗かいちゃった」
爽子が直ぐに洗面所へ行き、顔を洗い、タオルで首も拭った。人心地付けてからガレージへ行き、拾った釘を床のコンクートにこすり付けた。先端のバリを取り、道具箱から小さめの金鎚を取り出した。
　二階へ上がると、机に雑巾を広げ、蜆の化石を乗せ、釘で蜆の周りを丹念に慎重に叩いていく。埋まっている部分をまだ少し掘り出せると、昨夜、父親が教えてくれたのだった。蜆を傷付け無いように少しずつ、少しずつ作業を進める。時々たまった粉を口でフッと吹き飛ばす。
「爽子さん、健太君と正雄君が来たわよ」
昼ご飯の後も爽子は直ぐに作業に取り掛かっていた。
「正雄君、自転車どうもありがとう。でも二人乗りは気を付けてね」
「はい、気を付けます」
爽子の母親がニッコリと笑い、正雄が頭を掻いている。
「この子が孝君ね、こんにちは」
「こんにちは」
孝は余り暑さを感じていないらしく、いつものように元気がいい。昨日の帰り、健太は自分が爽子を乗せて家まで送れると思っていたのに、爽子がそのまま正雄の自転車に乗って帰ってしまった。健太としては残念なしめくくりになってしまっていた。
「ほらこれ見て」
爽子がパタパタと降りてきた。
「まあ、きれいに出たわね」
蜆の周りの石がほぼ取り除かれ、蜆がくっきりと石の上に乗っかっていた。
「どうしたんだ、これ」
「回りを釘で突っついて出したのよ。いいでしょ、お父さんに教えて貰ったの」
爽子が少し得意になっている。
「俺も帰ったらやってみよう」
それは正雄に渡り、孝に渡り、最後に母親に渡った。
「じゃあ、行ってきます」
「気を付けてね」
　爽子、健太、孝、正雄の順で走って行く。途中の電線に鳩がズラリと並んでいる。鳩は曇天が好きなのかも知れない。羽を広げたりして毛繕いをしている。
　横道に入ると直ぐに寺があった。どっしりとした山門の両側が生垣になって続いている。本堂の脇には鐘突き堂もある。健太が階段を上がり、本堂を覗き込んだ。
「誰もいないなあ」

三人が辺りを見回し、庫裏の方へと歩く。
「きっと普段はこっちの方にいるのよ」
「ごめんください」
庫裏の前で声を掛けたが返事が無い。正雄が引き戸を開けた。チリリリリリーンと戸に付いたベルが鳴り、三人ともギョッとして思わず顔を見合わせた。
「ごめんくださーい」
爽子が声を大きくした。
「はい、どなたでしょうか」
紗の着物を着た和尚が出て来た。意外と若い。(こりゃあ少し若過ぎる）爽子が少しがっかりしている。
「あのう、昔この辺りに溜め池が無かったでしょうか？」
爽子がめずらしく詰まっていたので正雄が聞く。
「溜め池？そんな事を聞いてどうする」
正雄が例の説明を繰り返した。
「自由研究か、それは大変だ。ここじゃ暑い、本堂の方へいらっしゃい」
　三人がぞろぞろと和尚の後に付いて行く。孝は和尚の前を走って、もう本堂の階段を上がっている。和尚の後を付いて階段を上がり、脱ぎ散らかした孝の靴を正雄が揃えた。本堂の中は冷んやりとした冷気に満ち、汗が直ぐに冷たくなってくる。
　どこもかしこも黒光りしていた。珍しさで周りを見ると、その黒の中に金文字で書かれた札が高い天井近くの煤けた壁のあちこちに掛かっていた。太い柱も黒光りしていて、そこにも札が掛かっている。奥の柱に囲まれた中に二段高く、何やら由緒ありげな木の仏像が煤けた感じで光りもせずに立っていた。仏様は煤けていたが、その周りには金ぴかの燭台が林立していた。
　和尚が仏様の前まで行き、三人をそこに座らせた。孝も一応座る。みんな座ると和尚が奥の一段目に上がり、お燈明を灯し、線香を上げ、仏様の前に座るとおもむろに読経を始めた。
　三人はえらい事になったと思いながらも、そのまま神妙に座っている。5分もしないうちに孝が本堂の中を駈け回り始めた。和尚はお構い無しに読経を続けている。三人も訳の分からないお経に退屈し、足もしびれてモジモジと落ち着かなくなっている。札の金文字に金十万円とか金五十万円とか書いてあるのを見て、健太がその足算を始めた。時折指で数えるので、爽子も正雄も直ぐに気が付き、同じように足算を始め出した。
　三千万を越えた頃、やっとお経が終わった。
「おまたせ、おまたせ。溜め池だったね」
やけに調子良く和尚がこっちに降りてきて、庫裏の側に座った。
「それで昔の溜め池を調べて、どんな研究にするつもりだね」
これは全く予想もしていない質問だった。どう応えたらいいのかと三人の頭がグルグル空回りしている。
「溜め池と民話みたいな事を探しているんです」
辛うじて爽子が答える。

「それはなかなか面白そうだ。何かいい話があったかな」
「ええ、川向うに雁落しという溜め池が前あって、雁の民話とつながっていました」
「それはいい事を調べた。他にも何かあったかな」
「それだけなんですけど。この辺りに溜め池がありましたか」
今度は和尚が黙ってしまった。そこへ本堂の中を走り回っていた孝が滑り込んで来る。
「おじさん、溜め池はさ、恐竜の足跡なんだよ、タメイケドンていうんだ。ね、お兄ちゃん」
一瞬その場が静まり返った。
「うーむ、なるほど。それは面白い考えだ」
和尚は暗くて、しかも煤けて黒い天井を見上げたまま動きを止めている。何か言わねばと三人は思っていたが、笑いもせずに納得している和尚にとまどっていた。和尚が立ち上がり、また仏壇の前に座り、線香をつけ、短いお経を上げた。ニッコリして戻ってくると、タメイケドンの事に付いて聞き始めた。
「なるほど、なるほど。溜め池がそんな風に続いているのかね、しかし1500メートルの恐竜とは気宇壮大だなあ。圧巻だ、空前絶後、弥勒到来」
「ところでこの辺りに溜め池はあったんですか」
話しが先に進まず、三人はいい加減じれてきている。
「おお、そうだった、そうだった。溜め池はな…」
ここで和尚がいらぬ間を取り、三人の顔を確かめるように順々に見ていく。
「残念だが無かった。いや正確にはこの辺りに溜め池があったという話しを聞いた事が無い」
がっかりした三人だったが、まだ、かぼそい望みもありそうな話しぶりに黙って聞いている。
「もっとも私はこの寺の先代に子が無かったので、養子になってこの寺をついだんだが…、直ぐに先代も亡くなってしまい、良く知らんのだ。壇家の年寄りからも溜め池の話しを聞いた事が無いな」
結局がっかりする事になってしまった。さんざん待たされ、お経も聞かされ、供養料の計算までして、あげくの果てがこの結果、三人にドッと疲労感が押し寄せてくる。もうこんな薄暗くて線香臭い所から、蒸し暑くても明るい外に出たくなっていた。三人の落胆ぶりを見て、この和尚がまたニッコリと笑い、三人が腰を浮かせかけるのをまあまあと押しとどめた。
「溜め池は無いが恐竜ならあるぞ」
三人は耳を疑った。お互いの顔を見合った。和尚を見ると、大きくニッコリと笑っている。坊主頭でしかも髭の無くなったアインシュタインに似ていた。
「今、恐竜があるって言いましたか」
健太が聞き間違えかも知れないと、自信無げに聞き返す。
「言ったぞ、確かに言った。ここの御本尊様は阿弥陀様だが」
と言って後ろを向いて手を合わす。
「実はな、この下、この本堂の下に恐竜の足跡の化石が埋まっている。まっ、そのタメイケドンでは無いがな」
俄かにはとても信じられない話だった。

「本当ですか。今までにこの街でそんな話、聞いた事も無いんですけど」
正雄が半信半疑で聞き返す。爽子も不信げな様子を見せている。健太は半分本気にしているみたいで、孝は信じても疑ってもいない。
「じゃあ、じゃあさ、おじさん、その恐竜見せてよ。この下にいるんでしょお」
三人で頷き合い、無言の圧力を和尚に掛けている。
「それがなあ、土の中に埋まっているんで見せたくても見せられ無い。まあ、それほど深くは無いとは思うがな」
三人の目がいんちきいんちきと唱和している。半分は信じている健太の目も参加していた。
「君達は仏足石というのを知っているかな。仏様の有難い足跡なんだが、それと同じように考えれば竜足石というところかな」
やっぱり信じられない、なんか嘘っぽい。爽子が和尚をジッと見て聞いた。
「仏足石は分かりますよ。仏様の足跡なんだから。でも恐竜の足跡がどうしてありがたいんですか。見せ物ならまだしも、お寺なんて全然結び付かないわ」
正雄が爽子を見て頷いた。
「うーむ、良い所に気が付いた。実はな、仏様は色んな物に化身する事ができるんだ。そうして、その化身した物を通して我々人間を助けたり、警告を与えたりもしているんだよ。昔の人が下の竜足石を見て仏様の化身した跡だと思ったんだろうね」
健太はそれを聞き、それはそれで又頷いている。しかし爽子の不信はまだ拭われてはいない。
「どれ、竜足石その物は見せる事ができないが、竜足石に付いて書かれた物が残っているから、それをお見せしよう。どこにしまったか、少し探さないとならないから若干暇が掛かるが、いいかな」
返事も聞かずに和尚がそそくさと立ち上がり、庫裏の方へ消えた。

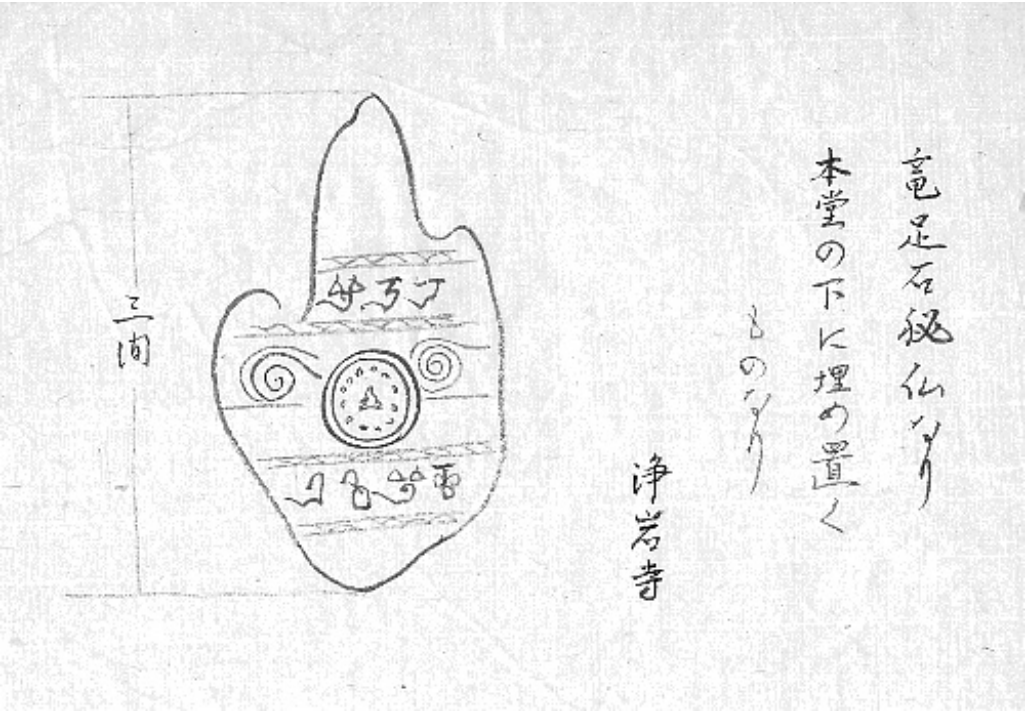
　「正雄君、どう思う。今の話」
「良く分からないけど。本当だったら凄いよね」
「俺は本当だと思うな。竜足石なんて何だかありそうじゃない。爽子はどう思っているんだ」
「私は嘘っぽいと思うわ。大体、仏足石だって本当は仏様の付けた足跡じゃ無いんでしょう、だから仮によ、仮に竜足石があったとしてもよ、本当は恐竜の付けた物じゃ無いのよ」
涼しい本堂に居るのに話に熱が入り、三人はうっすらと汗をかき始めていた。孝は本堂の中を走り回り過ぎ、今は須弥壇の横の隅で寝てしまっていた。
「さっき仏様の化身だとか言ってたけど、仏様の生れたのは確か、二千年くらい前の事だろう。恐竜がいたの、一億年も前の人間のいない時代だぜ」
「そうよ、正雄君いいとこ突くじゃない。そんな人間のいない所で誰を助けるのよ。誰に警告をするのよ、やっぱり変よ」
「でもさ化身だぜ、化身。もともと普通じゃ無いんだから、タイムマシンみたいな感じでさ、一億年前に行って、恐竜さん、恐竜さん、このままだとあなた達は絶滅してしまいますよ、なんて恐竜になって、恐竜語でガオーとか、グオーとかやっていたのかも知れないしさ」

「そこへ行っちゃう、そこへ行ったら健ちゃんにかなう奴なんか誰もいないよ」
　知らないうちに三人とも本堂の床に寝そべって、話を弾ませていた。木の床が冷んやりと気持ちが良く、横になったり、仰向いたり、腹ばったり、焼き魚を引っ繰り返すように時々天地を返している。
　トントントンと床を踏む音がしてやっと和尚が戻って来た。
「どうかな、話は弾んでいたかな」
慌てて三人が起きて座り直した。
「麦茶でもどうかな。小さいのはどうした」
「あ、すいません。あそこです」
正雄が慌てて立って、孝を起こして来ようとするのを和尚が押しとどめた。
「まあいい。まあいい。菓子も遠慮せんで食べなさい」
「いただきまーす」
麦茶は冷た過ぎず、ゴクゴクと喉を潤おす。出されたカリントウを食べると麦茶の焦げ臭さと良くあった。三人はお茶とお菓子で人心地付けながらも、和尚の持って来た茶色っぽい紙が気になっている。
「さてと、さんざん探してやーと見付けたよ。さあ、見てごらん」
お盆を少し脇にずらせ、和尚がその怪しげな紙を広げた。それを見て三人が息を飲んだ。三つ指の、本当に恐竜の足跡ような形をしている。
「竜足石秘仏なり本堂の下に埋め置くものなり、浄岩寺、とこう書いてある。どうかな」
「この字みたいな、模様みたいな物はなんですか」
「それは私にも良くは分からないが、あるいはサンスクリット文字、古代インド文字、かも知れん。丸いのは世界を表している、いわゆるマンダラかも知れんな。定かには分からんがな。いずれにしてもそれは後から墨で書いたか、彫り付けたものだろう」
健太にはそれがまるで縄文土器の模様のように見えた。
「大きさはどの位ですか」
「それはそこに三間と書いてあるだろう。5メートル40センチくらいだ」
三人が又押し黙った。
「手に取ってみてもいいですか」
「いいとも、遠慮しないで充分見なさい」
爽子が持ち、二人が周りから覗き込む。
「そこに浄岩寺と書いてあるだろう。この寺は今は浄願寺と願うという字になっているが、昔はそこに書いてあるように岩という字で浄岩寺だったようだな。やはりその竜足石に由来するものなのだろうな」
健太も正雄もそれぞれ順番に手に持ち、振ったり透かしたり、しげしげと検分する。
「それでその竜足石は本堂のどの辺りに埋まっているんですか」
健太がマジになって聞いている。
「ちょうどその仏様の下、須弥壇の下になる筈だな」

健太が須弥壇の下をまるで透視するかのようにジーッと見つめている。
「それでさっきも三人で話していたんですが、二千年前に生れた仏様がどうして一億年前の恐竜の時代にいるんですか？」
「ほー、そういう事に気が付いたか。お釈迦様は二千百年くらい前頃に生れ、35才の時に正覚、つまり悟りを開かれたんだが、その前からズーッと生まれ変わり、生まれ変わりして、ズッと修業されていたんだ。それこそ恐竜の時代にも恐竜だけで無く、ネズミにも、魚にも死んでは生れ、死んでは生れして修業をして来られたんだ。それが二千百年くらい前、インドでシャカ族の王様の息子ゴータマに生まれ変わった時、その時ももちろん修業は続き、35才の時、菩提樹の木の下で悟りを開かれたのだ。どうだ大した話だろう」
　和尚が三人の反応を確かめるように間を置いた。
「どうしてそんな事が分かったんですか。そのお釈迦様が言ったんですか。言ったとしても、そんな生れる前の、前の、前の…事なんか覚えている訳が無いと思うわ、私」
爽子があくまで疑っている、健太はやっぱり遺伝子の乗物なんだと納得していた。
「お釈迦様はそんな事は言われていない。お釈迦様が言ったのは、そうだな、かいつまんで言えば(在る物は在るし、無い物は無い）と言う事だな」
「なんだ、そんなの当り前だよ」
正雄は未だにどっちに付いていいのか分からないままでいる。
「その当り前の事が分かるのに何億年か、何百億年か掛かってしまったという事だな」
「何百億年て、宇宙が、地球どころか宇宙ができて50億年とかそのくらいでしょう。何百億なんて、そんな話いんちきに決っているわよ」
爽子が段々むきになってきている。
「ところがそれがそうでも無いんだ。在るとか無いとかという事は、別な言い方をすれば全ての事には因果関係が在るという事なんだ。これは又当り前の事で悪いが、そういう事なんだ。因果、分かるかな、始めが在って終りが在って、その終りが又始まりになっていくという事だ」
三人とも黙ったまま、口を挟まないでいる。
「ここにいるこの私も生れる前の何かの結果、ここにこうしているという事になる。それは単に父母、じいちゃん、ばあちゃんという事では無く、それとは別の因果の流れが在るんだよ。それを仏教では又縁起とも言うがな。縁起がいいとか悪いとかと言うあれだ」
和尚が又、間を置くように麦茶を一飲みした。誰も口を挟む者がいない。
「つまり、前に何かが起こっているから、今何かが起きる前にそれが良い、悪いと言っているんだな。つまりそうやってどんどん前に遡って行くと、生き物もまだいない、地球もまだ無い、宇宙もまだ無い、そんな時からすでに縁起が始まっているという事なんだ。どうだ凄いだろう」
爽子が何か訳の分からない事で煙に巻かれたような気がしてムッとしている。(これじゃあ、健太君の大ぼらより、もっとひどいわ）
「あのう、お釈迦様の後、誰か悟りを開いた人いるんですか」
和尚がギョロリと正雄を見た。

「そうよ、何百億年も掛かってやっとお釈迦様も悟れたんだから、その後二千百年の間に、さあ、何人が悟れたのかしら」
勢いを得た爽子の目の前に和尚がパッと片手を広げた。五人かと思ったら、指を一本ずつ折り始めた。1、2、3、4、5、5本折った。やっぱり五人だ。
「0だな。一人もいないだろう。ま、私の知る限りの話だが。五人と思ったか？それが因果というものだ。始まりはどこにでも在るし、終りも又どこにでも在る、まあ、私達も南無阿弥陀仏と念仏を唱えれば弥陀の浄土に往生できる事になっているが、それと悟りとは違うものだ。…難しいかな。例えば、君が数学の問題を一生懸命考えて解いたとする、そしてこっちの君はその解き方を教えて貰って答えを出したとする、そうすると答えに付く丸は同じでも内容が違うだろう。そんな所だ」
「じゃあ結局、誰もいないという事ですか」
「まあ、そうだな。お釈迦様の時代に弥勒という人がいてな、お釈迦様の優秀な弟子だったんだが、お釈迦様より先に亡くなってしまったんだ。それでな、この次に正覚を得る人はお釈迦様の導きで、五十六億七千万年後にこの弥勒という人だろうという事だ。今もどこかで生まれ変わって修業している事だろう」
「だってその人もそれじゃあ、お釈迦様に教えて貰っているんでしょう。それなら結局、正覚っての、できないんじゃないの」
「そうだなあ、しかし数学でも式から答えまで全部教えて貰うのと、チョッピリヒントだけ教わるのとでは随分違うだろう。私は期待しているんだけどな」
妙にしみじみしている和尚に、爽子がまだ疑いの眼差しを向けながら、次ぎの言葉を探している。
「あのう、さっきの因果の流れの事ですけど」
「おー、何かあるかな」
正雄が壁の札から目を戻して口を挟んだ。
「お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんというつながりと違うって言っていましたけど、それなら何でお墓参りしたり、後、法事だとかするんですか？」
「そうよ、そうよ。さっきだってあれ、三千万まで数えちゃったんだから」
爽子は理屈ではまるで歯が立たなくなり、理屈をどこかに追いやってしまっている。
「こりゃあ参った。痛い所を突かれてしまったなあ」
爽子がしてやったかと、正雄に親指を上げて合図した。
　少し余裕ができた爽子は急に喉が乾いていたのを思い出し、麦茶を一飲みした。生温かったけれど、勝った気分で飲めばそれでも美味しかった。カリントウも一つ、と見ると何も残っていない。
「健太君、一人でみんな食べちゃったでしょう」
「え、正ちゃんも食べてたよ、な」
「お菓子が少なかったかも知れんな、よし、もう少し何か持って来よう」
和尚がどっこらしょと立ち上がり、裸足の足でペタペタと又庫裏に消えた。

「もう少しここにいて唸っていればいいのに。ね、正雄君」
爽子が勝ち誇って和尚の後ろ姿を見送っている。
「なんかお菓子持って来て、これで勘弁してくださいとかね」
爽子と正雄が小さな声で笑い出した。
　その横で健太がブスッとして絵図面を取って見ている。




「健太君、それだってなんだか怪しいわよ、紙だって、古そうだけどなんかツルツルして、パリパリした感じで。ちょっと貸してよ」
爽子が受け取った絵図に鼻を近付け、匂いをかぎだした。
「なんか臭うか」
「うーん、何と無く墨の匂いがするみたい」
「当り前だろう。墨なんだから」
「馬鹿ねえ、何百年も前の墨の匂いがする訳が無いじゃない」
「そうか」
今度は健太が匂いをかぎだした。
「俺、何も臭わないけどなあ。正ちゃん、かいでみろよ」
「それ健ちゃんの鼻汁、付いて無いだろうな」
と言いながら正雄も鼻をくっ付けて匂いをかいでみている。
「俺も別に墨の匂いなんかしないけどなあ」
「あなた達って、鈍感。カリント食べ過ぎて鼻が馬鹿になっているんじゃないの」
「カリントとは関係無いさ」
そんな事を言い合っている所へ和尚の足音がペタペタと戻ってきた。
「おまたせ、おまたせ」
和尚がニコニコと又お盆を持って来た。今度は熱いお茶と落雁が乗っかっている。
「さあさあ、遠慮しないで。これは君達が調べた雁落しと同じで、落ちる雁と書くんだよ。なんでだか知っているかな」
健太と正雄が無造作に取った落雁を口に運びそこねて、シゲシゲと眺め回している。
「これは白菊の花を型取っているが、生地に黒胡麻を混ぜて作ると、ちょうど群れで降りて来る落雁に似ているんだよ。それで落雁という名前があるようだね」

(このおじさん、やっぱり答えられなくて誤魔化そうとしてる）爽子が話しを元に戻さない和尚を疑い探げな目で眺めている。
「さてさて、さっきは痛い所を突かれてしまった」
和尚が質問した正雄では無く、爽子を見て話を始めた。
「それは君達の言う通りなんだよ。しかし全く先祖と無関係という訳でも無いんだから、生きとる者の気持ち次第という事だな」
「それって、結局どうでもいいって事ですか」
「どうでもいいと言うか、なにしろご先祖様を敬う、祖霊崇拝というんだが、ゴータマが生れる前から世界中にあった信仰だからな、人間の感情の深い所につながっているんだろう」
和尚が少し間を開け、一人頷きながら続けた。
「仏の教えが時代と共に広がって行く中で、色々な事が仏教の中にも入ってきて、その国、その時代の仏教になっていくんだろうな。それもまた縁起という訳だ。こんな所で許して貰うかな」
「おじさん、向うで言い訳を考えていたんでしょう」
又誤魔化されたような気もしていたが、和尚の歯切れも悪かったし、引分けという事にしておくかと、爽子がニヤリと笑った。和尚もニンマリしている。
「そっちの君は余り喋らなかったが、面白く無かったかな」
「僕ですか？」
突然話を向けられて健太が持っていた絵図を床に置いた。健太はその絵図を見るとも無しに、ずっと手に取ったり床に置いたりしていた。
「いえ、そんな事はありません。しかし僕は一億か二億年前の恐竜に興味があるんで、五十億だ、百億だなんて事は何だかさっぱりです。しかも五十億年後に悟る人の事なんて言われても、その時には地球も無くなっているかも知れないし、その縁起ってやつだけがあるのかも知れないなんて思ったりして…」
「ほう…、君はなかなかの哲学者か、宗教家になるかも知れんぞ」
和尚の軽やかな笑い声が本堂の中に響いた。
　木彫りの仏様も揺れているような気がして正雄が須弥壇の方を見た。
「そろそろ帰らんか」
「…」
「孝、孝、起きろ」
正雄が立ち上がり、須弥壇の横で寝ている孝を起して連れてきた。寝ぼけながら、孝が温くなってグッショリ濡れたコップを持ち、麦茶を飲み干し、訳も分からずに落雁を二つ両手に持っている。健太も爽子も湯呑みをお盆に帰して立ち上がった。帰り際にお札の下がった黒い柱を見ると、孝が登ったらしく手の跡がペタペタと付いていた。
「又遊びにいらっしゃい」
「どうもありがとうございました」
三人の声が揃った。挨拶の語尾の消えないうちに外に出た健太が潜り込まんばかりにして、縁の下を覗き込んでいる

「健ちゃん、なんか見えるか」
「ううん、暗くて何も見えない」
お愛想に正雄も屈み込んだ。
「何してるの、置いて行くわよ」
「健ちゃん、行くぞ」
健太が尚も未練がましく覗き込んでいた。

　本堂では和尚が絵図を見て一人ニヤニヤしている。
「あなた、アイロンどうした」
「ああ、書院にある」
　書院には竜足石の絵図が散らばっていた。毛辺（中国の書道半紙）の茶色の加減と薄さが古文書の古さにピッタリだった、ドライヤーで墨を乾かしグシャグシャと丸めた物を広げてアイロンを掛けたのだつた。
「あなた、あの子達にしようも無い事言っていたんでしょう」
お盆を下げてきた和尚がまだニヤ付いている。
「その絵図なかなかの物だろう、一つ軸にでもしてみるか」
和尚が又絵図を広げ、テーブルに置いて遠くから眺めたりしている。
「何、馬鹿な事言っているのよ。昨日のお酒がまだ残っているのかしら」

　三人は自転車を押してしばらく話しながら帰った。やはり爽子はこの話を信じていなかった。健太は寡黙になって、一番最後に付いている。(健ちゃん、又なんか考えているな）正雄が健太の気配を後ろに感じながら半分気にしている。
「だってあのおじさん、アインシュタインに、なんか似てない。いたずらも好きなんじゃないの、今ごろ舌なんか出してるわよ」
正雄と爽子が自転車を押しながら笑っている。健太の笑い声がしていなかった。むっつりとした後ろの気配に、正雄はますます不気味なものを感じていた。
　電線の鳩がカラスに替わっていた。
「あの絵のインド文字って言うの、なんだか縄文土器の模様に似ていたな」
健太がポツリともらした。
　その夜、健太が正雄に電話を掛けてきた。
「正ちゃん、俺行くぞ」
「行くってどこへ行くんだ」
「決ってるだろう。あのお寺の本堂の下だよ」
「…」
「竜足石、見に行く」
正雄の耳の奥で健太の声が谺している。普通の谺と違い、言葉がバラバラに切れて谺している。
「正ちゃんも行くよな」

まだ前の谺が消えないうちに、行くよな、行くよな、行くよな、と重なり合って聞こえてくる。
「あれ土の中に埋まっているんだよ。どうするんだよ」
「シャベル持って行って掘るさ」
「掘るって言ったって、バレたらどうするんだよ」
「だから、みんな寝静まった夜にやるんだよ」
夜、夜、夜…又正雄の頭に谺が響いた。
夜、お寺、床下、真っ暗、正雄の足がガクガクしてきた。受話器を持ったまま黙り込んだ。健太も黙っている。
「正雄、どうしたの、電話終わったの」
「健ちゃん、この話、又明日やろう、朝そっちへ行くから」
「うん、じゃあ明日待ってるよ。もし、もしだよ正ちゃん、正ちゃんが行かないって言っても、俺一人でもやるからな」
「分かった、じゃあ明日」
とんでも無い事になってしまった。夜行くって言っても家の者をどうやってごまかすんだ。
　その夜、正雄はなかなか寝付けなかった。蒸し暑さがいつの間にか無くなっていた。時々外を妙な鳴き声を立てて鳥が飛んで行く。家の周り中から虫の声がし、声の強さが行ったり来たり、替わり合っている。遠くに弱々しく蛙の声も聞こえていた。

　朝食を済ませ、何か言いたげな母親に掴まらないように、正雄は直ぐに家を出た。健太の家まではいつもより心なしか遠く感じた。というより、ことさらゆっくりと自転車をこいでいた。
「あら正雄ちゃん、早いわね、健太、健太、正雄ちゃんよ」
「ガレージの方へ来てって」
大声に促され、正雄がガレージに回ると、健太が道具箱やら何やらを引っ繰り返している。
「あった、あった」
携帯用の折り畳みのシャベルを持って健太が得意になっている。
「うちにそんなの無いよ」
健太の小さいシャベルを見ながら正雄が幾分ほっとしている。
「小さいのでいいさ、花植える時なんかに使うやつあるだろう」
そんなんで一体どれだけ掘るつもりなのか、やっぱり少し掘って、在るか無いか分かればいいくらいの事なのか、と正雄に安堵感が広がってきた。
「何時ごろ行こうか」
健太は正雄も行くと決めている。
「みんな寝静まった頃といったら明け方が一番だろう。でも坊さんって朝早く、暗いうちからお経上げるかも知れないから、4時。3時じゃあ早いだろう」
昨夜、電話があった後どうしたらいいかと正雄は色々考えていた。
「どうせ眠れないんだし、寝たら起きれないかも知れないから、3時にしよう」
「そうだな、早い方がいいかも知れないな」
「家の者、どうやって誤魔化そうか」
健太は何も考えていない様子だった。大体これがいつものパターンで、細々とした作戦を立てるのは正雄の役の場合が多かった。
「バードウォッチングという事にしよう」
「鳥、夜飛ぶのか」
「鳥って、明けがた寝ぐらから皆いっせいに餌を取りに行くんだよ。それに夜行性のもいるから朝早く、暗いうちに行くのもいいものなのさ」
「へー、正ちゃん良く知っているなあ、行った事あるのか」
「無い、なんかの本に書いてあった」
ククククッと二人で笑いあった後には、正雄の気持ちも完全に固まっていた。
「夜行性の鳥か、フクロウとか、ミミズクとか本物、見てみたいよな」
床下に潜り込むより、その方がよっぽ健康的だけど、健太が予定を変える訳がない。次のお楽しみにして置くのもいいと正雄は思った。
「それで行く道なんだけど、少し遠回りになるけど、田んぼ道を行こう」
「そう、そう、俺もその道を行こうと思っていた。田んぼ道を行けば誰にも会わずに済むからな」

「それでいつやる」
「もう今日の夜っていうか明日の朝やろうよ。早い方がいいよ」
「そうだな、そうするか。それなら今日はタップリ昼寝をしておかなくちゃ」
とは言っても、二人とも昼寝などできそうにも無いと思っていた。
「爽子はどうする」
「爽子か、無理じゃないか。でも、言ってみるだけ言ってみよう」
「どうする、電話しようか」
「これから、爽子の家へちょっと行ってみよう」
　二人は自転車を飛ばして爽子の家へ急いだ。急いでやらないとお寺の床下から、竜足石が消えて無くなるような気がして、健太は気がせいていた。
　自転車を止め、息を切らせながら門を開けようとすると、脇からジョーロを持った爽子が出てきた。
「どうしたの、早いわね」
言いながら爽子が残りの水を手早く花壇にかけている。
「竜足石掘りに行くけど、爽子どうする」
「何言ってるの。竜足石って、昨日の絵図のでしょう。そんな物がどこにあるのよ」
「だからさ、あのお寺の下だよ」
「えっ、…、何言ってるのよ。そんな物あのおじさんが掘らせてくれる訳がないじゃない」
「だからさ、夜やるんだよ。もちろん、こっそり掘っちゃうわけ」
「…」
事も無げに言う健太を爽子が唖然として見つめている。健太は自信たっぷりで、全く普段と変るところがない。
「あなたねえ、隣の畑に芋掘りに行く訳じゃないのよ。…、ちょっとあっちへ行きましょう」
「爽子、ジョロ」
歩きかけた爽子が別に忘れたわけじゃないというように、門の脇にジョロを置いた。
　玄関先の立ち話しでする内容じゃない。三人が川の方へ歩き出した。
「健太君、冗談言っているんでしょう」
「冗談のわけないじゃん、正ちゃんだってマジなんだから」
「何言ってんのよ、こんな事言い出すのは健太君に決ってるんだから」
「え、なんで分かった」
「何とぼけてるのよ、いいから馬鹿な事は止めなさい。よその家の床下を勝手に掘っていい訳がないでしょう」
玄関先からそのまま出て来て、帽子を被っていない爽子の目が眩しそうに細くなっている。
「爽子が行くか行かないは別にして、一応計画を説明しておくから」
「やあね、私そんなの聞きたくないわよ」
お構いなしに正雄が勝手に説明している。計画に使う田んぼ道と交差する所で立ち止まった。
「ここだよ、ここに3時にしよう。健ちゃん、ここに3時でいいね」

健太が頷いている。
「ここに3時に来るから。行くなら来てればいいし、居なかったらがっかりしながら二人で行くさ」
爽子は話が終わっても黙ったままだった。
「正雄君、君達は本当に仕様がないわね。誘うなら、はっきり誘いなさいよ」
「え、行くのか」
「馬鹿ね、行かないわよ、行ける訳がないじゃない。でも誘う時ははっきり誘うものなのよ。そうして、私がどうしようかなって悩んで、そして結局断わるのよ。普通そうするものなの」
「へー、そういうもんか」
正雄が頭を掻いている。三人は爽子の家の方へ戻り始めた。周りに家があまり無いので爽子の家も良く見えた。これなら暗くても怖くないだろうと爽子を見たが、爽子が何を考えているのか正雄にはさっぱり分からなかった。
　帰り際に自転車に跨った健太が爽子に言った。
「爽子、懐中電燈がいるぞ。それから、長ズボンと長袖のシャツの方がいいと思う」
「何よ、行かないわよ。全く、バードウオッチングだったら良かったのに」
「じゃあな」

　午前3時の風が冷たく吹いていた。健太も正雄もジーンズを履き、黒い長袖のシャツを着ている。この時間帯ではもう夏も終わろうとしていた。健太が正雄の家に来た時、正雄はすでに外に出て待っていた。二人ともやはり眠らなかったらしい。バックパックにはシャベルと懐中電燈、一応双眼鏡も入れてあった。
　空に月は無い。しかし晴れ渡っていて、暗がりに目が馴れてくると、まばゆいばかりの夏の星空が天空の全域をしめている。田んぼ道に入ると街灯の代りに、星明かりが薄く、でもくっきりとしたサイレント映画のようなトーンで道を照らしている。二人はライトを付けないままで走った。すでに稲刈りの終わった田んぼもあり、そんな田んぼがキラキラ輝く刈り入れ間近の田んぼの中に黒く沈んでいる。雑多な虫の声がサイレント映画の伴奏のようにまわりに溢れ、近付くと止み、通り過ぎた後ろで又始まる。まるで虫の声を自転車で切り裂いて行くようだ。
　約束の場所に爽子は居なかった。二人が自転車を下り、時計を見た。3時5分前だった。
　刈り取るばかりの田んぼの水は抜かれ、小さな蛙の代りに、遠くから牛蛙の声が不気味に低く、地面を這うように聞こえて来る。
　二人は午前0時を回る頃から妙に胸がドキドキしたり、気が付くと呼吸が浅くなっていて、時々大きく息をついたりしていた。出掛ける時などは足もガクガクして、平衡感覚も変になったような気がしていたのが、自転車をこぎ、規則正しく呼吸し、運動したせいで気持ちも身体も普通の感じに戻っていた。ただ夜風が冷たかったからか、寒かった。どちらが誘うでもなく、川の方へ少し歩き、並んで小便を始めた。星明かりで小便がキラキラと光りながら落ちて行く。フーと息を吐きながら空を見上げると、まるで星の中にいるような開放感に満たされた。
「ワッ！」

「ウッ！」
「ワッきったなーい。嫌だ、こっちに向かないでよ」
二人が又あわてて田んぼの方に向く。爽子に脅かされて思わず振り向いてしまった二人は、まだ終わっていなかった小便をお互いに掛け合ってしまった。
「脅かすなよ」
2、3回振っておちんちんをしまった二人が爽子の方へ歩いて来た。びっくりして縮んだおちんちんから少しおしっこが漏れ、二人とも歩き方がギクシャクしている。
「爽子、行くんか」
しかし自転車が無い。
「お見送り？」
正雄が聞いた。
「行っきますよーだ」
「自転車は」
爽子が指差した方を良く見ると、道端に自転車が倒してある。
「何よあなた達、私が隠れている方へ歩いて来るから焦っちゃったじゃない。しかも二人でおしっこまでして。危うく掛けられる所だったわ」
二人がエへへへッと照れ笑いをしている。
　爽子も黒っぽいスラックスに、黒っぽい長袖のブラウスを着て、やはり背中には黒っぽいバックパックがあった。
「冬のオリオンが登ってきてるわ」
爽子が屏岩の方を見上げていた。
「オリオンて？」
「ほら、三つ星が並んでいるでしょ、あれがオリオンの三ツ星。両側に明るく輝いているのがベテルギウスとリゲルよ」
　オリオンは冬のように凍えてはいなかった。冬にはその赤さも底深く固まったようだったベテルギウスもゆらゆらと大きく燃え、青白く刺すようだったリゲルも良く動く内気な少女の瞳のように静かに瞬いていた。
「冬にあんなに寒そうだったのに…、ゆったり三つ並んで、三ツ星があんなに瞬いている」
正雄がバッグをもぞもぞさせ、双眼鏡を取り出した。覗き込むと意外に大きく光りの点が飛び込んでくる。
「おっ、結構迫力ある」
健太も出して覗き込む。
「三つ並んだ真ん中が爽子かな」
「じゃあ俺達はどっちだ？健ちゃんどっちにする」
健太には暗がりの中でも正雄が照れているのが分かった。自分も照れずには答えられないと思いながら爽子の方を見た。
「置いて行くわよ」

爽子が自転車の方へ歩いていた。自分が振り向いた時、爽子も振り向いて歩き出したように健太には思えた。
「あっちがアンドロメダよ」
歩きながら爽子が顔を上に向け、真上近くを指差している。幾ら目を凝らしても二人にはアンドロメダがどれだか分からなかった。
「どれだか分からないな。…けどアンドロメダがこの銀河に一番近い銀河だという事は知ってるんだ」
「双眼鏡なら月を見ると面白いのよ」
「今日は無理だな、月が出ていないから」
「あっ、流れ星」
「どこ、どこ、どこ」
「そんな物覗いていて、見れる訳が無いじゃない」
爽子が又先に立って歩きだし、自分の自転車を起こした。
「さあ、行くわよ」
二人も自転車に乗り、後を追う。爽子と話しているうちに体の冷えがすっかり無くなっていた。

　田んぼ道から出ると、ポツリポツリと街灯が点いている。直ぐに寺が見えた。大きな瓦屋根が黒く沈んでいる。寺の生垣の端で自転車を止め、空き地の方へ引っ張り込む。ちょうど生垣に破れ目があり、三人がそこから中に潜り込んだ。
　寺は庫裏の玄関灯の周りだけボッと明るかったが、他はその明かりの為にますます暗く沈み込んでいる。誰かが起きているような気配も無い。身をかがめ、様子をうかがっていた三人が歩き出すと、敷いてある砂利が大きな音を立てた。ギクリとして動きを止めた三人だったが、健太が抜き足差し足でそろそろと前進を始め、爽子、正雄と続く。
　どこか近くの家で犬が吼えた。それが伝染し、あちこちで吼え出す。健太が抜き足を止め、爪先だってササッと小走になり、本堂の端に取り付いた。二人も続き三人でしゃがみ込んだ。床下を覗くと、暗がりに目が馴れたといっても、真っ暗で何も見えない。
バックパックから懐中電燈を取り出し、暗く沈んだ顔を見合わせ三人で頷きあった。
「行くぞ」
健太が低く呟き、床下に体を滑り込ませる。二人も躊躇無く後に続く。2、3歩腰歩きをして健太がライトを点けた。
　寺の床下は高く、しゃがんでも頭に充分余裕がある。懐中電燈の光りの中に、太い束柱が林立している。健太が片手で顔を払った。
「クモの巣にかかった」
健太の懐中電燈の光りが周りの地面を意味も無くさまよっている。僅かな光りの中に闇がますます深くなり、何かいそうな恐怖で爽子も正雄も自分のライトを点けた。顔のクモの巣を取り終えると木の枝を拾い、クモの巣を払いながら健太が再び前進を始めた。

　太い床梁の隅に足の親指ほどもあるクモが潜んでいる。足を広げると拳くらいはありそうだ。良く見ると枯葉色の体の胸部に白と黒でドクロみたいな模様のある奴もいる。腹は紡錘型にタップリとふくらみ、爽子が今まで見たどんな物よりふくよかに見えた。一体何を食べてこんなにフックラとした腹になったのかと思った瞬間、恐怖が全身を貫き、爽子の足が止まった。
「どうした、大丈夫か」
もお怖くて爽子は帰りたい気分になっていた。気が付くと健太のライトが少し先に離れて揺れている。後ろには正雄もいる。爽子は気を取り直し、急いで健太の後を追った。
「オッ、なんかある」
健太が止まった。平らに前に向けているライトの中にコンクリートの台が地面と床をつないでいた。近付いて周りを回ってみると2メートル角くらいで、後ろに戸が付いている。
「この中に竜足石があるのと違うか」
「だって埋まっているって言ってたじゃないか」
「だからさ、この中で埋まっているんだろう、ちょうど須弥壇の下辺りだよ、ここ」
　三人が戸の前でしゃがみ、ヒソヒソ話している。ともすると声が大きくなる健太に正雄が気を揉んでいた。
「きゃっ。あれ何」
爽子の押し殺した声が上がった。
「しいー、声がでかいよ。健ちゃんも、爽子は何なんだよ」
「猫だろう」
健太が光っている二つの目玉にライトを向けた。その中に斑猫が浮かび上がり、一鳴きして光りの輪から逃れて行く。
「きゃっ」
「今度は何」
爽子のライトが青光りするトカゲを照らしている。豆電球の赤っぽい光で少し黒ずんで見える。さっきのクモもそうだったが、この生き物もやはりふっくらとした体つきをしている。細く伸びる尻尾と、キュッと小さくまとまった頭がそれを強調していた。
「おっ、茶色い奴もいるなあ」
赤っぽいライトの中で見えなかったのか、良く見ると青いトカゲの周りに点々と茶色のトカゲが見える。爽子が慌てて自分の周りを照らし出した。上手い具合に爽子の近くには一匹もいなかった。
「ここ、トカゲの巣になっているんじゃないの」
「大丈夫だよ、トカゲは別に噛み付きゃしないよ。爬虫類が怖くて恐竜を探せますか」
爽子が帰ると言い出す間を置かず、健太が口を挟んだ。
「なに言ってるの、ネコは可愛くてもトラは怖いでしょ」
爽子の口にはまだ元気があったが、足は後ろを向こうとしている。
「トカゲがいるって事はヘビもいるんじゃないの」
「なんで」

「ヘビの餌じゃない。クモをトカゲが食べて、トカゲをヘビが食べるのよ」
「やなこと言うなよ。俺、ヘビ駄目なんだから」
「何言ってるのよ。ヘビも爬虫類よ」
「あのなあ」
「何よ」
「駄目だ。この戸ビクともしない」
二人をよそに戸を調べていた正雄が呟いた。
　戸は鉄でできていた。どうやら錆び付いているらしい。ライトを当て隅々まで点検する。鍵は付いていないようだ。戸車が上にあり、上からぶら下がっている。
　健太がバックパックを降ろしシャベルを取り出し組み立て出した。正雄も移植ゴテを出し、爽子もバックパックを降ろし、身軽になる。健太が戸の隙間にシャベルを突っ込み、こじ開けようとしているが隙間がほとんど無く、力を入れると直ぐに外れてしまう。次ぎに正雄が下から、戸と敷居の隙間から移植ごてを入れ、こじた。ガリッと音がして戸が少し上がり隙間も少しできた。健太がその隙間にシャベルを入れようとするのを押し留め、正雄が後ろ側も同じようにして持ち上げた。又ガリッと音がして少し隙間も拡がった、正雄が頷き、健太ができた隙間の上の方にシャベルを突っ込み、グイッとこじた。ギィー、三人ともそれが物凄く大きな音に聞こえ、瞬間凍り付いた。
　三人の耳には忘れていた虫の音だけがかすかに響いてくる。もう一度健太がシャベルを入れ、少しづつこじる。ギ、ギ、ギ、と音は小さくなったが止まない。爽子は今にもあのお坊さんが来るんじゃないかと気が気では無い。
　どこかで犬が遠吠えを始めた。つられて他の犬にも伝染して行く。犬の声で音がまぎれたらという思いと、それで誰かが目を覚ましたらという思いを絡み合わせながら作業が進む。
　どうにか手の入る隙間ができた。取り合えずその隙間から中を照らした。下は広くなって、地下室になっているようだ。隙間に頭が三つ並び、ライトが三本になると、地下室はだいぶ広そうに見える。
「何これ、骨を入れる所じゃないでしょうね」
「違うだろう」
地下室の床に光を三つ重ねた。ただのコンクリートの床があるだけだった。
「なんにも無いだろう」
「何も無いんならもういいでしょう。早く帰りましょうよ」
「もうちょっと、もうちょっと、中に入ってみて、竜足石のなんかあるかも知れないし」
健太がライトを下に置き、戸に手を掛けた。
「健太君、下はきっと蛇だらけよ」
健太が戸に手を掛けたまま固まってしまっている。ゆっくりと屈み、置いたばかりのライトを拾い上げ、又中を照らし出した。
「正ちゃんも見てくれよ、何にもいないよな」
隙間にへばり付き中を見ている二人を爽子のライトが照らしている。

「インディージョーンズ見たでしょう。こういう地下室にはヘビがいるのよ。どこかに隠れてて、ウッジャウジャ出て来るのよ。見たでしょ、ね、見たわよね」
「あれはどっかの砂漠だろう。全然違うじゃないか」
健太のライトに照らし出された爽子の顔がもう帰ろうと言っていたが、健太としてはどうしても中に入らずにはいられなかった。正雄もここまで来て中を見ずに帰ってしまうのはシャクだと思っている。
「健ちゃん、この戸は引きずると音がするから、二人で持ち上げるようにして開けよう」
正雄が爽子を無視して事を進める作戦に出た。
健太が又ライトを下に置き、正雄はポケットに入れ、戸を持ち上げにかかる。二人のライトが消え、否応無しに爽子のライトが作業を照らし出している。
　戸は思ったほど重くなかったが、中途半端な姿勢で音を立て無いようにする作業はなかなかハードだった。少しガリガリと音がしたものの、どうにか人が入れるほど開ける事ができた。
「完全な地下室ね」
戸が開いてしまうと、怖い物見たさで真っ先に爽子が覗き込んでいる。
「あー、爽子ライトを中に入れたら、こっちが真っ暗になっちまうだろう」
爽子が入口から離れ、戻った明かりで拾い上げたライトを健太がつける。正雄のライトはポケットに無く、足元に転がっていた。拾ってスイッチを入れたがライトがつかない。
何回かパチパチとやったが玉が切れたらしい。
「懐中電燈、玉切れちゃったみたいだ」
「ただの地下室みたいだな」
「結構広そうね」
「階段無いな。…飛び降りるか」
「私、飛び降りれないわよ、それに何も無さそうよ。もういいでしょう、帰りましょう」
「3メートルは無いよな。2メートル50位なもんだろう。な、正ちゃん。大丈夫、大丈夫、俺が先に飛び降りるから、俺の肩に乗ればいいよ、上で正ちゃんも支えるし」
「上がる時はどうするのよ」
「上がる時の方が簡単だよ。肩に乗れば手が届くんだから。何だったら爽子、ここで待ってるか」
「嫌よ、こんな所で一人でなんかいられないわよ」
「よし、決まり、じゃあ、先ず俺が降りるから」
「待ちなさいよ、こういう地下室って酸欠になっているかも知れないわよ」
又健太の動きが止まってしまった。
「正ちゃん、どう思う」
「うん、あるかも知れない」
「じゃあ、ちょっと休憩」
そう言うと健太が床下をごそごそして戻ってきた。
「何してたの」

「これ」
トカゲが健太の手の中でぐったりしている。
「死んじゃっているんじゃないの」
健太が力を少し緩めると、手から逃れようとトカゲの体がくねる。ふっくらした体に思いの他筋肉が充満している。そう言えば横にくねくねするのは魚と同じだと思っていると、健太があっと言う間に地下室にトカゲを投げ込んだ。
「何するのよ」
下でトカゲがピクともしない。
「死んじゃったんじゃないの」
「酸欠かあ」
爽子と正雄が覗き込んでいると、健太がクモの巣を払っていた小枝をトカゲの上に落とした。仰向けに引っくり返っていたトカゲが一目散に光の環の外に消えた。
「何だ気絶していただけか」
「よし、じゃあ降りるよ」
健太が敷居に手を掛け、途中まで降ろした体を跳躍させ飛び降りた。下で健太が一つ大きく伸びをしている。
「どう何かある」
健太が中に入り、見え無くなった。
「ウォ、なんだこれ」
「どうした」
直ぐ健太が出てきた。
「すげえ怖い、地獄の絵が描いてある」
「絵だけ？他に何か無いの、竜足石は？」
「まだ良く調べないと分からないけど、ヘビはいないよ。全然いない」
「じゃあ私も降りるわよ。健太君、肩、肩」
「爽子、急に元気出たじゃないか、ライトこっちによこせ」
「床下より地下室の方がましでしょう、変な絵も見てみたいし、他にトカゲが一匹しかいないんだから」
「正ちゃん達の方が地獄の絵よりずっと怖く見えるぞ」
下からのライトに照らされた正雄と爽子はお互いの顔を見ないようにしている。
「ライト持ってたら爽子を降ろせないだろう、早くライト下に置けよ」
健太のライトが消えると、辺りが急に頼りなげになってくる。
爽子も健太がしたように敷居に手を掛け、ズルズルと体を降ろし始めた。
「健太君、肩どこよ」
「そのまま降ろせば肩があるから」
健太の手が爽子の足を掴み肩に乗せた。
「嫌だ、これからどうするのよ」

「敷居の手を放して健ちゃんの肩に座れ」
「嫌だ、怖くて手を放せない」
「じゃあ、このまましゃがむか」
「嫌だ、動かないで。落ちる」
「正ちゃん、どうする」
「じゃあ、ちょっと待って」
正雄が入口の所に置いたバックパックの中味を全部出し、持ってきた。
「正雄君、ちょっと真っ暗」
「はい、これをしょって」
「何するの」
「片手ずつ行くよ、はい左手通して、ようし、右手も、ようし」
「じゃあ、健ちゃん、その場でクルリと回って、背中を壁に付けるから。一緒に爽子も回るよ。ゆっくり、ゆっくり。はい爽子片手離して、俺の手を掴む。はいグルーッと回る。ほらできた。この方が壁に寄り掛かれるから安定するだろう」
「ええ、大丈夫みたい」
「じゃあ、右手も離して。脇をしっかり締めて」
安定が取れ、爽子が言われる通りにしている。
「じゃあ俺、バックパックを掴んでるから。健ちゃん、ゆっくりしゃがんで。あっ、待って、爽子ライトを持って自分で照らせ」
正雄が爽子にライトを渡し、空いた手で敷居をしっかりと掴んだ。
「よし、健ちゃんいいぞ」
「いいわよ」
健太がゆっくりしゃがみ始める。壁を背中でこすりながらしゃがみ込むのは健太に取っても楽だった。
「もう大丈夫だろう」
健太はしゃがみ切っている。
「ええ、じゃあ飛ぶわよ」
爽子が壁から背中を離し、ピョンと前に飛び降りた。
「杉本選手着地成功しました。10点満点が出ています」
爽子の上げた手で、ライトが闇の中で踊っている。健太もライトを拾い、爽子と二人で中に入っていった。ボッと漏れてくる明かりだけで、正雄の所が真っ暗になった。
「おーい、こっちも照らしてくれ。下が見えないぞ」
壁の地獄絵に当てていた健太のライトだけが、入口の下の床に向けられた。
「凄いだろう。地獄の絵だぜ」
爽子のライトが地獄絵のあちこちを移動して行く。
「ひどいなあ、人の事ほったらかしにして」
「凄いだろ、正ちゃん」

懐中電燈の赤っぽい光の中に、閻魔様だの、ぶつぶつの付いた棍棒を持った角の生えた鬼だの、針の莚の亡者だの、腹の膨れた餓鬼だのが次ぎ次ぎに現れてくる。
　コンクリートの壁に直に墨で描かれ、彩色はされていない。ぐるっとライトを回してみると絵は壁の一面にしか描かれていなかった。
「この絵、あまり上手じゃ無いわね」
「そのわりに爽子、声が震えてないか」
「どこが震えてるって言うのよ。地下室で反響してるの！」
　地下室の広さは大体5、6メートル四方位だが、二本の懐中電燈だけでは、光の当たらない部分が深く奥へ続いているようにも思える。
「あっ、電燈がある」
上に向けた健太のライトの中に裸電球がぶら下がっでいた。
「スイッチは…と」
電球を照らし出したライトが壁のあちこちを探っていく。
「健ちゃん、電気のコードを追って行けば良かったんだろう」
「言われてみればそうだけと、直ぐ分かるさ。胸くらいの高さにあるんだから。ほら、あった」
素早く健太が走り寄り、パチパチとやったが電燈は点かなかった。
「残念でした。電気は来ていませんね、あっ、ここにノートがぶら下がっているぞ」
爽子と正雄も健太の所に集まった。健太が片手でノートを持ち、片手でライトを照らし、不自由な恰好でノートを見ている。床に置こうとするのを正雄が受け取った。
「もうしゃがみたく無いから俺が持ってるよ」
二人が両脇から覗き込む。
「上の仏様をここに降ろすみたいだな」
　それによると、太平洋戦争の時、空襲に備えて御本尊様を火事から守る為に、この地下室を造ったらしかった。ロープで吊り降ろす様子が図解されている。三人が入った床と地面をつなぐ台の天井に鉄の戸がはまり、それをスライドさせて開け閉めする構造になっていた。三人が入って来た口は上が何かで塞がれた時の非常口らしい。地獄絵に付いての説明は何も無かった。空気穴もどこかに開いていて、防空壕代わりにも使ったらしい。
「結局、竜足石とは関係無いって事ね」
爽子のライトが地獄絵を照らし出し、爽子が絵の方へ歩き出した。ライトの無い正雄は1、2秒考えたが爽子の後に続く。健太はノートを壁に戻し、あちこち調べ始めた。
「この絵、誰が描いたんだろう」
「先代のお坊さんでしょう。ここの事、きっと上のおじさん知らないわよ」
「そうだな、養子って言ってたし、ここに来てからそんなに経っていないようだったしな」
「それにしても下手よね、絶対プロの絵じゃ無いわ」
それでも正雄にはライトに浮かぶ鬼の絵や餓鬼の絵が不気味に見えた。
　絶えず揺れる光の周辺部では暗い方から何か動き出て来るようで、得体の知れないビジュアルな効果がますます大きくなってくる。

「いつ描いたんだろう」
「嫌だ正雄君、怖いんじゃないの。声が変よ」
正雄の声がかすれている。
「ファラオの呪い〜」
正雄が照れ隠しに、ことさら語尾を震わせた。
「何ふざけてるのよ。これ未完成みたいだから、描いていて自分でも嫌になったのよ、きっと」
「ア、アー」
突然妙な声が聞こえ、振り返ると闇の中にざんばら髪の生首が口を開け、赤い舌を出して浮かんでいる。悲鳴を上げようとしても金縛りに会ったように二人とも声も出ず、固まり付いている。
　地獄絵の亡者が揺れる闇の境目からどんどん動き出して来て、今にも肩を掴まれそうなビジョンが揺れ出した。
　生首がその時ニタリと笑った。爽子が金縛りから解けたように自分のライトを生首に向けた。
「電池切れたみたいだ」
ライトの中に全く緊張感の無い健太がニヤニヤと立っている。弱くなった光を健太が上から覗いていただけだった。正雄がへなへなとその場に座り込んだ。
「何よ、健太君、電池、替えて無かったの」
爽子の声が震えている。へたり込んだ正雄の目の前にガクガクしている爽子の足があった。
ライトが一つになり、闇が周りから押し寄せてくるような、さっきまでとはまるで違う空間に来てしまったような気分になった。
「爽子は大丈夫か」
「私は替えの電池持っているもの」
正雄はそれを聞き少しは安心したものの、周りの圧倒的な闇にたいし爽子のライトは実に頼りなげだ。
「いやー、まいった、まいった」
健太が二人の方へ歩いて来た。
「何も無いでしょう」
「うん、ここには無いみたいだ」
「ここにはじゃ無くて、あのおじさんがインチキなのよ」
全く緊張感の無い健太のおかげで爽子の声も落ち着きを取り戻している。正雄も立ち上がったが膝がまだガクガクして力が入らなかった。
「この絵描いたの、ひょっとしてあのお坊さんかも知れないな」
「そうかも知れないけれど、あのおじさんならもっと上手に描きそうよ。ほら、類は友を呼ぶって言うでしょう。こう言うのが、何だっけ、そうそう因果の流れってやつなのよ」
「爽子、電池大丈夫か」
正雄は心なしか光が弱くなったような気がしていた。
「大丈夫よ、替えがあるんだから、それに随分前に描いたものよ、これ、ほら上から汚れが付いたり、染みて流れたりしてるじゃない。それに途中で止めた感じじゃない」

とくとくと語り出した爽子を不思議な感じで健太が見ている。
「爽子、よく平気だな。俺もう気味が悪くて」
「正雄君て、結構臆病ね、ただの絵じゃない。きっと周りの壁全部に描くつもりだったのよ」
「…」
「私も前、暗い所が怖かったのよ。ここに越して来た当時が一番ひどかったわね」
「それがどうして平気になったんだ」
「お父さんが暗い所に馴れさせようって、星を見に出たりしているうちに平気になっちゃたのよ」
「暗い所と怖いのとちょっと違うんじゃないのか、俺だって映画館が真っ暗になっても平気だけどさ、それでもホラー映画の時は怖いじゃないか」
「だから怖いのは気のせいで、暗さじゃ無いって事でしょう。ここだって地獄の絵が描いてあるって事は、ここが地獄じゃ無いって事でしょう」
「そりゃまあそうなんだけど」
話しているうちにライトがスーッと暗くなってきた。
「あら嫌だ、本当に電池が切れてきたわ。でも大丈夫、替えのがあるんだから、バックパックは飛び降りた所に置いたから…」
「爽子その中に入っていたのか？」
薄暗い明かりの中で変わった顔色も顔付きも見えない。上ずった正雄の声の調子に気付いた爽子がハッとしたように入口の方へライトを向けた。しかし既に弱くなった光りが暗闇の中に吸い込まれて行くだけだった。
「ま、いずれにしてもあれは俺のバックパックだから」
「…」
もう爽子のライトは足もとも照らさなくなってきている。光が弱くなったと言うより、闇が染み込んでくるという感じがする。
　爽子が顔の前にライトを上げた。三人ともクリスマスのろうそくを見るような顔をしている。爽子には二人の顔がレンブラントの肖像画のように見えた。それもあっと言う間に見えなくなり、ライトの先だけが赤っぽくなり、最後に上から覗くと豆電球のフイラメントが赤いコイルになり、遂に消えた。
　真の闇になった。しかし、しばらくは赤いコイルが闇のあちこちに見えていた。
「残像だな」
健太の相変わらずの声がした。
「何？」
「フィラメント」
「何言ってるのよ。私何だか目が回ってきたわ」
爽子は思わず床に手を付いてしまった。高速エレベーターが止まる時の感じと似ていた。そのまましゃがんで、床に手を付いたまま、床ごと地の底へめり込んで行くような気がした。
しかも一瞬、東京のデパートのエレベーターの中だという錯覚にもとらわれた。

「どっちが入口か分かる？」
「あっちだと思うけど」
三人ともしゃがんでいた。床の冷たさが唯一の現実で、声を出していないと意識もどこかに行ってしまいそうだ。
「あっちって言われたって、どっちだか全然分からないわよ」
「そうだよ。大体自分がどっち向いてたかも、もう分からなくなってるよ」
「そうだ。正ちゃんのライト、電池残ってるだろう」
「上に置いて来た」
「…」
「玉の切れたのなんか持ってこないよ」
「壁はどっちよ」
「ライトが切れた時の位置のままなら、確か俺は壁の方に向いていたと思うな」
「そうだよ、健ちゃんは後からここに来たんだから」
「正雄君動かないで」
ごそごそと壁を探り出した正雄を爽子が止めた。
「何も見え無いんだから、変に動いたら皆バラバラになっちゃうわよ」
「ただの地下室だろう」
「何言ってるのよ。声だって壁に反射して来ているんだから、離れたらお互いに分ら無くなっちゃうわよ」
「じゃあどうするんだよ」
沈黙があった。音が無くなると誰がどこにいるのかはもちろん、自分も壁にしゃがんでいるのか、天井にくっ付いているのか、はっきりしなくなってくる。
「ベルト外しなさいよ」
「えっ」
「ベルトを外すの。ズボンは脱がなくていいのよ」
「…」
「ベルトの端を持ってればいいでしょう」
「そうか」
健太が素早くベルトを外し、端を爽子に渡す。
2、3回手を泳がせただけで上手く受け取れた。
「正雄君もかして」
「はい、どこ。さっきから出してるけど」
「ここよ、ここ、ほらね、ちょっと動いただけでも直ぐ分からなくなるでしょう」
「どこだ、全くもどかしいな」
「キャッ、どこ触ってるのよ」
慌てて正雄が手を引っ込めた。
「馬鹿ね、引っ込めたらまた分からなくなるじゃない」

「そんな事言われても」
「いいからそのままさっきの所にベルト出しなさい。バックルの方がいいわね」
正雄がおずおずと差し出すベルトを、今度は爽子が難無く掴んだ。
「はい、掴んだわよ、じゃあ健太君、ちょっとベルト離して、今の位置忘れないでよ」
爽子が健太のベルトを正雄のベルトのバックルに通して一つにした。バックルとバックルで止まり上手く1本になった。
「1本にしたから二人が端を持って、私が真ん中を持てばいいでしょう、はい、健太君端を返すわよ」
健太の手が期待で暗闇を大きく動いていったが、掴んだのはベルトの端だった。
「あ、ベルトだ」
「ベルトに決っているでしょ」
「じゃあ俺、壁の所まで行ってみるから」
正雄のベルトに引っ張られ爽子も動き、健太も続く。
「いて、頭がぶつかった」
そろそろと爽子も、健太も壁に手を付いて確認ずる。
「この壁の反対側が入口のある壁だからね」
「よし、俺が先頭になる」
健太の先頭に誰も異存は無い。健太の立ち上がる気配がする。
「ちょっと、健太君。立って歩けるの」
「うーん、駄目みたい」
健太が又しゃがんだ。
「しゃがんだまま行こう」
健太がそのまま暗闇の中を進み出す。爽子も正雄もつながって行く。目を開けていても閉じていても同じような闇しか見えないが、三人ともしっかり目を開けている。何も見えなくても目を開ける事で体のバランスが保てるような気がしていた。地下室の中には何も無いのが分かっているのに、健太が片手を前に出して進んで行く。
「入口のへんにバックパックが置いてあるから、バックパックがあればその上が入口よ」
　進みながら目をつぶっている自分に爽子は気が付いた。こんな風に前の奴の尻尾をくわえて移動する鼠が思い浮かんだ。床をこするスニーカーの音だけが、自分達が出口へ向かっているしるしだった。向かい側の壁まで20歩ぐらい、しゃがみ歩きだから倍にして40歩としても、もうそれ以上随分長く進んできたような感じがする。スーキュッ、スーキュッと変化無く響く靴音が果ての知れない洞窟の旅を思わせ、横に手を伸ばすと細長く伸びた洞窟の壁に触るのではないか、という思いに今度はとらわれた。しかし手を横に出そうとしてもなぜだか出せないでいると、健太の声がした、
「壁に手が付いた」
「何だか長かったわね」
健太の声で爽子も現実を取り戻した。

「正ちゃん、いるだろうな」
「いるさ」
「バックパック無い？」
三人で周りをごそごそと手探りを始めた。
「無い？」
「無い」
「正雄君は？」
「無い」
「どうしよう」
爽子は入口と思われる方を見上げた。たぶん他の二人も見上げていると思いながら目を凝らしてみたものの、他と全く変ら無い暗いつながりがあるだけだ。四角の地下室だと頭では理解していても自分の周りに球形の空間を、しかも手の届くような狭さで感じているのが不思議に思えた。
「じゃあこの壁側を角から角まで調べよう。ベルトの長さで調べれば十分だろう」
「ええ、飛び降りた所くらいに置いたはずよ」
「同じ所を二度も手探りしたくないから、ここにライト置いとくか」
健太がポケットからライトを出し、スイッチを何気無しにパチッと入れた。ボッと弱い光の中に何が起こったのかと目をしばたたかせている三人の顔が浮かび上がる。
「健ちゃん、バックパック、入口入口」
健太のライトが上に下にうろうろするうちに、あっと言う間に消えてしまった。
「もともと電池無かったんだから、しょうが無いよ」
爽子も自分のライトを点けてみたが、ちょっと赤くなっただけで直ぐに消えてしまった。
　暗闇の不安の中にいて、ほんの少しの明かりで見えた形の無い闇が目の奥に動めくように残り、最初よりもっと不安が広がってしまった。
「こうしていてもしょうが無いわ、バックパック探しましょう」
「よし」
健太がライトを壁際の床に置き、動き出した。爽子は押し潰されそうな不安に必至に抵抗している。のろのろと壁に沿って探し、角まで行き戻ってきた。見つから無いんじゃないかとよぎった不安が的中し、反対の壁に着いてしまった。
「無かったな」
「爽子、入口の所に本当に置いたんか」
「置いたわよ。飛び降りて直ぐ降ろしたんだから」
荒くなった爽子の声に、正雄も健太も押し黙った。じっと黙り込んでいるのに正雄が耐え切れ無くなる。
「じゃあこの壁が入口の壁じゃ無かったって事だ」
「そうだな、真っ直ぐ進んでいるつもりだったんだけどなあ」
「そうね、片方ベルトで引っ張られているから、そっちに曲がって隣の壁に着いちゃったかもね」

声がヒステリックになっていたのに、自分でも気づいた爽子が事さら軽い調子にしている。
「たった10メートル四方の地下室で迷子になっちゃうなんて」
「俺達、迷子か」
「…」
三人が見えない顔を見合わせた。他の二人も笑っているような緊張の解けた空気がそれぞれに伝わってくる。
「迷子の迷子の小猫ちゃん、お髭があって良かったね」
「プッ、健太君て、緊張感てものが全く無いわね」
「俺暗い所、結構平気なんだ」
　健太は明け方の地下室の冷んやりした空気の中に爽子の体の熱を感じながら、爽子は絶対自分が助け出すんだと、一種ヒロイックな気分になっていた。
　爽子の緊張もほぐれてきたし、さてどうやって脱出するか、まあ夜が明ければ光が入ってくるから問題も無いが、時間が長くなるとパニックになる恐れもあるし、それまでに出れればそれに越した事は無いし、どうするか、健太が考えている。
　正雄はさっきまで弱い光で見ていた地獄の絵を頭から追い払うのに四苦八苦していた。二人の体の動きでできる僅かな空気の流れも、亡者のものとも思え、顔や首をしょっちゅう手で払っている。さっきはベルトが爽子に触れただけだったのに、言い訳のできなかった自分が情けないと思う余裕も無かったし、闇の中で目の前にボッと光っている物がただの錯覚なのに、爽子の足のうぶ毛だと無理矢理考えている。しかしそのおぼろげな光る足も形がどんどん崩れてしまい、今はただうぶ毛の生えたコロナが見えるだけになってしまっている。
　爽子も完全な闇の筈なのに目の前に光る物がチラチラすると思っていた。光りが無くても視神経に何か刺激があれば光っているように見えると漠然と考えていたが、目を手で押してみたりしている。結局完全な闇など無いんだ、と思った時、虫の声も何も音などしていない筈なのに、耳の奥で蝉の声のような、又その背景に虻の羽音のような低い音がしているのに気がついた。結局完全な無音も無いのだ。
「無って無いのね」
「何て言った」
爽子の声で三人は又同じ世界に戻ってきた。沈黙の後の声が普通より大きく響いて聞こえてくる。
「無よ、無我とか、無情とかの無。無なんて単に想像するだけのものなのよ。世界は雑多なもので詰まっているって事」
「何だよ突然、妙に悟ったような事言い出して」
「本当だ。上の坊さんみたいだ」
「暗い中で考えてたら思いついちゃったのよ」
「在る物は在るし、無い物は無い」
「そうよ、案外それって真面目な事なのかも知れないわね」
「それよりどうする、朝まで待つか？」

「今4時半を少し回ったぐらいかなあ」
「ねえ、何か変な臭いしない。ここに入った時から気になっていたんだけど。カビ臭いのとも違うし」
「これか、クモのウンチの匂いじゃないかあ」
「クモ、ウンチなんかするの…、するわよね」
爽子の目の前で上で見たドクロ模様のクモが浮かび上がり、足をピクつかせて動めいている。
「嫌よ。私朝までこんな所にいられない」
「よし、迷子の小猫には髭が必要だ」
「何だそれ」
「正ちゃんさっき聞いていなかったな」
「地獄の絵が気になっててさ」
「髭って何よ」
「天井に電気が付いていただろう」
「…だから～」
「壁にはスイッチがある」
「あ、そうか」
「スイッチ、入り口の左側の壁にあったわよね」
「そお、ぴったし。胸の高さに付いていたから左手で壁を撫でていけば入口までまーしぐらと言う訳」
「やったあ、出られる」
「爽子より正ちゃんの方がほっとしてないか」
「ばれた？俺ここ苦手だよ。ちゃんとした物の見える所へ早く行きたい」
正雄もそれなりに爽子に気を使っているらしい。
「今、角にいるから、4番目の角でここに戻った事になるからね」
健太を先頭にして時計回りに歩き始めた。今度は立って歩いているし、暗闇といっても壁伝いだからさっきよりずっと楽で危なげも無い。
「なんか腹へってきたな、正ちゃんち晩飯何だった」
「カレー」
「いいなあ、うちは何だったかな」
健太が爽子の気を紛らそうとして食い物の話しをしている。
「うちはハンバーグ」
爽子も元気を取り戻してきている。それとは裏腹に正雄は地獄の絵を気にし続けていた。
　一つ目の角まで何も無かった。
「正雄君、何ふらついているの、しっかり歩きなさいよ」
「ご免」
「もっと壁ぎわ歩いてよ、ベルトに引っ張られて私も壁から離れてしまうでしょう」
「俺、壁、触れないよ」

「しょうが無いわね、この壁、絵の壁じゃ無いでしょう」
「そうか」
正雄が恐る恐る壁際に戻り、壁に手を付けた。
「疑う訳じゃ無いけど、違うよ…な」
「違うわよ」
爽子のでたらめにすがり付きたい正雄だったが、幾ら違うと思っても左手は亡者の中を掻き分けていた。掌から伝わってくる壁の冷たさが熱の無い者の冷たさのように、重い腕を伝って背中まで入り込んでくる。
　二つ目の壁も真ん中を過ぎ、爽子は又不安になってきた。このままこの地下室の中をくるくると尻尾をくわえたネズミみたいに回っている姿が又思い浮かんだ。無理矢理それを思い浮かべた。その方がドクロのクモのピク付く足や、ふっくらふくらんだ腹を思い出すよりましだった。もう二つ目の壁も終わる頃だと思った時、健太が止まった、
「あったよ。コードだ」
健太がその下に探りだしたスイッチの音がパチパチと聞こえてくる。そんなちっぽけな音が爽子を又一気に現実に連れ戻してくれた。
「もう直ぐ角だから、曲がれば入口の壁だからね。入口はこっち側よりだったから、行き過ぎないようにしないとな」
健太の歩みにつれ、爽子もコードに触れて行く。正雄も同じように触れ、ホツとした気分になった。
「角だよ、正ちゃんが角に来たら言ってくれ」
健太がそのまま曲がって行く。
「角」
爽子の声が小さく聞こえる。
「角に来たよ」
正雄の声が弾んでいる。
「じゃあこのへんから上の入口を探りながら行こう」
「どうする」
「俺が肩車するから、正ちゃんが手を伸ばして探してくれ」
「よし、じゃあそっちへ行くから」
正雄が爽子を伝い、健太に触った。
「顔だよ、そこ」
「悪い、悪い」
「じゃあ、しゃがむからな」
正雄が手探りで位置を確かめている。
「あーん、正ちゃん、変なとこ触んなよ」
もう直ぐ外に出られると思い、二人に冗談が戻ってきた。
「私は何をする」

「それじゃあ、俺が壁から離れ過ぎないように見ててくれ、と言っても見えないんだけど」
健太が正雄を肩車して立ち上がった。別に爽子にそんな事をさせる必要も無かったのだが、爽子にも何かさせた方がいいと思ったし、爽子が背中に手を添えてくれるだろうと期待していた。
「どうだ」
「壁だけ」
そろそろと健太が壁を伝い始める。爽子が健太のジーンズを掴み、片手で壁を撫でて行く。ベルトは自分の腰にぐるぐると巻いておいた。
「入口に手が届かないって事ないでしょうね」
「その可能性もある」
「だって、私が健太君の肩に乗った時、もうぎりぎりだつたのよ」
「…」
「ちょっと待って、止まって」
「在ったか」
正雄が手を上に伸ぼせるだけ伸ばしている。
「いや、無いんだけど。…なんかここ他と違う感じがする」
「よし」
健太が全身に力を入れて爪先立った。
「どうだ」
「まだ届かない。でもここに間違い無いと思う」
「そうよ、声の反射も何と無く違う感じがするわよ、それに上の方がなんか明るい感じがする」
健太が次ぎに正雄の足を持ち上げようとしたが無理だった。
「正ちゃん、一回降りよう」
健太がゆっくり正雄を降ろした。
「正ちゃん、肩の上に足で乗れ、壁に手を付いていれば大丈夫だろう」
「よし。ライトかして、上には電池が在るんだから」
「あ、俺のあの壁の所に置いたままにして来ちゃった」
「じゃあ、私の持って行って」
爽子のライトを持って正雄が健太の肩の上で中腰になった。
「いいよ。そっと、そっと」
最初の立ち上がりがきつかったが、後はどうと言う事も無く健太が立ち上がった。そこで正雄も肩の上で立ち上がっていく。
「やった、入口だ。ドンピシャだったな」
正雄が敷居に手を掛け、壁をよじ登った。
　床下は外の星明かりが入って来ているらしく薄ぼんやりとした感じもある。外を見るとほんのりとした明るさがある。バックパックを探して入口付近に目を落とすと、元の真暗闇に戻っている。しかしバックパックは直ぐに探り出せた。中を開けると爽子の物だった。
「在ったよ」

ライトのねじ蓋を外し、中の電池を地面にあける。蓋を地面に置こうとしたが思い直して口にくわえた。バックパックにライトごと手を突っ込んで、その中で電池のプラスの出っ張りを確かめ、ライトに入れる。
「まだあ」
「うん、うがうが」
「何言っているのよ」
下にいる爽子のじれが目の前にいるかのように突き刺さってくる。急いで2本目も入れ、蓋を閉め、スイッチを入れた。たった1本のライトが大げさで無く、眩しい明るさで周りを照らし出す。地下室の方でも声が上がった。
「早く、こっちも照らしてよ」
「いて！」
慌てた拍子に正雄が床梁に頭をぶつけている。
　入口で揺れていた光りがやっと中に入ってきた。
「健ちゃん、ライトやるから自分のを拾って来い」
「よし」
正雄が半分ずり落ちそうになりながら手に持ったライトを下に降ろしたが、健太に届きそうで届かない。健太が下で受け取るまねをした。
「あっ、駄目よ。おっことして壊したらどうするのよ」
「そうだよ。危ない、危ない」
正雄がバックパックに入れて降ろそうとしたが、入れると真っ暗になってしまう。
「正雄君、はいこれ」
爽子がベルトを上に放り上げた。
「おっ、グッド」
ベルトにしっかり結んだライトがそろそろと降りて来る。ライトが壁に当たり、光りがあっちこちに不規則に飛ぶ。戦争で荒廃した未来世界で、地上の人間を探しているロボット飛行体が照らすライトのようだった。あんな物に結ぼなくても俺が爽子を肩車すれば良かったのにと思いながら、下で健太が待ち構えている。
　まるで天上からの光でも受け取るように、健太がライトを押し戴いた。
「アーメン」
「何言っているのよ」
「あっ、南無阿弥陀仏」
「もう、ふざけてる場合か」
ベルトから外したライトで爽子の顔を照らした。
「何よ、眩しいでしょう」
今度は自分の顔を下から照らして健太がおどけている。
「ほらほら、ふざけていないで早くライトを取って来なさい」

健太がライトを横の壁際に向けて動かして行く。壁のスイッチに触った時、最初にしゃがみ歩きした時に着いた壁の位置も分かっていたのだ。
「大丈夫か」
「ええ、平気よ、早く行って来て」
健太が爽子にライトを渡す。爽子がここで照らしている光で充分だった。
　真っ直ぐに置きっ放しのライトを照らし出している光に爽子の緊張を感じながら、健太が直ぐにライトを取って戻って来た。
「さあ、正ちゃんがやったみたいにやるからね」
健太がことさら快活にしゃがみ、肩を出す。
「俺の膝を踏台にすればいいから、軽い軽い」
健太が自分の膝を叩いて笑っている。
「じゃあ正ちゃん、杉本選手を上げるぞ」
「何よ、それ」
「ここに降りた時、自分で言っただろう」
「そっか、杉本選手行きます」
健太の膝を踏台にすると簡単に肩に乗れた。
「行くぞ」
考える間も無く、健太が苦も無く爽子を担ぎ上げた。降りる時、どうしてあんなに怖かったんだろうと思うほど呆気無く持ち上げられていた。直ぐに正雄が爽子の腕を掴み、ライ
トを取った。
「よし、敷居に手を掛けて。引っ張るよ」
「正ちゃん、爽子を持っていろよ。足を押し上げるから」
爽子の少し浮いた足を手で掴み、健太が重量上げの要領で押し上げる。もう爽子の体の半分が外に出ている。爽子も何無く足を掛け這い上がった。
「健ちゃんどうする、まだそこにいる」
「何言ってんだよ。弱い立場の私は何も言えませーん。どうぞ蛛の糸を垂らして下さい」
「ハハハハハ、良かろう」
正雄がベルトを垂らし、爽子がライトで照らしている。
「健ちゃん、バックパック拾って」
健太がバックパックを拾いベルトを掴むと、グイグイとそれを手繰り、直ぐに敷居を取り、あっと言う間に懸垂して上半身を乗り出したかと思うと這い出ていた。外に出た健太も正雄と同じように頭をぶつけていた。
「いてっ、ここが床下だって事を忘れてた」
健太のライトに正雄の電池を入れ換え、手早く三人ともバックパックを背負った。地面に落とした電池も全部拾い、ポケットに入れた。
　忘れ物は何も無い。床下から見ると、外はさっきより明るくなった感じがする。又健太を先頭にして床下を抜け出る。

「よし」
一応、犬走りで様子をうかがっていた三人が健太の合図で一気に固まって生垣の破れに突進し、寺の外に出た。鍵の掛けて無い自転車を道路に出し、床下で打ち合わせた通りに後も見ず、川まで突っ走る。土手に入り、少しスピードを緩め、葦の切れた所で川原におりた。

　山際が白み始め、それがシルエットの山をより深く沈めている。中天近くにはすでに輝きを失った星が疎らになって薄まった空に力無く溶け込み始めているが、西の海へと降りるに従い、青黒い画用紙に銀紙の星を貼り付けたように最後の光を放っていた。
　川原に仰向けになり背中を伸ばしている三人の耳に前触れも無くカナカナの声が飛び込んでくる。時折バイパスの信号で止まるトラックの発進音も聞こえ、もっと遠くには一番電車らしい音も聞こえていた。
「正ちゃん、なんか震えて無いか」
「足がガクガクしてるし、あっちこっちに幽霊がいるような気がする」
「しばらく悩まされるわよ、それって」
「爽子だって危なかったろう」
「私は、お化けは平気よ、クモとトカゲは嫌だったけど…あっ！」
「えっ」
二人の声が揃う。
「トカゲが中に入ったままだわ」
「トカゲなら大丈…」
「あー」
今度は三人の声が揃った。ようやくおぼろげに顔が分かるようになった日の出前の肌寒い空気を挟んでお互いの表情を計っている。爽子も正雄もその事に付いては口を開きたくない、と言う空気を流している。
「トカゲは大丈夫さ」
「…」
そんな事は分かっている。二人とも相槌も打たない。
「だって、戸を閉めて来なかったからな。アッハハハハー」
「…」
　笑いの尻がかすれて消えた。そのまま健太も沈黙に沈んでいく。代わってカナカナの声が二匹になり三匹になり、空気を掻き混ぜるように遠くなり近くなりして聞こえてくる。それが明るい空気を暗い空気に撹拌していっているかのように、周りがはっきり見える明るさになってきた。それでも誰も仰向けになったままで動こうとしない、
　健太が思い出したようにバックパックを探り出した。
「食べる？」
ミニドーナツの袋から1つ取り、仰向けのまま袋を爽子に渡す。爽子も一つ取り正雄に渡す。モコモコとした甘い味が腹に落ちていく。正雄が喉に話まらせ、起き上がって胸を叩き出した。

「結局、竜足石はいんちきだったって事よね」
「…」
今度は健太が沈黙させられた。それは爽子に言われるまでも無かった。健太はタメイケドンの夏も終わってしまうのかと淋しく切ない気分になってきた。
　ポチャン、健太が手の中にあった小石を投げた。大きく弧を描いて足の方へ消えて行く。二つ目の小石の音ももの悲しく返ってくる。正雄が投げる。そして爽子も投げた。三人とも夏の終わりを感じて感傷的になっていた。
「あっ、コーモリ」
「エッ」
健太の投げた小石にコーモリがじゃれ付くように掠め飛んだ。見えない壁に目茶苦茶に反射しているみたいにせわしなく2、3匹飛んでいる。今度は正雄が投げた。やはりスーッと寄って来て弾かれたように四方に散らばって行く。
　てんでに投げる小石にも飽きたのかコーモリが段々向こう岸に移動して行く。それを呼び戻そうと、健太が立ち上がり小石を高く放り上げた。しかしコーモリの関心は既に他所に移っているらしく、小石を無視して屏岩の方へと遠ざがり、ポッチャンと間の抜けた音だけが返ってきた。
　山の端の低い雲が朝焼けして赤くなり出している。コーモリと入れ違いに小鳥の群れが川の上を電柱ほどの高さで飛んで行き、田んぼの上を旋回していった。上空にも鳥の大きな集団が飛んでいる。
「何、あれ」
「ムクドリ」
三人の上を弓鳴りのような風切り羽の音を響かせてカラスが1羽街の方へ飛んで行く。その黒い影を見送っていると、又1羽ヒュンヒュンと飛び過ぎた。
「何これ、すっごい羽の音。カラスって、近くでしかも羽を広げていると大きいわね」
「うん、カラスって集団でいるし、大きいから怖いよな」
正雄が今のは嘴太だと指で嘴の形を作っている。
　さっきの小石のポッチャンと言う音に放心したように横になっていた健太がむっくりと起き上がった。耳にまだその音を残したまま健太が水際の方へ歩いて行く。爽子も起き上がり、正雄と座ったまま健太を見ている。
健太が水際で大きな、サッカーボールほどもある石を持ち上げ、うおーと叫びながら頭の上に差し上げた。
「俺達の夏はまだ終わらないぞー」
その大声に川に投げ込まれた大石の音がかぶさって行く。ちょうど山から顔を出した朝の最初のオレンジ色の光が仁王立した健太をくっきりとしたシルエットで浮かび上がらせた。

## エピローグ屏岩

　健太が渾身の力を込め、大石を川に投げ込んだにもかかわらず、あの時に夏休みがポッチャンと終わってしまっていた。あれから健太は爽子を誘うきっかけもなく、夏休みの宿題に追われ、ようやく終えた時、もう夏休みも最後の一日になっていた。
　健太は思い立って自転車で図書館に向かった。最後の日の図書館は混んでいた。閲覧室は一杯だった。星座の本を持って休憩所のベンチに行くと正雄がいた。
「正ちゃん、来てたのか」
「なんだ健ちゃん、どうした？宿題か」
お互いに持っている本をチラチラ見て、照れ笑いをこぼしている。
　星座の本はなかなかロマンチックだったが健太にはとても面倒くさい読物だった。正雄の隣に腰掛け、細かい所は正雄に任せてしまおうとパラパラとめくりだす。爽子と並んで星空を見上げている自分を想像して、思わずほほの筋肉が緩んできている。正雄にもそれが伝わったらしく、脇腹を突っついてくる。浮き浮きしながらお互いの本を見せあっている所に日に焼けた少女の足が立った。アッと思い顔を上げた二人が苦笑いを交わしている。

　こうして本当に夏休みが終わった。2学期も1学期と変わらず平凡に始まったが、二人には違うものになっていた。おそらく爽子にも。
　9月も半ば頃、この頃は塾の帰りなど二人で空を見上げたりしていたが、月が明る過ぎて星を見るには向かなかった。塾を出ていつものように健太が正雄に手を上げている。
「健ちゃん、どうしたんだよ、変な顔して」
暗がりでもはっきり分かるほど健太の顔が歪んでいる。
「ま、正ちゃん、後ろ、後ろ、早く」
「なに言ってんだよ、又脅かそうたって」
「違う、違う、屏岩の方を早く見て！」
正雄が訝しげに振り向くと、屏岩から首を出したタメイケドンが静かに、皓々と光る目をしてシルエットになって浮かび上がっている。
　健太が大急ぎで向いの駄菓子屋のピンク電話を取り、爽子に電話している。
「くそー、早く取れよ。なにしてるんだ」
「はい、杉本です」
「あ、杉本選手、俺、直ぐに屏岩を見てタメイケドンがいる」
「え、なに寝ぼけてるの」
「早く、早く。消えちゃうぞ」
爽子が受話器をコードレスに変え、ベランダに出た。
　屏岩の切り立った崖の上に細長い雲が崖から斜め上に伸びるようにして掛かっていた。雲も黒く、屏岩も黒く、崖から続く山襞も黒く沈み、一体となって裾に落ちていく。月は見えなかったが、遠くの雲の縁が白く光り、月が出ているのが分かる。

「なんなの、タメイケドンがどうしたのよ」
「屏岩の所だよ。雲が伸びているだろう。今、月が隠れちゃったけど」
「それがどうしたのよ、細長い雲があるだけじゃない」
「だから、それがタメイケドンの首で、月が、アッ、雲が切れる、屏岩のとこの雲見ててくれ。目を離すなよ。たのむぞー」
「アーッ」
細長い雲の先の一部が薄くなり、薄くなった中心が泡立つように白くなり始め、雲が切れた。
　爽子が思わず息を飲んだ。雲が切れた瞬間、月と月の光りがあらゆる細部を明らかにした。そこには月のように明るい目を持ったタメイケドンがいた。雲のわずかな動きがタメイケドンのまぶたを動かし、今、細長い雲がくっきりと輪郭を持ち、斜めに屏岩につながり首となり、屏岩自体がガッシリとしたタメイケドンの体を作っている。屏岩に連なるいつも見馴れた山襞もタメイケドンの背鰭のように見えている。風が雲を動かすと、タメイケドンが獲物を探しているような動きにさえ見える。月に掛かる雲の厚さの変化で目が微妙に動き、表情まで感じられた。そして上空の早い雲がタメイケドンをかすめて飛び去り、まるでタメイケドンがこっちへ動いてきているかのようにさえ見せている。
　爽子がベランダの手摺りをしっかりと掴んだ。耳の奥に、ずっと遠くからズシーン、ズシーンと音がしている。タメイケドンが何かを探している、と爽子は思った。ズシーン、ズシーンと足音が近付いてくる。
「ズシーン、ズシーン」
爽子の口が低く呟いている。健太の口もズシーン、ズシーンと呟き、正雄にも伝わった。
　タメイケドンは何を探しているんだろう。雲が月を隠し、タメイケドンが向うを向いた。又雲が切れた。今度は口を開け出した。顔に当たる風はタメイケドンの吐く息に違いない。こっちを見ている、確かにこっちを見ている。タメイケドンは故郷を探している。
　突然全く知らない街に来てしまった私と同じように、戸惑いながら自分の場所を探しているんだ。一人ぼっちで探しているんだ。不意に5年前の記憶の中に爽子はいた。鼻の奥に熱い物が込み上げて来ていた。思わず強く目を閉じ合わせた時、電話がピーと鳴った。
　随分長い感じがしたけど、たった3分位のものだったのかと我に帰ると、光る目玉は暗い夜空にポツンと出てしまっていて、同時に雲もただの細長い雲にしか見えなくなってしまっていた。
　チャリンと十円玉を補充する音で爽子が大きく息をついた。
「選手、どう思う」
「どう思うって…、なにが」
「どうした、声が変だぞ」
「少し寒くて、…健太君、ありがとう」
「ん…、俺さ、思ったんだけど、屏岩自体がタメイケドンの化石じゃあないかと思うんだよ」
「エッ、又なにを言い出すのよ」
正雄も耳を疑っている。
「だからさ、屏岩の所でタメイケドンの首が取れて下に落ちちゃったんじゃないか」

爽子は呆れて声も出ない。又ピンク電話がピーと鳴った。
「明日、日曜日だから屏岩へ調査に行こう、1時に迎えに行く」
「ちょっと、ちょっと、なに調べるのよ」
「プープープー」
　屏岩には既に雲も無く、少し高くなったけれど、まだ大きく皓々と光る月に照らし出されていた。

　次ぎの日、三人は屏岩に登った。化石を採集した場所から二曲がり上がった辺りから登り道が付いていた。道は細かったが良く整備されていて草も倒木も無い。くねくねと登り切ると屏岩の上に出た。崖の手前に柵がしてあり展望台のようになっている。
「へー、こんな風になっていたの。私全然知らなかった」
「ここ戦国時代だか、江戸時代だかに砦だったんだってさ」
「車が来れないから、ほとんど人も来ないんじゃないかな」
「それにしては道が奇麗だったじゃない」
「市でやってるのかもな」
「雁落しのじいちゃんかも知れないぞ」
三人はあのおじいさんの陽に焼けた頑固そうな皺顔を思い出して変に納得した。
　ここから見ると扇状に広がった街が一目で見て取れる。健太が柵から身を乗り出して下を見ている。
「ちょっと健太君、危ないわよ」
「正ちゃん、爽子選手見ろよ。なんと無く首から頭みたいにつながっていないか」
そう言われてみれば崖下から細くうねったような盛り上がりが続き、先がポコッと更に盛り上がっている。
「ほら、こう首が伸びて、あの辺りで頭になっているだろう」
健太が手だけじゃ無く、全身で表現している。
「そんな風にも見えるけど、木がたくさんあって良く分からないわね。冬、枯れた時に見るともっとはっきりするわよ」
　爽子がそう言いながら目を街の方へ戻した。西日を受け、川がうねうねと白く光り、雁落しの池も見える。暗く、少し波だっているように見える海からタメイケドンが上がり、溜め池の足跡を付けながらゆっくりとこっちに歩いて来るビジョンが、額を撫でる海風と同時に体を吹き抜けて行く。
　健太も正雄も爽子の脇で同じように前髪を風に流し、西日に目を細め、街を見ていた。

# タメイケドン

http://p.booklog.jp/book/31230

2012年6月3日
著者：大門良一
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/uzuwa/profile

表紙デザイン：セラ・カモン

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/31230

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/31230

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ